

レメディオスソード

傀儡兵C

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

聖王国編何度も読み直してたら、哀れになってきました。需要があるなら続くオリ主もの。

目次

聖騎士との出会い	2
聖騎士の下に	8
力の差と後ろ盾	14
聖なる悩み	21
真なる蘇生	26
ケラルトの復活	32
これから先	38
隠密からの繋がり	45
一旦の到着	51
路銀稼ぎの開始	58
黒幕	64

お茶会	71
明日はきつと良い日	78
モチャ回避	84
新天地での生活	91
チーム	97
念願のミスリルへ	103
ルーン武器	110
調査の依頼	116
マッチポンプの悲しみ	123
守る連呼	129
懊悩の時期	135
茶飲み友達	141
爆弾交渉	147

好きな仲間	231
速達便	224
支援要請	218
腕が痛い	212
王への道	206
茶番でも必死に	200
影から胃痛	193
吸血鬼との戦い	186
鍛錬の重み	179
首輪でも足かせでもなく	173
コウモリの責任	167
王子の姿	161
時々護衛	154

程よい相手	305
強敵	299
冒険準備	293
エ・ランテル	287
予感	281
登山	274
王国編後	
これから	268
力の差	261
勧誘と誘い	255
会議の後に	249
開戦の前に	243
剣となりて	237

ほうれんそう

入り口

先鋒に

望まない永遠

前哨戦

猫・猫

時の流れに

事務と得意な彼女と

竜王国へ

港町にて待機

312

318

324

330

334

338

343

350

356

362

聖騎士との出会い

かつて一世を風靡し、12年間にも及ぶサービスの末終了を迎えたDMMO—RPG『ユグドラシルへYggdrasil』その最後の瞬間にまで残っていた一部の人々は異世界へと転移することになった。

彼……セシルもその一人だった。実際には寝落ち寸前までブーツとしていたら、その世界に来ていたという方が正しい。当初は混乱していたものの、原始の世界で様々な冒険をした。しかし、それも遙か昔のこと。

人間の世界が安定するにつれ、セシルは人間社会についていけなくなっていた。謀略を始めとした腹芸はもともと一般人であるセシルには不可能だったし、『ユグドラシル』から引き継いだ強さに対する様々な感情は重荷だった。

そうして彼は自身のギルドが……最終日にログインしていたのはセシルだけだった……ギルドホームとして使っていた〈翠晶の森〉に良く似た森に引きこもるようになった。

それから幾星霜……エルダーヒューマン〈上古人〉であったセシルは寿命で死ぬことも無く、世捨て人を決め込んでいた。

それが打ち破られたのは人が滅多に来ることもない森に、けたたましい叫び声と騒々しさが迷い込んできたところから始まる。

「待て！　この亜人がああああ！」

久しぶりに聞く人間の声にセシルは驚いた。というかこれは人間の声なのだろうか。怪鳥のごとき高い声は女性のものだが、そこには狂気が多分に含まれていた。

木の枝の上に座るセシルにも気づかずに二人……いや、二匹の亜人が駆けていく。あれは確かバフオルク山羊人という種類で脚力に優れている。しかしやけに後ろを気にしながら走っていく。その後にはバフオルクよりも速く人間の女が走ってくる。

白の鎧を身にまとっているが、それでも先の亜人達よりも速い。余程鍛錬を重ねた戦士なのだろう。

セシルは優れすぎている目でその女戦士を観察していた。目は落ちくぼみ、くまが出てきている。頬もやややそげている上に、口角からは泡を吹き出しそうだ。

「カルカ様の正義のために！」

あつという間に亜人に追いついた女戦士は良くわからない口上とともに、バフォルク達を唐竹割りにした。辺りに血の匂いが立ち込める。

それを確認すると、女戦士は木にもたれかかるようにして眠りについた。どうやら、あの調子で狩りにも似た生活を送り慣れているようだ。

セシルはほんの気まぐれから、地上に降りることにした。

火がパチパチと小気味いい音を立てて、燃えている。その音に気付いたのか女戦士は、目を覚ますなり剣を横薙ぎに振りかぶって来た。

「なっ」

女戦士は瞠目していた。セシルが剣先を指で挟んで止めていたからだ。そこで驚愕のあまり、ようやくセシルをまじまじと見る気になったらしい。髪は白いが、短く綺麗に切られている。同じ白のサーコートは前が開いており、胸甲は黒色の艶やかな金属でできている。

「何者だ！ 貴様っ！」

「むしろ、こちらが聞きたいのだが……俺はセシル。この森に住む……まあ世捨て人だ

な。そちらは名乗らないのかい」

「……私は聖王国の筆頭聖騎士、レメディオス・カストディオだ。世捨て人だと？ 貴様、この世の中でふざけているのか？」

「聖王国？ 世の中？ なんとも世の流れはいささか変わったらしいな」

セシルはレメディオスという聖騎士の勢いにドギマギしながらも、自分がこの森で過ごした年月を思った。随分と人間社会は複雑になっているらしい。

「そうだ！ 今やカルカ様の正義を忘れた輩が溢れかえり、民もこぞってそいつらを礼賛する始末だ！」

「よく分かんが……火にかけてあるスープを飲めよ。ずっと一人だったから味は知らんが」

世捨て人であるセシルにとって、レメディオスの熱意は新鮮だった。どちらかと言えば珍獣を見る目だが、陰謀に疲れて世を離れた人間にとっては正直過ぎる人間は面白かった。

「……で、筆頭聖騎士様とやらが何だつて一人なんだ」

「ふん……かつては騎士団長だったが、今は違う。独自に動けと言われている。だから！ 民が誰も泣かないというカルカ様の正義のために、南部にまで来て来て亜人どもと戦っているのだ！」

あー、とセシルは納得した。要は腫れ物扱いされて、処分されかかっているのだろう。かつて見た人間社会からそれぐらいは推測できる。

セシルは知らないが実際、レメデイオスは本来、聖王国北部にいるはずの人間だ。それが南部にまで来ているとなると、余程居場所が無いのだろう。

「そのカルカ様の教えと言うのを守ろうとしているのか……」

「そうだ。弱き民に幸せを、誰も泣かない国を……そのために私は戦っている……」

温かい飲み物を飲んだためか、次第に落ち着いてきたようだ。それにしてもその教えには亜人は含まれていないらしい。いかにも人間種らしいな、と苦笑する他無い。

「おい、貴様……少しは腕が立つようだな……お前も戦え……正義のために……」

次第にレメデイオスは眠りに沈んでいった。セシルは苦笑して、腰に佩いた直刀を一度鳴らした。傲慢で奇妙な人間だと、そう言っているかのようだった。

聖騎士の下に

レメディオス・カストディオ……彼女のことを簡単に言い表せば、*“迷惑な善人”*にでもなるのだろうか。良い点は行動力があることと、強さ。悪い点は精神的な部分に色々があるが、他者に自分と同じ意見を求めることだろう。

「おい、訓練兵！ さっさと荷造りを済ませろ！」

これである。レメディオス的には既にセシルは徴兵されたものとなっていた。セシルにとっては分からないことだが、聖王国が徴兵制なので抵抗が無いのかもしれない。全ての言動は彼女の中で完結していて、意見を違えれば振幅はあるにしても敵になる。

セシルは長い時間を傍観者として生きてきた。亜人種が台頭して人間が奴隷となっていた時代も、全ては消極的だった。

だからこそ、人間的に問題のあるレメディオスの積極さに惹かれたのだろうか。もつとも見習おうとはまったく思わないが。

「はいはい。済みましたよ。それで、何をどうするんですか？」

「決まっているだろう。瓦解した亜人共の軍勢を追って、切り倒す！　それのみだ！」

グスターボー………はいないんだったな………おい、お前セシルとか言ったな。従者でもないお前を供回りにしてやるんだ。感謝しろ」

「特に感謝はない。言った通り俺は世捨て人でしかないからな。ついていくのはたまたま外を見る気になったからに過ぎない」

「なにイー！」

怖いよ、とセシルは思った。レメデイオスはいつもこのような調子で他人と接しているのだろうか？

こちらの世界に来る前は普通の人間だったセシルとしては、ヤンキーに絡まれたような気にさせられ、多少萎縮する。

しかし、ビルドはやや適当だったとはいえ、レベル100のセシルからすればレメデイオスは戦闘能力的には取るに足らない。おかげで余裕を持って反応できた。

同時にレメデイオスの下に付いていた人間は大変だったろうなど、同情する。

「はいはい。俺から敬意を得ようとか服従させようとかは無理な話だ。ただ、アンタの言うカルカ様の正義とやらが見たいから付いていくのさ」

また怒るかな。と内心で身構えるセシルだったが、予想外にレメディオスは上機嫌になった。

「そうか。カルカ様の正義にな。無礼だが、中々見どころがありそうだ」
「はあ……」

セシルはレメディオスという女の精神構造を段々と把握してきていた。これは慧眼というより学校でも職場でも一人ぐらいはいるタイプの人間だ。セシルもこのヘUGドラルシルの肉体でなければ、お近づきになりたいとは思わない。

だが……この肉体であるからこそ、レメディオスの気性に付いていこうと感じさせるものがあつたのは事実だ。

もし、絵空事に圧倒的な力が加わればどうなるか。それを見てみたいと思ってしまうのだ。常に傍観者であつたからこそ、間近で見てみたい。

要はセシルもまた自分勝手な人間なのだ。レメディオスを盾にして見物に出かけよ

うということと、変わらない。

「それじゃ、行きましようか聖騎士様。今日も亜人を追いかけるんで？」
「当然だ。やつらがいれば、民は泣く」

こいつが騎士団長だった頃は団員が泣いてたんじゃないだろうか。そう思いながら、セシルは後に続いた。

そうして今日の目的である鉄鼠^{アーマツト}人の巢に出かけることになった。

「アーマツトというのは、どういう種族なんだ」

「なんというか二足歩行のネズミだ。そんなことも知らんのか。おい、グスターボ……いないんだつたな。体毛が硬い。以上だ」

「……ああ、アレか」

以前に亜人の大侵攻があつたとかで、アーマツトはそれに参加していたらしい。それゆえアーマツトの巢は復讐対象となっている。そこを潰していくのはレメディオスに

任された大役という名の雑用だった。

アーマットの巢は地下にあった。急ごしらえといった様子で、入り口も開いたままだ。湿った土の感触を感じながら勝手に下っ端にされたセシルが先に降りる。

流石に亜人種ということで入り口には二匹のアーマットがいたが、セシルが剣を一閃するや音もなく崩れ落ちる。

その後、上に合図を送りレメディオスが入ってくる。アーマットの死体を見てよくやつたと頷いた後、アーマットの集落を見れる位置に行く。亜人種なりの平和な集落。しかし、それを見てレメディオスの目はらんらんと輝いた。

そうだ。その目が見たかった。狂気に彩られたような、前進の意思しか無い輝き。予想通りに、レメディオスは突撃した。その後にくよくよ、わざとゆつくりとセシルは進む。別に狂宴に参加したいわけではない。ただ、その観客になりたい。

セシルに比べれば劣るとは言え、レメディオスの力は圧倒的だった。ひたすら切り裂いて行く。セシルは討ち漏らした敵を逃さないよう愛刀を時折、振るう。特に恐慌したアーマットが逃げないようにする方に力を入れる。

レメディオスが感知しているかは知らないが、入り口にもどこかへ続く穴にも一瞬で移動して斬り伏せている。

そして、狂気の聖騎士にアーマットの平穏が奪われるのをセシルは眺め続けていた。

そこにあつたのは長年生き過ぎたことによる虚無と花火を見る目だった。

力の差と後ろ盾

レメデイオスは見ていた。自分が勝手に拾った男の剣さばきと実力を、意外なことに見ていたのだ。レメデイオス・カストディオは人格に問題はあるが、戦闘では優れた直感を発揮する。ゆえにまさか、と信じられずにいた。このセシルという男が完全に自分より上であると。

アーマツトをあらかた掃除した後のことだ。地響きとともに、穴から巨大なアーマツトが転がり出てきた。ここが集落なのであれば、その首領だろう。

「私が……！」

そう。ジャイアント・アーマツトは他のアーマツトよりも遥かに強い。亜人種の勇者達に次ぐレベルだ。それでもレメデイオスには勝てる自信があった。実際に過去の戦いではその強者たちと五分に戦ったのだ。そこから漏れた敗残者ならいくら特別な個体でも、一対一なら負けはしない。

「念を入れていくかね……スキルへシャープ・エッジ」
「……は？」

あまりにも呆気なく、巨大な肉体の敵は、胴から二つに分けられて最後の地響きをあげた。何だ、これは？ レメディオスは勝てる自信があった。だが、それは一撃でという意味ではない。

野営した時、自分の剣が指で止められたのを覚えている。疲弊した体だったからだと思っていたが、そうではなかった。

このセシルという剣士はあまりに強すぎた。レメディオスの嫌うあの王のように……

（ヤルダバオト、アインズ・ウール・ゴウン魔導王、そしてこいつ……コイツラは何なんだ。この世のものじゃあ無いんじゃないか？）

頭が単純と思われ続けてきた女騎士は、皮肉にも真相を言い当てていた。

「これで終わりかね。帰るのかい、騎士様」

「んで……」

「は？」

「何でお前はあの時いなかったあああああ!？」

レメデイオスは過去に絶望していた。こんな男が近くにいたのなら、なぜ聖王国のために戦っていないかった？ おかげで自分があの魔導王を招き入れ、国は変わった。

いや、そもそも……セシルが聖王国の住人という自覚があったのならヤルダバオトに主君と妹を殺される事自体が無かったかもしれない。

理不尽なことを言っている……いや、言っていない。理不尽なのはこの男の方だから。

「世捨て人だと！ ふざけるな！ 貴様のせいだけでだけの民が苦しんだと思っている!？」

「おいおい……落ち着けよ」

「落ち着けるか！ 貴様がいれば、あのヤルダバオトだって倒せていたかもしれないじゃないか！」

「そんな事言われてもな……大体、俺は聖王国自体知らなかったし」

レメディオスは悔しくて兜を地面に叩きつけて、何度も地団駄を踏む。こうして真正面から見れば分かる。この男は生物としての格が違う。そんな存在が自分に今更協力している。そんな状況が耐えられない。

レメディオスはアーマットの集落を壊し尽くすまで八つ当たりを続けた。

「……で、落ち着いたか？」

「ああ、腹立たしいがな」

まだ怒っているらしい態度にセシルは感心する。あれだけ破壊すれば普通は精神が抑制される。セシルにとっては羨ましいほどだ。

「分かっているだろうが、お前さん達の過去に俺は謝らんど。その時いた者で何とかしなければならなかったんだからな」

知っていれば参戦したかと言われれば、セシルはそれも怪しい。元々人間社会から距離を置いて、無限の寿命を浪費していたのだから。それを思うと現在はレメディオスの

炎のような気性につられる虫のようなものだ。

「分かるものか。力ある者が弱者を助けるのは当然のことだ」

「自分たちを弱者だと規定するのもどうかと思うがな」

レメデイオスは今、無い頭で考えている。今更強者を見つけ出してどうするかと。時間には巻き戻らない。忠誠を誓った聖王女も妹も死んだ。だから自分で考えなければならぬ。

そうして思いついた。カルカ聖王女が倒れても、その思想は残せる。そう。この南部だからこそ可能だ。

大きく傷ついた北部では、忌々しい魔導王の影響を受けた教えが広がっている。だが南部は違う。貴族勢力が未だ根強い南部では、下剋上を招くその教えは忌避されている。

そこでレメデイオスがどう権力を握るのかは、自分でもさっぱりだったが。

「おい、償いはしてもらうぞ」

「何だ。また亜人とかと戦えと？ 種族の絶滅なんかは土台無理な話だぞ？ ちよつと

残ってしまえば、また繰り返すだ」

「違う、そんなことじゃない」

そのようなことに耽るのなら、防壁の外……東のアペリオン丘陵で行うべきだ。そこにしたところで、ヤルダバオトと魔導王の戦いで、全種族が混乱の極みだろう。いずれ利用すべきかもしれないが……

「これから私のもとで戦え。全力でだ」

「まあ50年ぐらいなら良いけど……」

セシルの種族は寿命が無いに等しい。ゆえにこの程度の頼みになってしまふ。レメデイオスには冗談に聞こえてしまったが、レメデイオスにセシルが裏切らないという直感があるのは確かだ。

そうカルカの支配でレメデイオスが武力的後ろ盾になっていたように、セシルにレメデイオスの後ろ盾になってもらう。それはすなわちカルカの理想の後ろ盾である。

自分の弱点である頭の弱さを補う者を見つければ……「弱き民に幸せを、誰も泣かない国を」という教えを後世に伝えていけるだろう。

……南部とカルカの対立があつたことや、あてのない人材集めだということ。それにセシルが飽きないかを考慮していない、レメディオスの夢想が始まつた。

聖なる悩み

南部の要衝である都市デボネ。先の戦役でも前線になると目されていた堅牢な都市である。その宿屋兼酒場でレメデイオスは黄昏れていた。

その理由は簡単で、自分の人望の無さにあった。自身の頭脳となるような人材集め、貴族達との折衝、全て失敗している。

「なぜだ！ カルカ様の想いの分からん奴らめ！」

水の入った木製のジョッキを机に叩きつけると、周囲の客たちすら迷惑そうな目で見ていた。とても元聖騎士団長とは思えない。

それも当然で、レメデイオスは貴族達からの評判は元々悪い。ヤルダバオトによる襲撃以降、より頑なになった後は更に悪くなった。

加えてレメデイオスの妹であったケラルトが対立貴族に対して容赦なく対処してきたこともあり、いまではレメデイオスにその憎悪もプラスされていた。

向かいに座って、荒くれぶりを観察していたセシルは興味深そうな顔をするだけだ。

聞けば既に新たな王が立ち、レメディオスの慕う前聖王は南部を掌握しきれていなかったという。そうなればどの階層の人々も新しい王にすり寄るのが普通だろう。

そんな単純なことが理解できず、本気で怒っているレメディオスは枯れたセシルにとって飽きない存在だ。

「以前、お前さんを補佐していた人物とかは使えないのか？」

「グスターボか。あいつが今は騎士団長だ。それに軍略などでは頼みになったが……」

政略的には向いていない……というより分からないのだろう。この国の聖騎士は実戦的な役割が大きく、いわゆる貴族としての騎士ではない。期待するだけ無駄かもしれない。

「とすると、お前さんが短気を抑えるか、立場を変えるかということになるが……」

優秀で小回りの利く存在は権力者にとっては欠かせないものだ。レメディオスが今までの確執を超えて、怒りを抑えて忠勤すれば気に入る貴族もいるだろう。

後はレメディオスが完全に南部寄りの存在になる場合。これが一番手っ取り早いだ

ろう。一般的な兵相手なら文字通りの一騎当千だ。北部と南部が対立しているというのなら、諸手を挙げて歓迎される。

「乗り気じゃなさそうだな」

「当たり前だ。聖騎士は聖王に忠誠を誓う。今はカスポンド陛下だが……」

「それでも前の王が良いという思いを捨て切れないか。難儀なことだな。だが、どつちかをはつきりと切り捨てなければ、苦しむだけだ」

「私の苦しみなどどうでもいい。カルカ様の正義が残り続けることが重要だ」

なら切り捨てる側は決まっているじゃないかとなるが、レメディオスにとってはそうではないのだろう。将来的に北部と南部で争いが起きたりすれば、どちらにつくかで煩悶するに違いない。心情的には北部、理屈では南部といったところか。

「じゃあ後は地道にやるぐらいしかないぞ？ 何でも南部の東には大森林があるそうじゃないか。その開拓を助けながら、教えを広めていくとか」

単なる新興宗教に過ぎなくなる気もするが、そこは言わないで置く。

「駄目だ。教えが根付かないし、時間がかかりすぎる」

「そういうところは分かるのかよ。率直に言つて、カルカ様本人がいたところで、その正義は根付かないことも分かるだろ？」

「……っ！」

セシルは思いつきり水をぶっ掛けられた。それだけ痛いところを突かれたということなのだろう。レメディオスは地面を踏み鳴らしながら、店を出ていった。

前金で払っていて良かったな、と思いながらセシルも外に出る。城壁への階段を見つけて、そこに座ったセシルは珍しく悩む。

現状を打破できるかはわからないが、レメディオス自体を幸せにする方法ならあるのだ。

セシルのビルド……つまり、職業構成は信仰系戦士職である。いわゆる殴りヒーラーと呼ばれる存在で、圧倒的な回復力を基にしたソロプレイ向きのプレイヤーだ。余談だがバフも回復も一人ですべてくるためPVPなどでも一対一なら果てしなく鬱陶しい。

それはともかく、戦士でありながら魔法も習得可能というわけでその中には蘇生系の魔法も含まれる。つまり死体の一部でも残っていれば第9位階魔法・真なる蘇生で恐

トゥルー・リザレクション

らくは復活可能だろう。

だが、傍観者としてのセシルが訴えかけてくる。それは本当に良いことなのかと。死すら超越した世界は確かに素晴らしいものだろう。だが、限りあるからこそ輝くものは消えてなくなる。現在のレメディオスの暗い輝きも消えて無くなってしまうのだろうか……

そしてセシルは蘇生術をばらまく趣味は無い。である以上、レメディオスへの贈り物は完全に特別扱いになる。

「第一……蘇ったやつらの立場はどうなる？」

レメディオスの主君、聖王女カルカ。そして妹ケラルト。元々かなりの権力者であり、蘇らせたのならば争いの種になるか日陰の身になるか。ついでに言えば彼女らが復活を望んでいるかも分からない。

何より……自分も彼女らの運命に連動して、世界と無関係でいられなくなる。あのうんざりするほど長く関わった社会に久方ぶりにご帰還となるのだ。

世捨て人という名のプレイヤーは、有名な思考のポーズを取ったまま動かなくなつた。

真なる蘇生

現在、セシルは透明化インヴェイジビリティをかけた状態で、飛行フライを使用していた。どちらも位階の低い魔法だったためセシルにも使うことができた。

そうやって眼下に収めるのは聖王国の首都ホバンス。目的は元聖王女と元神官団団長の聖体……ぶつちやけ遺灰である。それらに第9位階魔法・真なる蘇生トゥルー・リザレクションを使い、蘇らすことにある。

遺体が損壊していても復活させることのできる真なる蘇生トゥルー・リザレクションだが、体が灰の場合、使用者の近くで復活するのか、遺灰のある場所トコロで復活するのか分からなかった。

だから、これから遺灰のある聖廟まで侵入しなければならぬ。しかし、セシルには場所が分からないため、地上のレメディオスが到達するまで目立たずに飛んでいるわけだ。

……セシルが真なる蘇生トゥルー・リザレクションを使えると知った時のレメディオスの荒れようは大変なものだった。まあ黙っていたのは悪かったので、というズレた思考でセシルはレメディオスの仕打ちを恨んではいない。

むしろ蘇生に賛成だったことは意外だった。復活させても社会的地位はそうはいか

ないのだが……

地上に見えた松明の火をめがけてセシルは降下しはじめた。ここからは泥棒まがいの仕事になる。宗教色の強い聖王国では聖廟にも聖騎士が入り口を警備している。それを静かに突破しなければ、こちらの所業がバレる。

「聖王女様と妹の墓参りに来た。通せ」

「い、いえ、いくらレメディオス様でも、許可がなければそのう……」

「はつきりしないやつだ。通すのか、私と戦って通さないのか？」

「いえ、少しだけ忘れます！」

「よろしい」

よろしくないだろ、と言いたくなるやり取りを経て聖廟の扉が開いた瞬間にセシルは扉の隙間へ滑り込んだ。あの聖騎士は確実に覚えてしまったし、あとで報告に行く可能性が大きい。

「サイレンス
静寂」

範囲内の音を消す神官の低位魔法を使い、レメディオスの後を付いて行く。聖廟の中は石造りで平らな石を使ってできているが、装飾も無く、寒々しい印象だった。

一時的に透明化を解いて、音もなく進んでいく。足音がしないというのは奇妙な感覚だった。セシルはユグドラシル時代にもレンジャーのマネごとなどしたことがないのでこれが初の体験だ。

レメディオスも違和感があるのか、時折こちらを見たり、足を床にコツコツとつけて落ち着かない様子だ。

まず辿り着いたのは神官団長の墓所だ。王家の墓所はもつと奥にあるらしい。

「~~~~~」

取手の付いた壺をレメディオスが持ち上げてなにか言っていた。恐らくそれが妹、ケラルトの遺灰なのだろう。ここが問題だ。理想で言えば何処かへ持っていく、離れた場所です蘇生させたいが、聖廟の中から物を持ち出すというのは非常に見た目がよろしくない。流石にレメディオスの恫喝でもどうしようもない。

やむを得ない。ここで復活させ、透明化と静寂でイグワイシビリテイ サイレンスゴリ押しする他は無いだらう。

「トウル・リザレクシヨ
ン」
「真なる蘇生」

神々しい光が辺りを包む。聖廟が石造りで光が漏れないことに感謝するしかない。しばらくすると、レメディオスに良く似た、しかし長髪の女性がその場にへたり込んでいた。

レメディオスはそれに抱きつき、滂沱の涙を流していた。妹が困惑していることと、音がないことで少し台無しだが、感動的な光景と言えらるだろう。

「――！」

今度はセシルが音もない叫びを出して、レメディオスを妹から引つ剥がした。感動のところ悪いが、あと一回行わなくてはならないのだ。

レメディオスの意外な一面を見たが、涙を垂れ流させたまま、先頭を行ってもらおう。そしてたどり着いたのは恐らく霊廟の中央部分に位置する間。その中で一番入り口から近い石棺をレメディオスはバシバシと叩いた。

セシルが剛力がかつ慎重に蓋を外すと、副葬品と共に先程より装飾が施された壺が入っていた。

トウル・リザレクシオン
「真なる蘇生」

再び煌めきが場を満たすが、石棺の中で出現していく女性もそれに劣らない金色の髪を持つていた。前聖王女カルカ・ベサーレス……これで後戻りはできない。現在の政権を脅かす鍵を手に入れたことになる。

ケラルトとレメディオスはその前に片膝を付いて、頭を下げている。カルカは困ったように周りを見渡し、セシルと目が合った。セシルは肩をすくめて答えとし、ここから早く出たい気持ちを表現した。

その後、石棺の蓋を丁寧に戻し、墓所を後にするべく動き出した。門衛の騎士を魔法で何とか誤魔化し、3人の美女と一人の男は首都を後にした。

「うっ、ふっふ、なるほど。事情は分かりました。それにしても。貴方はよく姉様について行きましたね」

どうもレメディオスとは違った方向で問題がありそうな話し方をするケラルトに、セシルは苦笑した。ここは南部のデボネの宿屋だ。部屋を借りて事情を説明し終えたと

ころだった。

「ですが、時期の悪い蘇生ですね……お兄様とは争いたくありませんし、配慮に感謝します」

「え、なんでだ？ 堂々とカルカ様が聖王女に返り咲いて、ケラルトも神官団団長になればいいじゃないか」

レメデイオスの発言に全員が盛大に溜息をもらした。

ケラルトの復活

ヤルダバオトに襲撃された日を忘れることはできない。城塞都市カリンシャでの戦闘は悪夢そのものだった。紅蓮の炎をまとった悪魔がただ歩いてくる。それを止めることができないというより、何をしても意味が無かった。

攻撃はかすり傷一つ与えることはできず、防御も拳一つで全てが霧散する。ただただ圧倒的だった。さらには速さにおいても転移術で上回れ、逃げることもすらできなかった。

逃げた先でヤルダバオトの一撃で柔く崩れ落ちた、部下たちに至っては全員が即死していた。辛うじて生きのこった私は身をよじりながら、星が落ちているのを見ているしか無かった。

もつともそこで生き残っても意味はなかった。悪魔としては……という基準で優しい死が与えられた。首をはねられたのだ。後にその首が悪魔に利用されるとは思っても見なかった。

「~~~~~!」

間違はなく終わったはずのケラルトの人生。そこに光と意思が差し込んできた。時間感覚は無い。ただ、神官としての知識から蘇生の術では無いかと手を伸ばして、闇を浮上した。

結果は予想通り、復活の呪文であつたらしく、カリンシヤではなくホバンスの霊廟で目覚めた。体力が回復したわけではないので咳き込んだが音はしなかった。

静寂だ。そう思った瞬間、目の前に立つ人物が抱きついてきた。愛する姉、レメデイオスだ。こちらからは突然出会ったに等しいが、姉の様子からして随分と時間が経っているらしい。

姉の後ろに白髪の男が立っていた。姉に死者復活レイズデッドなど使えるはずもないので、この男がやったのだろう。

「~~~~~」

静寂は無差別に音を消すため、会話が成立しない。だが、まだ行くところがあるらしい。それにしても、この男は何者なのだろう。姉が雇った冒険者だろうか？ 死者復活レイズデッドは第5位階魔法。冒険者の強くないローブル聖王国では、使える冒険者など聞いた覚え

が無い。

感謝と同時に警戒が湧き起こる。そんな強者が協力してくれるなど、姉に何があったのだろう。静寂サイレンスにせよ死者復活レイズデッドにせよ信仰系の魔法なので、極端な悪人ではないのだから……姉を先頭に道を進む。体力の低下で息が荒れているが、思考ははつきりしていた。

この道は、まさか……王家の間。となると、男が行おうとしていることには察しが付いた。そして、あの方も命を落としていたのだと、守りきれなかったのだと恥にも似た感情が渦巻く。

石棺の中身は灰だった。一気に力が抜ける。これでは蘇生などできるはずはない。絶望と諦念に身が凍るが、男は平然と呪文を呟いた。

これほど神々しい光景は見たことが無かった、伝説の不死鳥のように灰から愛すべき主君が蘇る。片膝をついて、このときばかりは男のことを忘れて、主君の再臨を出迎えた……

「……はっ！」

回想と首を切られた夢で目が覚める。ここは南部の要所、都市デボネの安宿だ。思わ

ず首のあたりをさすつたがしつかりと首は付いていた。

最低限の身だしなみを整えて、宿屋の二階から降りると姉のレメディオスが満面の笑みで出迎えてくれた。

「おお、ケラルト！ もう起き上がって大丈夫なのか？」

「ええ、姉様。体力が消耗していただけですから……ところで、私を蘇生させてくれた殿方はどこへ。お礼を言いたいのですが……」

「ん？ セシルか。あいつなら城壁近くの階段にいたことが多いな。まあ見どころがあるやつだ。聖王国の人間なら当然のことだ。あらたまつて感謝など必要無いんじゃないか？」

「それはちよつと……」

いつもの姉の考えなしに、癒されるが……色々と確認しておきたいことがある。後は人間として礼をいうのは当然だろう。

外に出て、城壁のあたりを探すと白髪の方はすぐに見つかった。

「あんたか……蘇生しても体力はそう回復しないから寝ていたほうが良いぞ」

「いえ、もう大丈夫です。改めて蘇生に関してお礼を……」

「いや、それも不要だ。あんたの姉の勢いに負けただけだからな」

奇妙な人物だった。蘇生の礼となれば莫大な謝礼が必要になるのが普通だ。それも言葉による礼もいらないととなると、怪しささえ感じる。

「それにしても……灰からの蘇生など聞いたこともありません。死者復活レイステッドが使えることも驚きですが」

「ああ、死者復活レイステッドじゃなくて真なる蘇生だ。トゥルー・リザレクション肉体の一部でも蘇生が可能だ。第9位階魔法」

「第9位階!? そんなおとぎ話みたいな話が……」

「プレイヤーのマジックキャスターなら大抵は使えるよ。たまたま俺が天麩羅ビルドだっただけ」

「てんぷら?」

「あーこつちの話だ。ともかく、俺が真なる蘇生トゥルー・リザレクションを使ったのはたまたまだよ。それとも蘇生は迷惑だったか?」

「い、いえ。ありがとう……」ございました」

知らない言葉が数多く出てきたが、嘘は言っていないように見えた。ケラルトは神官として畏怖にうたれながら、それでも信じきれずにいた。

第9位階魔法……第6位階でも夢物語だというのに……これからどうセシルと接すればいいのかケラルトには分からなかった。

これから先

朝、小さく息を吐いて跳ね起きる。そして何よりもまず鏡へと向かう。以前は別のことを考えながら鏡を見ていたが、今は違う。確認だ。

顔が潰れていない。鼻がある、歯も残っている。一回だけでは安心できず、何度も、何度も……カルカ・ベサーレスは蘇った日からずっとこうして朝を過ごしている。ふと、鏡を見れば血まみれな自分がいるような気がして……あの紅蓮の日以降、安心できずにいた。

「お前さん方の主君は大丈夫かね？」 人前では出さないようにはできているが、心が折れているような気がするな。真なる蘇生トウル・リザレンションする前に随分な目にあつたようだ」

言葉とは裏腹に平坦な口調でセシルは言う。いくら蘇生術でも、心のケアまではできない。今の彼女に必要なのは精神に作用する術だろうが、それで治るといふ保証はない。

「そうですね……。貴方の魔法でどうにかできませんか？」

「忘却させるような術はあるが、記憶がぶつ切りになって、精神に支障を来すおそれがある。完全に嫌な記憶だけを斬るような真似は保証できんよ」

どうにもセシルはケラルトに試されているような気がしてきていた。第9位階魔法が使えると知られたときからずっとだ。世捨て人でいた期間が長すぎて、物事を隠すようなことが下手になっていた。

ただ、話した内容に嘘はない。そんなことを実験するのは流石に躊躇われるし、試したことは無かったのだ。

「大丈夫だ！ 民のために立ち上がれる方だからな！ それとも私の言葉を疑うか？」

「疑うというか、これからのあんた達を心配しただけだ」

「む、どういう意味だ？」

「この前も同じ話をした気がするんだが……。これからどう立ち回るか、ということだ」

この3人が仲間として上手く回っていた理由、それが分かる気がした。いささか……。というよりかなり頭が悪いレメディオスが一種の清涼剤になっていたのだろう。

「お前から聞いた話では、既に新しい王が立っているのだろうか？　そこに蘇りましたと言つて、のこのこやつて来たら良い方で対立、悪ければ偽物ということで処刑や暗殺だ。だから、これからどうするのかという話になる訳だが」

「うつつつぶ。だから、蘇生の後、南部まで運ばれたというわけです」

「むう、私なら聖王女様が戻ってきたら歓迎するんだがな……」

カルカの治世は良くも悪くも問題無かった。確かに中には喜ぶ者もいるだろうが……既に権力の座に就いている新王と契約や約束事をした者の方が圧倒的に多いだろう。

そしてそれは、悪いことではなく普通のことだ。変化する情勢に民衆や商人も対応しようとしているのだから。

「私がどうしましたか？」

一旦落ち着いたのか、身なりを整えたカルカが2階から降りてきた。格好はケラルト同様、地味な服装に変えているが、それでもその美貌は際立っている。

「あんたというか、あんた達の話だな。これからどうするかってね。いつまでもここに
いるわけにはいかないだろ。後、俺は文無しだからな」

セシルはあけすけに答えたが、あくまでこちらの世界の金の話であって、ユグドラシ
ル金貨ならまだまだインベントリに入っている。といつても長い年月で大分目減りし
てしまっている。これ以上は使いたくないというのが本音だ。

「このまま、聖王国に留まれたらどんなに良いでしょう。正直なところ、聖王国の民のた
めにできることがしたいのですが……今の私の存在は邪魔でしかありません。それに、
カスポンド兄様と争うのは……」

「避けたいか……国を出るにしてもあてはあるのか?」

「身を立てる方法はともかく、行き先としてはリ・エステーゼ王国しかないでしょう
ね。地続きですし、船も出ています」

東にはスレイン法国もあるが、間にアペリオン丘陵が広がっており貿易は断絶してい
る。国を出る場合、行き先は最初から決まっていた。

「納得いかん。なぜ国を追われなければならないのだ」

「いるはずのない人間だからだろ。あんたはどうするんだ。こつちでは社会的にまだ死んでないだろ」

「……まあ出奔には抵抗があるが、カルカ様の傍が私の居場所だ。今度こそ二人を守り抜く。もちろんお前にも来てもらおうぞ訓練兵」

「……いや、まあ着くところまでは行くつもりだったけど、あんた本当にいい性格してるな」

いい性格をそのままの意味で捉えたのか、レメデイオスはふふんと笑った。本当に飽きない女騎士士である。この調子だとセシルははずると、一味から抜け出せないような気がした。

夜になり、明日出発というところでセシルはカルカを見かけた。窓を開けて夜の星空を見上げているようだった。

「邪魔するぞ」

「セシルさん……」

「怖いのか？ 眠るのが……」

「いいえ、そんな……いえ、怖いです。あの日のことは意識を失っていたというのに、なぜか全て覚えているんです。足が焼けるのも、顔が潰れるのも……」

「そうか……蘇生は余計なことだったか？ あの時、俺はレメディオスの意思だけ汲んであんた達を蘇らせてしまった」

「いいえ、ありがとうございます。あんな形で死ぬなんてごめんですよ。ただ……怖いんです。あの日のことも、それをあつさりと覆ってしまった貴方も……こんなことを言うてはいけないんでしょうが……」

「それが正常な反応だよ」

セシルは思う。プレイヤーは積極的にこの世界の物事に干渉していいのかと。だが、自分は聖人でもなんでも無い。誰かを助けたくなくなるし、排除したくもなる。一体どうすれば良いのか。

あの迷わない女騎士が羨ましかった。

「邪魔したな」

セシルの方こそ眠れそうになかった。

隠密からの繋がり

レメデイオス・カストディオは良くも悪くも有名な人物である。先代聖王女カルカの両翼の生き残りであり、カルカ亡き後はその苛烈さで知られてきた。

聖王カスポンドはその彼女が戻ってきていないという報告を受けて、眉をひそめる。実はこのカスポンドは魔導国が用意したドツペルゲンガーであり、彼の地の王のために働いている。

あれが聖廟に無理やり押し入ったという話を聞いた後で、この未帰還である。既に聖騎士団団長で無いにせよ、レメデイオスは一定期間内に首都へ帰り、首尾を報告する義務がある。

カルカを失った彼女は精神的に異常を来しており、ある程度の暴走はあり得る。しかし、タイミングが良すぎる。

「ハンゾウ殿、お願いできますか」

和風の服装をした人間型モンスターが一瞬で消え去る。レベル的にもドツペルゲン

ガーとは遥かに差がある存在であり、諜報に特化している。

聖廟から何かの情報を持ち帰り、あるいはそれをもとに追跡までやってのけるだろう。

カスポンド・ドツペルは念のため、上司に計画の修正をする必要があるかと問う考えを練り始めた。

一方で復活したカルカ達一行は如何にして、リ・エステイーズ王国へと向かうか思案していた。一番近い都市はリ・ロベルで、聖王国との航路もある。

しかし、レメデイオスを除いた一行は身一つで、出国のための鑑札なども何も持っていない。と、なればいささか情けないが陸路を取って、自分たちの国の砦をすり抜けて行くしかない。信仰系魔法なら、以前使ったように透明化や静寂がある。最悪、飛行で山の間を縫って行っても良い。

「出奔については何とかかなりそうだな。しかし、お前さん方は無事向こうに付いたとして、どうやって生きて行くんだ？」

セシルは元の通り隠者暮らしで構わないが、この三人はそうもいかないだろう。かと

いつて身分を明かすのとはばかられる。

「そうですね……偽名で冒険者や請負人ワーカーなどになるしかないでしょう」

「なんだ、その冒険者っていうのは」

「これだから世捨て人気取りは……常識というものが無いな」

「いえ、セシルさんも姉様には言われたくないと思いますが……冒険者やワーカーは依頼を受けてモンスターの討伐をしたり、貴重な品物を獲得する職業ですね。それで得た報酬で生活する者たちです」

「ほうほう。まあそれなら腕前があれば大丈夫だろうが……」

セシルは説明を受けて理解はしたが、微妙な気分になる。レメディオス達のレベルは大体が30程度。レベル100のセシルからすると、不安に思えて仕方がない。セシルはこの世界の基準を思い出せなくなってきていた。

「カルカ様にそのような仕事をさせることはできません。何不自由無い暮らしをするまでは私と訓練兵が戦えばいいことだ」

「素で巻き込んできたな……俺が断るとは考えないのか」

「なに？ 断るだと？ 聖王国の民として、そんなことが許されると思っっているのか」
「だから俺は聖王国の民じゃないって……」

一行は徒歩でリ・ロベルまでの道のりを行くことにした。馬を買うというのも考えたが、そのための資金にはセシルが手持ちのアイテムを売らねばならない。

手伝う気は段々と起こってきていたが、損をするつもりはない。加えてセシルのアイテムはこちら側の世界の物とは違う。ユグドラシル産のアイテムを売れば足が足りよう。

こうして、必要最低限の物だけ持った旅になった。カルカ達三人はフード付きのマントで姿を隠しながら歩いている。

そうした生活が3日ほど経った頃だろうか？ セシルはピタリと足を止めた。首筋にひやりとするような感覚がある。これはスキルでも何でも無く、長く生きたことによる感覚だ。

「お前さん方、できるだけ走ってここから離れろ」

「何か、セシルさん？」

ケラルトが訝しげに問うてくるが、説明している暇は限られていた。

「追手だ。それもかなり強い。レメデイオスも意地でも連れて行け、こつちに残られると邪魔だ」

ケラルト達が走り出したのを見届けた後、セシルはしばらくその場に留まった。気配はこちらの警戒ぎりぎりの位置にいる。隠密に長けた相手のようだ。

わざわざこの一行を追ってきた上に、人数を知られた。ひよつとすると方角から行き先を予想されるかもしれない。

こうなると相手の手は逃げの手を打つだろう。ならば――

「正解か分からないが、排除させてもらおう」

セシルは気配の方向に向けて、全力疾走を開始した。相手の気配が離れるような動作が感じられた。隠密職が本気で隠れたならば見つけるのは難しい。

「とでも思ったか。生憎、隠れている場所を当てるのは得意なんだ」

平野にぼつんとある林。そこにセシルは横薙ぎの斬撃を見舞った。すると、林がまるごと無くなった。同時に飛び上がる相手。それも読んでいたセシルは既に跳躍していた。

「こいつ、確かユグドラシルの……！」

レベル80台のヒューマノイド系モンスター。だが、隠密に特化した反面、同レベル帯のモンスターより戦闘能力は低い。

互いに身動きが限られた状況で、セシルはハンゾウを視認した。飛行フライを唱え、そのまま空中で交叉するような一撃で、相手の足を切り取った。機動力が失われた上、得意の隠密を奪われたハンゾウの運命は決まっていた。

同刻——遙か彼方の地である人物が呟いた。

「ハンゾウの反応が消えた？」

一旦の到着

ナザリック地下大墳墓と呼ばれる建造物の執務室で、その人物はコツコツと指先で机を叩いて音を立てていた。いや、人物と言つて良いのか…… “彼” は人ではなかった。骨がそのまま動いている。

今はアインズ・ウール・ゴウンと名乗り、同時に魔導王と呼ばれる存在であつた。

（ハンゾウが倒された……それも聖王国に配置していたハンゾウが。これまで見てきた情報では、レベル80台のハンゾウに勝てる現地種族はいない。これは、ひよつとして釣れたか？）

アインズは意を決すると腹心に伝言メッセージを送つた。智者である彼ならばきつとよい方策を立案してくれるだろう。

リ・ロベルを目指していたカルカ一行は徒歩で北寄りに進んだ後、山すそに沿うような形で移動した。セシルによって飛行フライを付与され、低空飛行で自分たちの国の関所を避

けた。

女性三人、特に王であったカルカは複雑な思いであった。まるで、自国から捨てられたように感じたのだ。そして、それは決して間違いではない。社会的には三人の居場所は既に無いのだから。

死人から生者に戻るといふことは、そういうことであった。

「しかし、アレ程のモンスターが追ってくるとは、リ・ロベルとやらに着いても安心はできないかもな」

「私が戦っても良かったんだが……それほど強いのか？ 随分と余裕そうだが」

レメデイオスの発言に頷く。

地面に叩き落とした後もしばらくは戦闘が続いたほどだ。正直なところレメデイオスでは傷一つ付けられるかさえ怪しい。セシルもあれほどの戦いをした覚えは、こちらに来てから数えるほどしかない。

「ですが、なぜモンスターが追手に？ 私達を蘇らせた影響にしてはおかしく無いですか？」

「おかしいどころではありませんよ、カルカ様。普通なら騎士や兵が追ってくるはずですよ」

モンスターが追手に、というのは確かにおかしかった。ヒューマノイド系といっても、モンスターはモンスターだ。それがカルカ達を追ってくるということはモンスターを役とする存在がいることになる。

カルカの復活がバレたととなると、やって来たのは首都方面だと考えるのが普通だろう。

「聖王国の中枢はモンスターを隷属させてるのか？」

「そんなわけが無いだろう！　これはきつとアレだ、あの骨野郎の魔導王の差し金に違いない！」

「でも、魔導王がそんなことをする理由は……？　聖王国を襲ったあの、あのヤルダ……バオトを倒したのも魔導王というではありませんか」

特定の言葉に震えが走ったカルカの肩にセシルは手を置く。今は大丈夫だ、というように。そうだとヤルダバオトは倒された。そしてこの男を信じるしか無い。

「きつと、ヤルダバオトと魔導王はグルだったんだ。私は最初からそれを疑っていた」
「まあ姉様の考えは置いておいて……追手がいるというのはマズいですね。カルカ様に
安住の地を探さないとはいけません」

「森とかに住むと、意外と快適だぞ。水があると特に」

「お前の世捨て人趣味にカルカ様を巻き込むな！」

こうして、一行は無事リ・ロベルを目指すことができた。あれだけ騒いでも見つから
なかったのはリ・エステイーズ王国と、聖王国が険悪ではないからだ。

最後にカルカは一度後ろを振り向いて、故郷に別れを告げているようだった。

「ほほう」

眼の前の光景に目を奪われたのはセシルだけだった様だ。港湾大都市リ・ロベル。や
や白っぽい壁の家が立ち並び、眼下には海が広がる。森に暮らしていたセシルにとって
は久方ぶりに見る海だ。少々は感慨深くなっても仕方が無いだろう。

「とりあえず、目的地に到着、ですな」

「意外に大きな都市だな。ここならしばらくは大丈夫そうだ」

「しかし、聖王国の航路があるんだろう？　聖王国の人間もいるはずだから、顔は隠した

ままか」

う、とレメディオスが言葉に詰まった。レメディオスが持っていた路銀は大分目減りしている。ここから更に北へ向かいたくとも、物資が足りない。ここらで一稼ぎする必要があるだろう。

「今日の宿代ぐらいいはあるだろう？　ここらで少し働くか」

「ああ、カルカ様にはケラルトを付ける。万が一のことがあつてはならないからな」

「その万が一を無くそうと思つてな」

「？」

安宿を取つたセシル達は部屋で、少々着替えをすることになったのだ。いつまでも聖王国の紋章が入つた服を着ている訳にはいかない。

そこでセシルは「貸すだけだからな」と言つて、インベントリから魔法の武具を取り

出した。

「あんまり目立たない方が良いでしょう、兜を被れば顔も隠れるからな。それにお前達の着ている鎧よりは性能が良い」

魔法の武具は装着者に合わせて、サイズも可変するので問題はない。ユグドラシルでは比較的低位であつた遺産級^{レガシー}の装備だ。

「ちよつちよつと待つて下さい。着た感じ、これ伝説の装備とかそんな感じじゃないですか!？」

「いや、そこまでの装備じゃない……ただマジックキャスターでも着れる鎧になると限られていてな。手持ちではそれぐらいしかない」

ケラルトに渡したのはグリーンクリスタルメタルで作られた装備だ。装備制限が無いので、その分、性能はかなり落ちる。落ちるのだが、あまり他者と関わつてこなかったセシルはユグドラシルのアイテムをこの世界の武装と比べる発想に乏しかった。

「俺がデザインしたんだが、派手なのより地味な風が好きだな。それならあまり目立たないだろう」

「これは……これなら私達も戦えますよ、セシルさん！」

同じ様に地味な鎧と兜を被ったカルカが熱を上げる。

「そ、そうか？ まあ近くにいた方が守りやすくはあるか？」

「お前は、こんな物持つてるなら早く出せ！」

レメディオスの拳がセシルの頭を打ったが、痛がったのはレメディオスの方だった。

路銀稼ぎの開始

首に付けた小さな銅板を、セシルはピンと指で弾いた。まるで首輪のようだと思う。冒険者ギルドに登録した証だ。新入りなので当然最下級を意味する。

最初は半分無法者のようなワーカーになろうとした。他者を無償で癒やしてはいけないという、ルールが冒険者ギルドにはある。それがカルカのような人間にとって、心苦しいことだろうからだ。

ところが、ワーカーというのは依頼も自分で探したり、依頼者が指名してくれないといけない。ここ、リ・ロベルでの職業はあくまで更に逃げるための腰掛けだ。裏社会での生き方などを学んでいる時間は惜しい。

結局、選択したのは冒険者というわけだ。これでも受けられる依頼のランクが十分低いので多少、節制が必要だろう。

「それにしても、カル、ケラ、レメか……実に安直だ」

登録の際、名前が必要だったが、まさかカルカ・ベサーレスと大書するわけにもいか

ず、このようなことになった。

「うるさい！ お前だけ本名なのはずるいぞ！ 大体、カル——様が遠慮をしなければならぬなど、そちらの方がおかしいのだ！」

「まあ、大丈夫よ。あだ名が付いたように嬉しいわ、レメ」

「うふつ。ところで、このような話を大通りですれば、名前の意味がありませんよ姉様」

セシルが三人に見ただ目だけ地味な軽い金属の鎧と兜を渡したため、かなり異様な光景だ。完全武装の女性三人を連れたセシルはギルドでかなり奇異に見られた。

「しかし、良く見つけたな。現状で受けられる最高の任務か」

掲示板に貼り付けられた依頼から、シー・ナーガの討伐を見つけてきたのはレメデイオスだった。おまけに難易度が書かれていない。普通ならもつと上のランクがやる仕事だろう。

「ふふん。シー・ナーガは聖王国の海岸にも出没するからな。海沿いの街ならあつても

不思議ではない」

「シー・ナーガって強いのか?」

「まあ個体によってピンキリです。それとセシルさんには分からないかもしれませんが、私達も冒険者に換算すれば最高位のアダマンタイト級です。苦戦するようなことはありませんよ」

「さあ、それでは海岸に向けて出発しましょう」

一行を引つ張っていくのはレメデイオスだが、リーダーはそのレメデイオスが信奉するカルカになっっている。前聖王として考えれば、リーダーシップの面で申し分ない。サブリーダーは聖王国の貴族を恐れさせたケラルトだ。もし手を汚すような場合があれば、彼女がセシルに命じれば良い。

強さで言えば圧倒的なセシルだが、人の上に立つようにはできていない。隠者気質で事態に関心が薄いからである。

難易度が書かれていないのには理由があった。亜人種狩りが激化した聖王国近辺から流れてきたであろうシー・ナーガだったが、リ・ロベルには姿を表すことが少ない。

指標となる強さが無かったということだ。それで冒険者達も敬遠して、残ったままになっっていた。

リ・ロベルから離れて北に行く。海岸線沿いにシー・ナーガはいるはず。人間の街から離れるぐらいいには判断力のある連中のようだ。つまり自分たちの個体数では人間の都市を襲えないと考えている。

「一方的な殺戮にならなきゃいいけど」

「亜人種にかける情けは無いぞ、訓練兵」

「俺はいつまで訓練を続けなきゃならんのだ」

「カル——様に仕えるには強さ以外にも、品位がなくてはな。お前にはそれが欠けている」

「自分でブーメラン投げてないか？」

「ブーメランとはあの狩猟用具か？ 私が下品だとも言いたいのか？」

「いや、もういい」

程なくして海岸の岩場にたむろするシー・ナーガをセシルは見つけた。上半身は人間で、下半身は蛇という分かりやすい姿だ。海に住む種族なためか、尖ったヒレのような部分も見える。

一行は近くの岩場に隠れ、話し合った手順を確認した。

相手の数は10体ほど。海に逃げられては面倒なので一気にかたをつける作戦だ。

「魔法二重化・聖なる光線」

カルカとケラルトから光線が走り、シー・ナーガを撃ち貫く。シー・ナーガ達が警戒と威嚇の鳴き声を発する時には既にセシルは後ろに回り込み、レメディオスは前を塞いでいた。

「バフもスキルも要らないな」

言葉と共に、放たれた横薙ぎで五体の首が胴体と泣き別れた。続いてもう一体を唐竹割りにし、周りを見るとレメディオスが二体のシー・ナーガを倒したところだった。

正直なところセシル一人で一撃で全滅させられる集団だった。それでもわざわざ戦など立てたのはレメディオス達の力と連携を見るためでもあり、久方ぶりにチームプレイを楽しみたかったためである。

終わって見れば、レメディオス達はこの世界の存在から充分自衛できる力を持っていることが分かった。これならセシルが一人で離れなくてはならない時でも、大丈夫だろう

う。

「ところで、依頼達成の証はやはり俺がやるのか」
「ええつと、ちよつとお願ひしてもよろしいでしょうか？」

カルカの控えめな言葉が決定だった。戦士としてリーダーの言葉には従うべきだろう。

セシルは嫌な顔をしながらシー・ナーガ達の右耳を切り落としていった。
これが冒険者としての初仕事だった。

黒幕

追われているという焦燥感とは裏腹に、リ・ロベルでの生活は穏やかに続いた。酒場で飲み食いが毎日できる程度には懐具合に余裕もある。

そろそろ頃合いと見ていいだろう。河岸を変えるための旅費を目的に仕事をしていったのだから。

「はっはっはっ！ 金級昇進の乾杯だな」

「路銀も貯まってきたし、出発の頃合いかね？」

「うつつつぶ。それなんです。社会的信用のために、ミスリル級まで登ったほうが良いありませんか？ 鑑札の代わりになります」

「でも、ここは聖王国から近すぎるわ」

急造の冒険者集団だったが、レメディオスの異常なほど運のいい依頼の引きによって、一行はトントン拍子にランクを上げていった。

モンスターや異形種などはセシルとレメディオスの相手にはならない上に、頭を使う

ようなことがあればケラルトがいる。上がらないほうがおかしいかもしれない。

「このまま、このように皆でやっていけたら良いですね」

「やれますよ！ 訓練兵の言う追手など来ないではないですか！」

「どういうことでしょうね。それを願ってはいましたが、国境を越えた途端に手を出してこなくなるというのは」

「杞憂なら良いが……」

正直なところセシルは追手が来ないのではなく、来る意味がないのではないかと思っている。あるいは既に来ており、害が無いと判断されたか。

こうした場合、最悪を考えるべきだ。そのためセシルは夜も警戒は怠っていない。

酒があまり好きでもないセシルは、腰を上げた。

「少し酔いを覚ましてくる」

「はっは！この程度の量で！」

「お前は酒も飲ましてはいけないタイプの人間だな！」

問題児を置き去りにしてセシルは酒場の外に出て、取り留めもないことを考えながら道を歩いた。冒険者チームとしての名前を考えるべきなのだろうか。あの三人の顔が良いことはバレてるよななど、様々な考えを巡らしている。

だが、人っ子一人いない場所に出た途端、ピタリと歩みを止めた。

「なるほど、狙いは他の三人より俺だったのか。考えてなかった」

「それはまた、間抜けな話ではありません？」

突然、舞踏会用のドレスを黒く染めたような格好をした少女が後ろに立っていた。後ろには高位の転移魔法が作り出す黒い穴が広がっている。

「後ろから殺そうとは思わなかったのか？」

「そのような指示は受けてありませんから。光栄に思うであります。下等な人間の身でありながら我らがナザリックに足を踏み入れることを許可されたのでありますから」

少女の言うナザリックという言葉が記憶の端に引つかかった。どこかで聞いたことがあるような……セシルは長年の隠者生活で思い出すという行為が不得意になってい

た。

「……俺の仲間の命を保証してくれるなら行くよ」

「それはお前の態度次第でありんすね」

面倒な相手だ。恐らく自分と似たビルド構成、レベルも同じ最大だろう。ここで本気でぶつかりあえば勝ち負けはともかく、街が更地になりかねない。

「仕方ないか……分かった。行くよ」

このレベルの存在が複数いると思われる場所に行くのは自殺行為に等しかったが、そうしても良いと思うぐらい今の同行者達に情がうつっていた。まさに何でこうなったかねと思いつながら、セシルは少女の作った転移門ゲイトを潜った。

潜った先は光沢のある石材で作られた建造物の中らしかった。目の前に扉があり、そこで自分を追っていた存在と出会うことになるのだろう。

扉が自然と開かれ、先程の少女と共に部屋に入る。

そこにいたのは美女と骨だった。美女の方は腰から翼が生えているため亜人種なの

だろう。

骨の方は骨といったがスケルトンのような見かけをしているが、雰囲気が違う。着ている服も豪華なもので、恐らくは死の支配者種。

セシルは内心でひどく混乱していた。骨の方、骨の方に凄い見覚えがあるのだ。ずっと昔、この世界に飛ばされる——いや、それより前だ。

「魔導王、アインズ・ウール・ゴウン陛下の前に伏しなさい。人間」

「——それだ。確か、モモンガ！ モモンガじゃないか！」

ユグドラシル時代の記憶が蘇ると、堰を切ったように現実のことが思い出される。女が告げた名前、アインズ・ウール・ゴウンは大ギルドの一つとして知られていた。そして、そのプレイスタイルからユグドラシルの暫定ラスボスとまで呼ばれていたのが目の前の死の支配者だ。

「よくも至高の御名を気安く……！」

「ゴホン！ やめよ、アルベド！ やはりプレイヤーか……しかし、今の私は王でもある。それ相応の態度を取ってもらわねばな」

「あ、はい。こんな感じ……ですか」

セシルは素直に片膝をついた。ついでに剣も前に置いて、話し合いのポーズを取る。モモンガは顎をかくんと開いたまま、それを見ていた。

「ンンっ！ 敵対の意思は無いようだな。それと私は今ではアインズ・ウール・ゴウンを名乗っている。モモンガという名は呼ばぬように」

「はあ……?」

「さて、どこで私の名を知った」

「攻略サイトに載ってました。懐かしいなあ」

そしてセシルは告げる。

「今回、こちらの世界に飛ばされてきたのは貴方だったんですね」

ピクリとアインズ・ウール・ゴウンの体が動いた。

「ユリ・アルファ達に告げよ。茶の準備をせよとな。さて……茶飲み話とでも行くかね？」

お茶会

椅子とサイドテーブルを与えられたセシルの横で、白いティーカップに赤みがかった液体が注がれていく。給仕をしてくれるメイドはなぜかガントレットを装備しており、ただのメイドではないことを示している。

隠れて暮らしていた身にも久方ぶりの紅茶は身にしみるようだった。街でも今度から酒ではなく茶を頼むようにしようか、と思うほどだ。

「気に入ってくれたようだな」

「文化圏的には緑茶ですけどね。元の世界を味わうには紅茶の方が良いかもしれない」

アインズの手元にも同じカップが置かれているが、こちらは口をつけた様子はない。アインズはスケルトン系列の種であるため致し方ない。

「それにしても、ここは確か異形種専門のギルドでしたね。あ、千五百人のプレイヤーを撃退したって本当ですか？」

「少し尾ひれがついているな。傭兵NPCも多く含まれていたため、千五百人の中のプレイヤーはそれほど多くは無いよ。尤も少なくとも無かったがね」

「へー、すげー」

セシルも素の口ぶりに戻っている。強さや外見といった要素は思うより体を縛る。生来の気性で生きていける者は稀だ。その点、ここは気軽だ。例え殺されるかもしれないにしても。

「自己紹介がまだでしたね。この体の名前はセシルです……本名はもう自信無くて」

「ほう。何年前にここへ来たのだね」

「五百か六百年前でしたかね。へ上エルダーヒューマン古人だから歳はとらないんですけど。離れた歳月になると覚えているのに、記憶が霞みがかかったようになるんです。その記憶が自分のものか分からない感じで」

うんうんとアインズは頷いていた。短い期間でも彼にも思うところはあるのだらう。

「そんな期間をどうやって過ごしていたのかね」

「半分は森にひきこもっていましたね。貴方にもいざれ分かりますよ。最初の百年は楽しくて、二百年までは蛇足。三百年になるともう駄目です」

「ふむ……本題に入ろうか。君が蘇生させた二人と助けた一人は、我が勢力の策でそう追いやった者達だ。君にそれを妨害する意図はあったか？」

「無いですね。完全に偶然でしたし、そういうことではありません？」

「む。まあ……それは何だ……思いつく情景ではあるな、うん」

何か覚えがあるのか、骸骨の顔に汗が見える気がする。この建物からしてギルド拠点ごと転移してきたのだろうか。ならば、様々な苦勞を抱えていただろうとセシルは思いやった。セシル自身は百年程度でそうした責任感捨ててしまっている。

「彼女達も自分達の立場をよく理解し、聖王国へ戻る気はありません。排除を取りやめることはできないでしょうか」

「フ……そうでなければ自分が敵対するとも？」

「結果的にそうなりますね。最後は私が負けるにしても、どれだけ食らいつくか。見物しますか？」

セシルは重い内容を軽く言い放った。その発言はアインズの精神に一定の不安をもたらしめた。セシルには知る由もないが、アインズにとってギルドは全てだ。

レベル100NPCを多く保有するナザリツクなら確かにセシルには勝てるだろう。だが、それまでに何人道連れにするか。それを考えると敵対などしたくない。

加えて、アインズからすればセシルは話が合いそうな人間であり、情報の宝庫である。

「確かに今となつてはあの三人程度、許してやれないこともない。だが条件がある。私の部下となれ」

沈黙が立ち込める。セシルからしても悩む提案だ。確かに追手側の庇護下に入れば、あの三人は安泰だろう。当たり前前の話だ。だが、あの猪のような女騎士が頭に浮かんだ。

「ご勘弁を。現在、私は契約中の身。それを破棄して貴方に仕えるような者なら、貴方にとつても信用できない存在でしか無い」

「……フフツ。これは一本取られたかな？」

「またまた、予想していたでしょうに。ですが協力者や情報提供者としてなら、貴方の役にも立てるでしょう」

「なるほど、それが良い落とし所かもしれないな。いや、我が国の冒険者の見本となつてもらうのも……監視を常時付ける。もし聖王国へ向かうようなら三人は切つて捨てる。移動するならエ・レエブルに向かえ。我が国の息がかかっているが、それを口外するなら……」

「わかつてます。それにしたつて私一人にこんなに大人数は大げさじゃないですか？」
「フフフ。やはり侮れんやつよ」

左右の扉から強烈な気配を感じる。プレイヤーではなくNPCだろうが、自分と同じレベル100の者達だ。長年生きてきて身についたのは、こんな感覚しかない。

「では茶飲み話の続きと行こうか」

プレイヤーはいつ来たか、今までどんな者がいたか。この世界はどういった場所があるか。そうした古代の話を魔導王は聞きたがった。セシルはそれに全て素直に答えた。

替わりの茶が冷えた頃、話は終わった。

「では、今日はこの程度で良いだろう。実に有意義な茶会だったな」
「ええ、こちらも懐かしい思いをさせていただきました」
「ではシャルティア、転移門ゲートを開き協力者を送るが良い」

再び暗い穴が開く、セシルはアインズに一礼した後そこを通過した。背後の穴が無くなる。無詠唱化した伝言メッセージを送る。

（あの喋り方、疲れない？）

（疲れるけど慣れてきた。細かい要望があればまた伝言する）

先程と同じ声とは思えない、疲れた成人男性の声が返ってきた。

ナザリック内——アインズは顎を手に乗せながら考え込むような仕草を取っていた。そこに巨大な二足歩行の昆虫じみた存在が声をかける。

「ヨロシイノデスカ、アノヨウナ者ニ讓歩ナサルナド」

「アレを敵に回す意味はない。それよりは駒にした方が良い」

「それにしても聖王国での策がこのような形で危うくなるとは……申し訳ありませんア
インズ様」

スーツ姿に尻尾を持つ男が言う。

「構わんど、デミウルゴス。これでやつに首輪ができ、計画に支障もない。なにより、あの男には利用価値がある」

「——なるほど。そういうことですか」

「フッフッフ。そのようなことは考えていないぞ、デミウルゴス」

「フッフッフ。ええ、分かっておりますともインズ様」

また後で伝言を送ろう。アインズはそう考えた。

明日はきっと良い日

ナザリツクから出たセシルは、意外と時間が経っていることに気付いた。月の位置で判断するしか無いが、皆もう宿に戻ったであろう。

そう思い、足を元の酒場近くに向けると、やかましい鎧の音が聞こえた。次にその音とともにカルカの顔が見えた。カルカは驚いた顔をした後、胸に体当たりをするように飛び込んできた。

「セシルさん！ 良かったです！ てつきりいなくなってしまったかと」

「カル様！ 見つけましたか……おい、訓練兵どういうつもりだ。一人でほつつき歩いて」

「どういうつもりかって、あー、途中で用事ができただけだが」

最後にケラルトも加わり、非難轟々の大合唱だ。セシルは最初、まったく訳が分からなかったが、中座した後に向に戻ってこないのが随分と心配をかけたらしい。

「子供じゃないんだ。ちゃんと帰ってくるさ」

「そうではなく……」

「うつつつぶ。この自覚の無さ。首に鎖をかけましょうか」

子供じゃないと言ったが、彼女達も子供ではない。わざわざ走り回って探す必要は無いと思うのだが……そこは蘇生したことが関係しているのかとセシルは考えた。彼女達にとって自分は生の象徴になっているのではないかとセシルは推測した。

「参ったな……どうすれば許してくれる？」

「もう勝手にどこへも行かないでください……行き先をちゃんと告げて」

「親子かよ」

ケラルトが涙目のカルカの肩に手を置いて慰めているのを見ると、なんとなく気まずくなる。そこに腕を組んで横目でじろつと睨んでくるレメディオスに気がついた。

「それで？ それほど大切な用事とやらは何だったんだ？」

「ああ……追手と出くわしたんだが、毎回殺すのも芸が無いんでな。隠れて話を聞いて

いたんだが、北を調べて撤収すると言っていた」

「何だと？ それは本当か？」

「本当、本当。だから東のエ・レエブルに向かうのはどうかと思つてな。王都だと流石にカルが目立つだろう？」

口からでまかせがべらべらと出てくることにセシルは驚いていた。先のアインズとの会話で舌が回るようになったのだろうか？

「エ・レエブルですか……六大貴族の一人、レエブン侯の領地ですね。治安は良いはず。近くに大森林もありますし、いざという時の逃げ場所にもなるでしょう。悪くないかと」

ケラルトの発言に頷きつつも、へえそうなんだと内心で思いながらセシルは鉄面皮を貫いた。セシルとしては魔導王の出した条件に従つて発言しただけなので、実は知識が無い。地図で見た立地ぐらいいだ。

どちらかと言えば大森林に住んだ方が隠者的には好みだが、約束なので仕方がない。

「じゃあ、明日にも出発しましょう。追手の帰り道に出くわしたなんて洒落にもなりません。願わくばそこが安住の地であるように……」

リーダーのカルカが話を締めて、お開きとなった。宿屋に戻る途中、セシルはレメデイオスに今回のことを散々に当てこすられた。余程気に入らなかつたらしいな、とのんびり考えただけだったが。

カルカは宿屋に戻ると、いつものように鏡の前に置かれた椅子に座る。鼻、口、と順に調べていく。朝と夜の日課は未だ治っておらず、悪夢を見ることもある。

「私、どうしてあんなことを……」

セシルがいなくなった時の焦燥感。不安に駆られ、街を歩き回った時の感情は迷子になった子供のようだった。そして、見つけた時の安堵感から飛びつくようにしてしまった。

思い出すと顔から火が出るようだった。だが、決して悪い気分ではなかつた。

この生命も顔もセシルが取り戻してくれたものだ。蘇生を拒否する人もいると聞く

が、あのような死に方をしたカルカにとってはそうではなかった。

「私という人間を、かあ」

あの奇妙に浮き世離れた戦士は、ひよつとすると自分の顔が潰れていても気にしないのでは無いのだろうか。彼女は糸のついていない人間を見つけたのかもしれない。

レメディオスは苛立っていた。部屋の荷物に蹴りをくれて、どつかとベッドに座り込む。カルカとは違い、レメディオスは自分が苛立っている理由を良く分かっていなかった。

とにもかくにもあの男だ。自分の唯一の部下の顔を思い出すと、また苛立ちが返ってきた。

あれは自分の立場を分かっているのだろうか？ 徴兵した唯一の部下だ。それが好き勝手に動き回っていて、自分には謝罪の一言もない。

この集団は最も高貴なカルカを筆頭にチームなのだ。そして、あの男は自分の部下である。つまり一番の下っ端だ。何か事が起これば自分に意見を具申するべきなの

だ。

しかし、癩なことにやつは自分より戦力的に強い。一度立場を分からせる機会が来ないだろうか、レメディオスはほぞをかむ思いだった。

セシルはここに来て、唯一の友人を得たのかもしれない。伝言メッセージを連発する存在を友人と呼ぶのならだ。

(部下が進めている王国に対する計画がよくわからないんだよな)

(それは部外者の俺に言つて良いことなのか?)

(いや、もう勝手に進んでるし)

(よく分からんが、被害とか少ないほうが良いんじゃないか)

(修正案とか無理だ……どこを修正すればいいのかが、まず分からない)

(まあ穏便にな。巻き込まれてはかなわない。というか伝言メッセージはこつちに指示する時ぐらいにしたらどうなんだ)

(いや、それは……あ、効果時間が切れる。また明日)

明日も? とセシルは首を振った。

モチヤ回避

リ・ロベルから東へ向かい、王都を抜けて、エ・レエブルに向かうのが今度の旅だ。実は既に急ぐ旅では無くなっているのだが、レメディオスやケラルト達は急いでいるようだった。

刺客の話などするんじゃないかなと思いつつ、セシルはその歩調に合わせて行った。レメディオスは分かるが、ケラルトやカルカも思ったより健脚だ。これがこの世界で強い方の者だという証明だった。

セシルも一応、三人にことさら過保護に接する必要は無いということは理解したが、それでもレベル差がある彼女達を気遣いたくなる。これは傲慢なのだろうか……どうにも癖になっているようだ。

「遅いぞ、訓練兵！ もつと速く動け！」

「そこまで急ぐ旅か、コレ？」

「刺客が諦めたとしても、リ・ロベルからできるだけ急いで離れた方が良いでしょう。何かの拍子で見つかるかも知れません」

まさか、もう話は付けてあるとも言い出せずに急ぐことになった。リーダーであるカルカが文句無いのであれば、仕方が無いだろう。後ろを振り返ると当のカルカが、何か物思いに耽っていた。

「おい、カル？」

「はいっ!？」

「何か考えるのは良いが、このままだと置いていかれてしまうぞ」

慌ててカルカが小走りで横に並ぶ。リーダーが殿というのもよろしくないもので、もう少し前に行って欲しいものである。カルカもこの世界では相当な実力者だが、マジックキャスターなので物理防御に難があるなど要らぬ心配をしてしまう。

「あのう……セシルさんは結婚とかなされていきますか？」

「何だいきなり。してないよ。そういう人間関係は森で暮らすようになった時に捨てた」

カルカは小さくガッツポーズをしていた。セシルからすると、意味不明である。人が結婚してないのが、そんなに嬉しいか。上流階級では結婚していた方が有利と聞いた覚えはあるが、これから先、上流階級のお世話になることも無いので別にどうでも良いことである。

こうして着実に目的地へ近づく中、夜のぬぐらを探して植林地近くの道沿いに野営の準備をした。セシルとレメディオスで見張りを交代で行うことにして今日の道のりは終わった。

セシルも三人もそう思っていたのだが、夜中に馬車の響きを感じてレメディオスも起きてきた。

「商隊？　こんな時間にか？　怪しい積み荷でも載せているのか？」

「分かんないが、ちよつと見てくる。二人の護衛は任せたぞ」

「……まあ部下が先に出るのが基本だな。うむ」

そうして木の枝の上にセシルは飛び乗った。猿よりも素早く動いて、状況を確認していくが、そこで見たのは奇妙な光景だった。

荷物を引いた荷馬車が立ち止まり、周囲に武器もろくに持っていない農民のような集

団がいる。馬車の周りには武装した傭兵らしき者達があり、状況が良く掴めない。

最終的に馬車に乗っていた商人らしき男が、叫ぶ言葉で理解できた。どうやら戦力的に劣っている側が聖王国への支援物資を載せた馬車を襲うつもりらしい。

自分で考えて意味がわからないが、荷馬車側は確かに魔導国の旗を掲げている。このあたりの農民はそれほど飢えているのだろうか？ 魔導国の出した支援物資らしいので^{メッセージ}伝言を飛ばす。

(魔導王陛下。何かそつちが出した、聖王国への支援物資を襲おうとしてる連中がいるんだけど)

(なんだ、それは。まあこつちの計画じゃないから助けといてくれるかな)

(了解)

セシルは冒険者プレートを隠し、道を塞いでいる暴徒と、荷馬車の代表らしい商人の間に降り立った。突然の^{ちんにゆうしや}闖入者に驚く双方に向けて語りかける。

「俺は魔導王から依頼を受けた兵だ。この荷物が無事に届くようにな。逆らえば斬って捨てる」

たった一人で双方の沈黙を招いたのは、突然の出現ということの他に魔導王の名が大きいだろう。セシルはあいつ怖がられてるなあとか妙な感慨を抱いた。

「貴様、この私、フィリップ・デイドン・リイル・モチャ……」
「うるさい」

暴徒側の首魁らしき人物を柄で一撃し、昏倒させる。すると、周囲の人間の態度が明らかに変わった。特に農民のような格好をした者達だ。

「あおう、私達は坊っちゃん命令で来ただけで……」

「じゃあ、さっさと引っ張って持って帰れ。解散しろ」

すげなくあしらって、今度は商人と傭兵の側に語りかける。

「という訳なので、俺としては輸送を続けて欲しいんだが」

「あんな連中、助けなんかいらなかったぜ」

「まあ、そうだろうけど依頼なんだな。商人さんはどうする？　このまま行つてくれるかな」

「……ああ。まあそうするしか無いだろうなあ」

なぜか商人が遠い目をしていると、馬に乗ったみすぼらしい革鎧の騎兵が現れた。馬も農耕馬のようで痩せてしまっている。

「ご無事でしたか！　私は領主のデルヴィ男爵で、こちらは隣領のロキルレン男爵です」
「ああ、まあ。大丈夫ですよ」

商人と貴族らしき者の会話が始まると、セシルは黙って影に溶け込むように戻っていった。野営地に帰ると、微妙な表情をしたレメディオス達が出迎えた。どうやらカルカもケラルトも起きてしまったらしい。

「結局なんだつたんだ？」

「聖王国への救援物資を襲おうとした連中がいてな、止めてきた」

「なに？　聖王国へののか？　ちゃんと痛い目を見せてきただろうな」

「まあ首領には一発食らわせてきたが……」

カルカが聖王国と聞いて会話に加わろうとしてきた。彼女の身からすれば救援物資が必要なほどの故郷が思いやられるのだろう。

「聖王国への救援物資……どこから来たんでしょう？ 王国が援助してくれているのですか？」

「いや、魔導国からの物資らしい」

「なに！ あの骨野郎……聖王国に恩を売るつもりか！」

セシルからはなぜか暴れだしたようにしか見えないレメディオスを、皆で宥めながら再び休憩に入る。

この一件で大きく事態が変わったことにセシルとアインズは気付かないままだった

……

新天地での生活

エ・レエブルは活気のある街だった。リ・ロベルも活気があつたが、それは港町特有の気質から来ている。エ・レエブルは純粹に人通りが多く、治安がしっかりと良いからこそ、いわば品のある活気だった。

六大貴族の一人、レエブン侯は名だけでなく能力も高い人物なのだろう。王国ではあまり見ない、舗装されつつある街路もその証拠に見える。

「さて、ようやく落ち着ける候補地に着いたな」

「ああ、ここが我々の安住の地になるか……いや安住の地にしてみせよう！」

レメデイオスは意気込んで答えた。最近、何かとセシルと張り合おうとするレメデイオスだったが、この発言は決意と覚悟を示していた。少しばかり微笑ましいのは、彼女も心根が変わってきたということだろう。

以前のレメデイオスは強さと信念が硬すぎて、折れそうだったが、今は柔らかくなつてきている。セシルとしてはあの狂気が見れなくて残念なところもある。しかし、現状

でも面白い人物ではある。

「その前に冒険者組合に行つて、移動の手続きをしません？ 依頼の傾向も見れますし、

これから先のことを考えるうえで役立つと思います」

「そうですね。四人暮らしていくなら、それなりのお金が要りますし……世の中は甘くないですね」

落ち着いているケラルトとカルカから、真つ当な意見が出る。皆、新天地に逸ることを抑えながら冒険者組合に向かった。

「意外と早く終わりましたが、依頼は護衛がメインで、討伐は少なかったですね」

「トブの大森林より山裾のモンスター退治の方が多かったな」

「護衛よりは討伐の方が好きだな。気楽にやれる」

「このあたりはそう強力なモンスターもいそうにありませんね」

銘々勝手なことを言いながら組合を出る。

治安が良いことは良いことだが、食い扶持が減ることは困る。少ない任務から選んで

請負、白金ブラチナやミスリル級へと上がるしか無いだろう。

以前ケラルトが言っていたように身分証として、ミスリル級までは上げておきたい。

「次は宿だが、今の私達に常駐できる宿があるか？」

「トブの大森林に住むというのはどうだ。大森林ということは食料には困らないぞきつと。森というのは意外に過ごしやすくてな」

「はい。却下です」

セシルの意見はカルカどころかケラルトにダメ出しを食らう。当然のことだが、セシルの単なる趣味に女性陣三人が付き合う理由はなかった。

「そういうえば、ここまで来たんだ。もう、面頬は外しても良いんじゃないか」

「うん？ ああ好きにすれば良い。常に兜を被っていると大都市だとかえつて変かもな」

「それでは遠慮なく……」

カルカが兜を外すと、金紗の髪が膨らむように広がる。見事な金髪で、なるほど確か

にこれは目立つ。ケラルトも外すと長さはともかく、レメディオスに似た髪だった。やはり姉妹なのだ、今更気付く。

「ふう、やはりこちらの方が気持ちが良いですね」

「大体、常に兜を被っているなんて男性でも拷問でしょう。セシルさんに従って東に来て甲斐はこれだけでもあつたような思いです」

「まあ刺客が再び来ようとも、私が今度こそ二人を守る！」

そう言うレメディオスはふわつとした髪の毛に、若干兜の跡が残っている。女性陣は大変だと思いながら、セシルは宿探しを再開した。

街の配置を覚えながらゆっくりとした道行で、白い静かな建物を見つけてきたのは意外にもカルカだった。値段も安い訳では無いが、安定して払える範疇だ。

「誰かと住むなら、こういう場所が良いなつと見ていたんです」

とは本人の弁。顔がほんのりと桜色に染まった美貌が、人々の目につき感嘆の声が聞こえた。セシルは初めてカルカの顔をまともに見た気がした。

「なるほど、美人だな」

「ええっ!?!」

「おい、訓練兵。カルカ様に手を出したら殺すぞ」

「単に評価しただけだ!」

殺すも何も、レメデイオスがセシルに敵うはずもないため、じゃれ合いめいたやり取りになった。とりあえず見つけた宿に部屋を長期で取り、来訪した日は終わりを告げた。

翌日から新天地での生活が始まった。冒険者組合に行き、依頼を受ける。受けた依頼はハルピユイアの討伐だった。これまたレメデイオスが勘で選んだ仕事であり、当たりが期待できる。できればトブの大森林から出てきたマンティコアの討伐が良かったのだが、金級冒険者は難度によって受けられなかった。

昨日は来た時期が悪かったのか、討伐依頼もちらほらと見られた。意外と平和だったと思っていたが、トブの大森林とそこから伸びるアゼルリシア山脈から来たモンスターなどが出没するらしい。

実際、ハルピユイアを発見したのはアゼルリシア山脈の近くだった。イメージ通り、

半人半鳥の種族で当然ながら飛んでいるのが厄介だ。逃げられるのもごめんだ。

だがセシル達のチームはマジックキャストが多い。セシル自身もそうだと伝える。突撃しているレメディオスは予想通り、少し飛ばれて初撃以降を出しあぐねている。

「魔法三重位階上昇化・トリプレットブーステッドマジック聖なる光線」

セシルから極太の光線が3条発射され、ハルピユイア達を一掃していた。次いでカルカとケラルトの聖なる光線ホーリーレイが放たれ、撃ち漏らした敵に次々と当てていく。

「わ、私は囧かあ!?!」

任務を果たすまで光線の嵐は続いた。

チーム

セシルは自分を善悪で分ける資格は無いと思っていた。それは確かにその通りで、彼が助けなかった者の数は助けた者の数で比べると桁がいくつも違う。

他の転移してきたプレイヤー達とも違う生き方、傍観者を選んだのだ。セシルの内面はちゃんと善悪を分けているが、判断に困ることが多すぎた。

例えば誰かを助けたとして、その人物が誰かを害すれば、その責任はセシルにあるのだろう。もちろん、直接手を下した人物は悪いが、間接的にはセシルも加害者だ。

ユグドラシルの肉体という大きすぎる力。それを持って余していたとも言える。

(へー、世間はそんなことになってるのか)

(いや、俺も説明を聞いてて気付いたんだ。あ、デミウルゴスとかアルベドには内緒だぞ！)

(誰だよ。それにしても、そんな長期的な考えで戦略って動くんだな。どうやって考えつくんだ?)

(今更そんなこと聞けない……)

ゆえにアインズ・ウール・ゴウンがどこかの国を害そうとも、関わりが無いことだ。こうしてたまにその愚痴を聞くだけで、人道にもとるから辞めようなどは口が裂けても言わない。

そうした意味でセシルはアインズにとっても貴重な人間だった。伝言でやり取りするようになってしばらく経つ。時には剣呑な話もあったが、それを邪魔したことはない。まあだからこそ愚痴の聞き手になるのであるが、操られたこともない。

（あ、こつちも盛り上がってきた。切るぞ）

（ああ、また明日）

（明日もかよ）

今、セシルは仲間が依頼を達成しようとしているところを眺めているところだった。本来、金級冒険者は受けられない大森林から出てきたマンティコア退治だ。マンティコアは奇妙なモンスターで、蛇の尾を持つ獅子の胴体以外にそれぞれの共通点は無い。

人面をしているものもあれば、そのまま獅子の顔をしているものもいる。面白いことにコウモリの羽を持ち飛ぶ個体までいるのだ。

大森林の深層に生息している彼らをなぜ、我々が相手しているかという^{ブラチナ}と白金級との合同任務だからだ。

「……レメの方が強いじゃん」

誘ってきた冒険者たちはカルカ達とお近づきになりたくて、こちらに依頼を持ちかけてきたのだろうが、向こうの前衛よりレメ・ディオスの方が明らかに強い。加えて信仰系のマジックキャスターも二人いる。盾として落ちる可能性は微塵もない。

冷静に周囲を判断できるのはセシルが何もしていないからだ。レメ・ディオス曰く

「お前がいると経験にならん！」

のだそうだ。日頃は訓練兵と呼ぶ割に随分な言葉である。だが、この調子なら心配する必要は無かった。当初は白金級^{ブラチナ}の冒険者のサポートであったはずが、始まってみればこちらのチームが主体となっている。

「〈聖撃〉！」

「あ、終わった」

レメデイオスのスキルが決まり、マンティコアはどうと倒れた。とどめにケラルトとカルカが放った聖なる光線ホーリーレイが突き刺さり、容赦ない終わりだった。

戦闘が終わって小休止。セシルはレメデイオスの剣の輝きをなんとなく聞いてみた。

「そういえば、レメの剣って変わってるよな」

「今更か？ ふふん、これは四大聖剣の一つなのだ。お前のような者には偉大さが分からなかっただろうがな」

「へー、まあ俺の剣も中々だぞ？」

「変わった形の剣ですよ。カタナというものですか？」

「カタナはカタナだが、直刀という種類だな。まっすぐして反りがない、古いタイプだ。シチセイと名付けてある」

「戦士の方々は武器にこだわりますよねえ」

セシルは鎧を貸したが、カルカとケラルトは杖も持っていない。今度も何か貸すべき

だろうかと思うが、物騒な棘の付いたメイスぐらいしか無い。ここから先は自分で買っていく段階だ。また、そうした準備は楽しいというものもある。

そうした先を考える楽しみに水をさす声があがった。

「けっ。良いご身分だぜ」

「お強い嬢ちゃん達に囲まれて、自分は震えて見てるだけかよ」

白金級冒険者チームの声だった。チーム名は“白の蛇”。カルカ達に良いところを見せようとしたのだが、逆に助けられる始末。それも下位の新入りにだ。

「……俺か!？」

「なんでそこで驚くんでしょーか」

「セシルさんって変に鈍いですよね」

「まったく、こそこそと陰口とは情けない。おい、お前達。言っておくが、腹立たしいことにごいつは私達より強いぞ。手を借りないで戦う訓練をしただけだ」

ぶつぶつとした不満を背に浴びながら、セシル達はエ・レエブルへと戻っていった。

酒場で夕食を摂っていると、酒も入り雰囲気も明るくなる。セシルは食べながらぼうつと考え事をしていた。

「白の蛇、蒼の薔薇、四武器……俺達ってチーム名無いよな」

「確かにそうだな。不要だと思っていたが……」

「ここはやはり、リーダーであるカル様に因んで名付けるべきでしょう」

「えっ私ですか？ ケラとレメにセシルさんのほうが特徴があると思いますが……」

「混沌とした名前になりそうだな。やはり、カルに因んで名付けた方が良いと思う」

全員で悩むことしばし、これといった案が出てこないのはケラルトとレメディオスはカルカの良いところが浮かびすぎるのだろう。

「カルの特徴っていえば、やっぱり髪じゃないか？」

金色の腰より長い髪。時折、艶と光ってさえ見える。それだ！ とレメディオスとケラルトも頷いた。チームに名前を付けるなら内面より外面だろう。

こうしてチーム「きんさ金鎖」が誕生した。

念願のミスリルへ

ギガントイーグルは後悔していた。普通はアゼルリシア山脈の上空で獲物を待つが、より低い地の方が獲物を取りやすいことに気付いた狡猾な個体だった。

事実、地上の生き物は容易く捕食できる存在がほとんどで、獲物も数多い。中でも爪や牙のない種族は最高の餌食だった。傲慢の大鉤爪であっさりと捕まえることができ、大きさもそれなりにあつて美味だった。

だから、その日も同じ種族を見つけて捕らえようとしたのだ。鉤爪が肩にかかる瞬間、口に血の味がいっぱいに広がった。まだ食らつてもいけないのに、おかしなことだ。それほど楽しみだったのか。

次第にギガントイーグルは違和感を覚えた。首が動かない。翼も機能せず、地面を這つてしまったようだ。湧き上がる屈辱の中、あることに気付いた。

首や翼が不調なのではない。そもそも付いていないのだ。

「証拠はこれでいいな」

持ち上げられ、獲物だったはずの存在と目が合う。ああ、こいつは違う。獲物にしてきた種族に似ているが、鋭い爪を持つ別種なのだ。手を出すべきではなかった。後悔の中、ギガントイーグルは息を引き取った。

セシル達「金鎖」は白金プラチナに上がった後も、順調に功績を積み重ね。とうとう目標だったミスリル級冒険者となった。トブの大森林深層やアゼルリシア山脈の怪物たちを積極的に討伐していたのが大きい。

セシルは勿論だが、他の三人もそれぞれ実力を示している。カルカヤケラルトは負傷したチームの救援で多くのチームを救い、レメディオスはマンティコアを一对一で倒している。元々が冒険者にすればアダマンタイト級なので当然かもしれないが、大きな脅威などそうそう現れる訳もなく、地道にやるしかなかった。

「というわけで昇格祝いだ！」

酒場でレメディオスが騒ぎ出した。と言っても、他の冒険者から敵意は飛んでこない。これをやるのがセシルだったら容赦なく飛んできただろう。美人の特権である。

「なんかもう慣れたな。ケラ、ミスリルになるとどう違うんだ？」

「はい。名指しの依頼や高額依頼などが来ることはもちろん、それぞれの街……いいえ、各国を通過する際の身分証にもなります。ミスリルから冒険者の上澄みということですな」

「凄い勢いで他の連中に喧嘩を売ったな」

「ですが事実ですし」

「ケラがそういう風に見てるわけじゃないですよ？　きつと位階についての純粋な説明だと思えます」

「カルは裏の意味とか見なさすぎな気もするが……とすると他の国に移転したりもできるようになったわけだ」

最も、アインズとの約定でエ・レエブルにしていることになっている。そうそう動けるものではない。セシル自身、アインズと友好関係があるのも確かだ。

「さて、結局今回も傍観者か……？」

先日、アインズが語ったのは王国に対する策謀だ。それ自体はセシルにはどうでもいいが、王国が内乱状態に突入するのはほぼ確実だ。

流石に戦争で超位魔法を使った話は呆れを通り越して、笑ってしまった。

それはともかく王国は元々内部が安定していない。アインズがいなくとも、内乱になったかもしれない。まるでアインズ以外にチェスの指し手がいるようだ。

凡人でも長く生きていけば、少しは分かるようになる。

その時、自分はどちらの側に立っているだろうか？ 王国側かアインズ側か、冒険者として中立を取るか。長すぎた生に微かな興味が泡立つ。魅せるか、魅せてもらうか……楽しみだ。

「あ、料理が来ましたよ。ありがとうございます」

「おー、まずは飯だ飯」

「ちよつと姉様呼んできますね」

元王族たる人物らしくもなく、ご丁寧に給仕に礼を言うカルカ。離れたテーブルにまで絡みに行ったレメディオスと妹ケラルト。自分が守る範囲はこれだけだ。

そして、並べられる肉の数々に王国の未来はどこかへ飛んでいった。未来より眼の前の飯である。

お開きになり、酒を飲みすぎたレメディオスに肩を貸しながら拠点へと戻る。自分で飲むより酒臭い。

「おい、訓練兵。変なところを触るんじゃない」

「触らないから吐くなよ」

「なんだとう。貴様、私に魅力が無いとでも言うのか」

「言つてない」

奇妙な会話だが、後ろではなぜかカルカが手をわちやわちやとさせている。ケラルトは頭痛を抑えるようなポーズだが、本当に頭が痛いのかもしれない。

「わらしだつてなあ」

「パワハラに加えてアルハラかよ、この元騎士団長」

「カル様とくケラが何と言われてるかく、事実無根なのに」

「泣き出しやがったよ！ カル、ケラ、どっちか代わって！」

凄早い早さでカルカが代わりになってくれた。ケラルトは解放されたセシルを見てた

め息をついていた。

ようやく自分の部屋に戻ると、黒い穴が開いていて以前見た少女が立っていた。アイ
ンズ・ウール・ゴウンのお呼びらしい。

遠慮なくゲートを潜ると、ナザリック地下の味気ない通路に出た。

「こつちでありんす」

導かれるままに進んでいくと、扉があつた。それを開くと、中にアインズがいた。

「ご苦労、シャルティア。二人で話があるため、下がつてよい」

「ですが、アインズ様！ このような得体の知れない者を……」

「よい、と言つたぞシャルティア」

「はい……何か御用があればお呼びくださいでありんす」

少女はしよげかえつた様子で扉を閉めて、気配からすると少し離れたらしい。

「ちよつと可哀想じゃないか？ ……では」

「ハハハ……普通で構わないよ。さて、まずはミスリル級に昇格おめでとう」
「なんでもお見通しか」

「そう言われるの部下で疲れてるからマジやめて……」

「すまない……」

アインズは収納空間からいくつもの武具を取り出して、並べていった。

「さて、君に手伝って貰いたいことがあるんだ」

レベル100のアインズを手伝う件とは……知らず喉が鳴る。

「そう……ルーン武器の宣伝を！」

ルーン武器

今まさにアインズ・ウール・ゴウンは、王国に対して謀略戦を仕掛けているはずだ。世界情勢を左右する重大な局面が世界の裏側で進行しているのだ。

そのために今日も命を失う者もいれば、利益を得る者もいる。

だが、その壮大な計画の全貌を睨む男が、心の底から訴えかけている。

商品宣伝してくれない？ と。

「ルーン？」

「そうだ。我が国で今、研究中なのだが……現段階では簡易的なエンチャントといったところか」

セシルは眉間を揉みながら記憶を手繰る。確かに聞き覚えがある言葉だ。知識の網をくぐり抜けて、到達するには結構な時間を要した。

「ああ……何か昔の文字だっけ」

「そうそう。文字ごとに意味があつて、それをルーン工匠に研究させているんだ。それを武器や道具に彫ると火などの簡単な効果を出してくれる」

「しかし、何でそんな文字がこの世界に？ しかも実際に効果が出るのか」

「過去のプレイヤーからだと思う。効果に関してはコストがほとんどかからないのが利点だが、それほど強力な効果を生み出せる技術は発達していない。だが、この地では十分に実用的な範囲に成長させられると信じているんだ」

「量産化を見越した宣伝か。気合入れて言うから何かと思つたよ」

ズラリと並べられた武器はユグドラシル時代の武器で、装飾にルーン文字が彫り込まれている。これらも実際に機能するのだろうか？ わからないことが多すぎる。

「ただ、これを使って宣伝すれば過度に強力な武装と思われませんか？ 実際に今研究している物はそれほど効果が出ないんだろ？」

「確かにそうだけど……価値が無いと思われても困る」

「なら不出来でも、こちらで作った武器で宣伝した方が良くと思う。魔法の武器は冒険者にも憧れのようなだからな。それが安価なら確かに売れるかも」

「うーん。それならこういう物もあるけど」

アインズが取り出したのはブルークリスタルメタルのロングソードだった。青い刀身に黒のルーン文字が刻まれている。ルーン文字が光りだすと、赤色へと変わっていく。

「鍛冶NPCが武器を作りながら、横からルーン工匠達が彫るという方法で作った剣だ。剣としては微妙な物になってしまったけど、ルーン武器としては成功作。起動させると赤熱化して、炎ダメージを追加する」

「良いじゃないか。等級は最上級ぐらいか？」

ややこしいがユグドラシルの武具の等級は上から神器級、伝説級、聖遺物級、遺産級、最上級、上級、中級、下級、最下級と続く。

最上級の武器はレベル1000のプレイヤーとしては物足りないぐらいの強さである。

「大体は。こっちの技術を使って作ってるから明確には分からないけど」

「俺はコレ使うよ。宣伝なら目立って良い」

「そうか……そのフレーム・スペシャル・ソード・ハイパーもレベル1000が使えば強そ

うに見えるかもな」

「……なんて？」

「フレイム・スペシャル・ソード・ハイパー」

「……あー。その名前で通すの？ マジで？」

ちよつと選んだことを後悔しつつ、色が変わるところなど宣伝にはコレが最善というところは変わらない。刀身以外の装飾が華美では無いところなど結構気に入っていた。そのネーミングセンスを人々がどう思うかだけ気にして、コレを借りることにした。

「そういえばマジックキャスター用の杖は無いかな。うちの後衛二人はろくなもの使っていないだ」

「それは知ってる。彼女達には逆にやや強力な方が良いだろうと思つて、ユグドラシルの技術で作った武器を用意している。杖ならルーンの効果が無いことは分からないだろう」

「それもルーンで実際に作った物でも構わないが……」

「彼女達が死んでは宣伝も何も無いだろう？ それに君と違って二人は虚弱だ。貴重な物で無くとも、この世界では十分だろう」

あいにくとセシルは杖を持っていない。このあたりが大手ギルドとソロ専ギルドの差というものだろう。渡された杖はアインズと対照的な白い天使像が頭にあるメイスト、真つ白で先にオーブがはめ込まれた杖だった。どちらもデザインとしてルーン文字が使用されている。

「ありがたく借りるよ」

「返さなくてもいいぞ？ 死蔵していた遺産級だし」

「……いや、いずれ返すよ」

インベントリの中身の差に圧倒的敗北感を感じつつ、セシルは最後の矜持を守った。

「それにしても、商売に精を出してて良いのか？ 何か作戦とか練ってるんじゃないのか？」

「王国内部での暴発待ちだし、部下の方が優秀だから……」

いつもの愚痴と同じような言葉を聞きながら、セシルはカルカ達が少しずつ装備を整

えていく楽しみを奪ってしまったかな、と考えた。

「そういえば、うちにはもう一人戦士がいるんだ。聖騎士なんだけどそいつには武器を貸さなくて良いのかい？」

「レメディオスとかいう女騎士だろう？ あの女は私に対して、少しばかり悪意を持っているようにね。魔導国産と聞けば使いたがらないに決まっている」

アンデッドのアインズには珍しい、イライラとしたような声音だった。セシルは過去に何か確執があったらしいと平凡な感想を抱いて、一本の剣と二本の杖を持って自分の部屋へと転移門^{ゲート}で戻った。

調査の依頼

暇だと、セシルは思う。だが、それが世捨て人生活を思い起こさせて心地よい。

何もしていないわけではない。冒険者としての活動もしっかりとしているし、三人の安全にも気を配っている。ただ、近辺の敵や難関はセシルにとって何の驚異にもならないというだけだ。

“金鎖”も単独依頼だけでなく、他の冒険者との合同任務もこなしていこうと考えている。ルーン武器の宣伝という目的を果たすためだ。

「これはまた……凄い杖ですね」

手に持ったケラルトが端的に感想を述べた。オーブのはまった杖は、握った瞬間に分かるような効果だったようだ。もう一方のメイスは使用した際に効果が出る類のものらしい。

「ほう……私には無いのか？ 訓練兵？」

「剣も一本借りたけど、コレ魔導国の商人に頼まれた宣伝用だぞ」
「……要らん」

青い水晶のような剣をちらちらと見ていたが、レメディオスは余程に魔導国が嫌いなようでアインズの言った通りになった。

ケラルトは一通り効果を試している。流石に街中で攻撃魔法をぶつ放すようなことはしていないのが幸いだ。

ケラルトとカルカが使う予定の武器は、ユグドラシルの技術で作られているため、その効果は桁違いのはずだ。もちろん、この世界の武具と比較しての話だ。

カルカもメイスを握るが、なぜか震えるようになってしまい、上手く使いこなせないようだ。

「いざという時のために、近接武器にもなるメイスをカル様に使って欲しいのですが……」

「ごめんなさい、ケラ。手に取るとどうしても震えが……」

セシルもあれからカルカがどのような目にあったか聞いた。恐らくはそのトラウマ

だろう。良くも悪くもカルカは繊細な感性を持つ。一朝一夕で乗り越えられるものもあるまい。

「良いんじゃないか。別に無理して使う必要なんて無いんだし、カルが杖。ケラがメイスで問題無いだろう」

セシルは艱難辛苦の果に得られるものが一番とは思わない。楽をしたければ、楽をすれば良いのだ。セシル自身、人間社会が嫌で森に引きこもっていた男だ。それで何か支障が出た覚えもない。

あからさまにホツとした様子でカルカはケラルトと武器を交換した。メイスは相手を叩き潰す、ある意味エグい武器だ。セシルが想像してみると、カルカよりケラルトの方が似合っている気もした。

一説によると、刃が付いていないから聖職者の武器になったと聞いているが、怪しいとセシルは思う。血よりグロテスクなことになりそうだからだ。

「そうだ。私には訓練兵が日頃使っている剣を貸せば良いんじゃないか？ 貸せ」

「出たよ。パワハラ。シチセイは自分で言うのも何だが、滅茶苦茶高価な剣なんだぞ。誰

が貸すか」

セシルが使う直刀シチセイは珍しく真面目に作った武器だ。攻略サイトと睨めっこしながらデータクリスタルを効果的に使っている。この世界では下手をしなくても、セシル本人より値段が高くなりかねない。

レベル100プレイヤーが使う武器とはそういうものだ。

「さて、日銭を稼ぐにあたって良い依頼はあるかね」

拠点を出て冒険者組合に向かう。ミスリル級になったことで受けられる依頼はグッと増えた。雑魚を倒してもよし、多少遠出をしてもよしだ。

「ここは姉様の勘を信じてみれば良いでしょう」

レメディオスはここまでの依頼で実入りが良い任務を見つけてきている。動物的勘のようなものがあるのだ。

「珍しいな、合同任務か。近辺のモンスターが情勢が変化した可能性があるんで、一定期間調査すること……なんだ、こりゃ」

「このあたりにアンデッドは少ないですし、亜種でも生まれたんでしょか」

「まあケラの言う通りだろうが……賭けてみるか？」

任務は一見退屈しそうなものに見えた。エ・レエブルから東は六大貴族のレエブン侯が治めるだけあつてかなり広い。そんな中をかなり目立つ相手だとしても、探して回るのは無理があるように思われた。

「情勢が変化ということだから、モンスターの棲んでいるような場所を探せば良いんじゃないですかね」

「討伐依頼の方が儲かっただろうが、強力な存在だとしたら遭遇する前に片付けておきたいな」

共に行動するのは白金級の冒険者達だ。流石に場馴れしている様子で、一気に駆け上がった。『金鎖』よりも調査には役立ちそうだった。

「敵が出てきたら、こっちに任せてくれ。調査はあんたの方が得意そうだ」

「ええ。任せといてください。こっちの編成からしても、貴方達の編成からしても、その方が良さそうだ」

「偏ってるから俺ら……」

「金鎖」は全員が信仰系で固まっている。隠密行動はできても、足跡を追うようなレンジャーの真似事などでははしない。ただチームの特色としては目立つため悪くない。冒険者の一人が寄ってきて耳打ちしてくる。

「べっぴんさんを三人もチームに入れてるから、妬むやつもいるでしょうが悪く思わないでください」

「そういう視点で考えたことは無かったな……」

のんびりとした返事に親切な冒険者は苦笑した。期限は一週間だが、数日は穏やかな日々が続いた。戦闘が無かった訳では無いが、「金鎖」があつさりと片付けた。

そんなある日の夜。セシルは無詠唱化した伝言^{メッセージ}を受け取った。

(面白い依頼をしているね)

(のんびり旅気分だ。それで、今日は何か用がありそうだけど?)

(すまないが、生態系の変化は我々がトブの大森林を押しえたことで起こったことだ。だから、調査を早々に終了させたいんだ)

(具体的には?)

(明日、こちらからモンスターを送る。それを撃退して、報告して欲しい)

メッセージ
伝言を飛ばしてきたアインズが語るのは、とんだマッチポンプ計画だった。

マッチポンプの悲しみ

ナザリツク、誰も入れていない部屋でアインズは「遠隔視の鏡」で一人で見物を決め込んでいるような姿勢をしていた。アインズ一人なのはトブの大森林付近の調査の他に、セシルがルーン武器の宣伝をしてくれるか見るためだ。

アインズとセシルの友誼は構築されて間もない。ルーン武器の宣伝に関しては、国家で研究しているとは言え、今のところ私事の範囲を出していない。

(アウラの配下を使うわけにはいかなかったから、データから呼び出したものだけ……)

相手の戦果にもなるよう、それなりのモンスターを呼び出した。配下が死ぬことにアウラがもし、悲しんだらどうしようという考えからだ。使った金銭もそれほどではない。

まずは小手調べ。などと考えるのは少々性格が悪いだろうか。それにしても生態系の調査とは面倒なことをしてくる。エ・レエブルには関係の無いことなので放って置

いて欲しいものだ。

日中の昼間をゆっくりと歩く一団が見える。大分後ろの方で更にやる気なさげな友人候補の腰に、フレイム・スペシャル・ソード・ハイパーがあるのを見てほっこりする。日頃差していた剣と入れ替えてくれたらしい。

一団の先頭が慌てたようにするのを見て、いよいよ始まるなど考える。あの男が出来レースをどのように演じてくれるのかが見ものだった。

それは何気なく草原を歩いているように見えた。

筋骨隆々とした茶褐色の肌。上半身にベルトを巻き付け、手には巨大な剣を途中から切り飛ばしたような武器を持っている。一見、リザードマン蜥蜴人のようだが、人間の倍近い身長がそれを否定してくる。

「なるほど。目的はあいつか」

アインズと出会ってから、セシルのユグドラシル知識は大分回復してきている。細かいところまで思い出せるのは、自分でも驚きだった。これが人間とは違う肉体の能力かと思つたほどだ。

「な、なんだアイツは？ 亜人？」

同行していたメンバーの最前線に、頭を飛び越えてセシルは降り立った。調査に優れる白金級の冒険者達と“金鎖”が入れ替わるような形になる。

だが、残念ながら今回は彼女達の出番もない。

「全員、下がれ。アレは俺が相手をしなけりやならん」

「なんだと！ 私達では不足か!？」

「ああ、不足だ」

レメディオスがあっさりとした断定にぐっと詰まる。他の二人も同様だ。頂点が見えていなくとも、セシルがこの面子の中で飛び抜けて強いのは事実だからだ。

「ドラゴン^{ドラゴン・キーン}の血縁。お前達の言う難度で言えば大体150ぐらいだ」

（実際には特殊能力を持たない分、身体能力はもっと強い相手なんだがな）

セシルは自分のやることを理解した。自分とシチセイなら鎧袖一触だろうが、今回は違う。フレイム・スペシャル・ソード・ハイパーを使って目撃者を生かしつつ、アレと
いい勝負を演じて見せることだ。

(マッチポンプに加えて、宣伝か。欲張りさんだな)

「ではせめて……リインフォース・アーマメント・コミュニケーション〈武器具全体強化〉！」

「ウイスダム〈賢明強化〉、アンチイービル・プロテクション〈対悪防御〉！」

カルカとケラルトから補助魔法が飛ぶ。あまり強化しないで欲しいのだが、数少ない
経験を思い出して悪い気分ではなかった。

ドラゴン・キンとセシルが徐々に歩み寄る。これから先は英雄劇だ。

「貴様、ソレはルーンの武器か!？」

「そうだ！ 古の技術で作られている！」

「腕前と武器、相手にとって不足なし！」

(自分で言ってる微妙な気分になるな……)

剣戟が始まった。セシルは細心の注意をはらって、敵と同等に見せかける。ブルークリスタルメタルの青い輝きがどこぞの映画のように幻想的な光景を作り出した。

こうして戦うとドラゴン・キンも十分な威圧感と臂力の持ち主だ。勿論、セシルほどではないので込める力をぎこちなくなならない程度に抑えている。

周囲の冒険者達は、自分達では介入できない戦いだということを理解した。剣撃が速すぎる上に、二人共無尽蔵の体力を持っているかのようだ。

見えて安心できる要素はドラゴン・キンの武器がみすぼらしいところぐらいだ。

カルカ達は自分達の救済者の姿を改めて目の当たりにしていた。日頃、ゆるく親しげに話していた相手はまさに自分達を庇護する存在だ。だからこそ、肉体を蘇らせたセシルの勝利を信じる事ができた。

「意外にやるな、人間！」

「抜かせリザードマンもどき。この剣、フレイム・スペシャル・ソード・ハイパーの切れ味を知るが良い！」

段々と恥ずかしくなってきた感情と同様に、徐々にセシルはドラゴン・キンの肉体に傷をつけ始めた。あまり長くては怪しまれかねない。

フレイム・スペシャル・ソード・ハイパーの青い輝きが赤い輝きへと変わっていく。そしてドラゴン・キンの短くなっている剣を切り飛ばした。

「赤熱化！」

一合ごとにドラゴン・キンの武器は損傷して短くなっていく。だから武器を持つ相手をアインズは用意したんだなどセシルは納得しながら繰り返した。

そしてドラゴン・キンの手に持つのが武器と言えなくなった時、この時だけは全力で距離を縮めた。そして、目的を達成しようとしているのはセシルだけではない、という哀れみから最後まで全力で相手を唐竹割りにした。

一撃の衝撃波が平野を走っていく。セシルは敵の前で追悼するように剣を大きく掲げて、勝利を表した。

守る連呼

チーム「金鎖」はアダマンタイト昇格審査中のオリハルコン級となった。流石に目撃者が少なすぎたのか、こなした依頼の数が少なかつたのかは定かではない。あるいは武器のフレイム・スペシャル・ソード・ハイパーが評価されすぎたのかもしれない。

セシルにとっては最後者であるほうが良い。実際、別口の依頼と考えてもよいからだ。冒険者組合とアインズ・ウール・ゴウンのどちらが強大か考えると、答えはあっさり出てくる。

ただ、レメデイオスだけは裁定に不満だったらしく、良い依頼があれば次々と持つてくる。おかげで、ここ数日は任務の連続で、ようやく休みが取れたところだ。

……周囲の視線が鬱陶しい。セシルがだらんとしているのはただの酒場だが、それでも好奇の目は集まってくる。モモンガのところで紅茶を飲んでいた時の安らぎが懐かしい。

「こんなところにいたんですか？」

「お前さんこそ、こういうところに来るのは珍しいな、ケラ」

髪の長さが違うレメディオスの妹が立っていた。何か用があるのかと思えば、向かいの椅子に座りワインを注文していた。

「意外だな。酒より紅茶という感じだったが」

「私も貴方は逆だと思っていましたよ」

セシルは手元の紅茶をしばらく眺めた。意外な道德感で昼間から酒を飲むのはあまり良くないと考えていたが、酒場の紅茶は貧乏舌でも顔をしかめるようなものだった。

「それで、何の用だ」

「用……というほどのことは何も。ただチームの仲間として親睦を深めたいと思っただけです」

「まあ確かに……レメとカルは分かりやすい性格だが、俺はお前のことは何も知らんな」

ケラルトも自身のことをセシルに話した覚えはない。ケラルトはカルカの両翼の一人で、レメディオスが剣なら、ケラルトは頭脳を担当していた。

深く物事を考えないようにしているセシルからすれば、距離があっても仕方がない。そんな彼女はレメとカルは分かりやすいと言ったセシルに大きなため息をついた。

「その分かりやすい人達のことを、全くわかっていないのが貴方なのですね」

「……小馬鹿にされたのは俺でも分かったがな」

「まあ良いでしょう。それぐらい純朴な方が都合が良いようですし」

「都合と来たか。腹の中で貯めるタイプかと思っていたが、口に出すんだな。まあそれぐらいの方が俺は好きだが」

好き、という言葉にケラはびくりと反応した。顔や手が少し赤くなっている。

「殿方が女性に対して、好きとか気軽に言うものじゃありませんよ」

「事実なのに何でだ？ 感情はすぐ伝えないと、相手がいついなくなるか分からんぞ」

ケラルトは少し赤いまま、ワインを口に運んだ。まるでこれは酒のせいだとも言うように。実はカルカ達は男性に全く免疫が無かった。

カルカの理想を成就させようとするあまりか、結婚どころか男と交際経験も無い。

「安酒場で雑談というのも色っぽくは無いが、悪くはないものだ」

「はあ……私は頭が痛くなりそうです……セシルさん、セシルさんはいつまでもカル様の味方でいてくださいいね？」

「それは、お前の姉との契約だ。50年ぐらいは付き合うよ。ただ、俺より強いやつに俺が殺され続けられれば、それは諦めてくれ」

「そんな状況はありえないと思いますが……貴方は物語の英雄にも匹敵する力をお持ちじゃないですか」

「世の中、意外にありえるものだ。心当たりもあるし」

セシルはこの世界で最高位の力を持つ。だからといって同格がいらないわけではないと、人間臭い骨を思い出しながら考える。

「それに、今はカルとレメだけじゃなくてケラのことでも守りたいと思っっているよ。お前達は三人揃ってこそだ」

「~~~~~」

なにかケラルトが盛大にむせているが、それはセシルの本心だった。

この三人が強いのは理解したが、互いに補い合って一つの完璧になっているのだから。ならば戦闘能力が飛び抜けているセシルが、三人の誰も欠けないよう守るべきだった。

この調子だと守るものがどんどん増えていきそうな気もするが、彼女達で手一杯だ。

「貴方は意外と……何と言うか、発言が突拍子もないですね」

「いくらなんでも嫌いなやつを守ろうとは思わんよ。そういう意味ではケラが一番守りがいいがそうだな。内に不満を溜め込んでいきそうだし、美人だしな」

セシルはケラルトが時々自分以上に、チームの盾となろうとしている気がしていた。害をなすものを遠ざけ、人知れず処理するような人物に見える。おそらく、実際にそうして生きてきたのだろう。

だが、故郷を追われてまでそんなことをする義理もないだろう。

「武力でどうにかできる相手なら任せておけ。お前も含めて守る。汚れ仕事も構わない。お前はこれから先、自分達の幸せを守るために力を使うべきだ。折角の第二の人生

だしな」

「貴方は……それでは、貴方の幸せはどこにあるのですか？」

「もう腹いっぱいだよ。お前達を助けることが当面の幸福だとも思っていてくれ。さて、安酒場もここらにして、外に出よう。お前の姉のせいで金はあるしな。ケラはどこへ行きたい？」

「……どこへでも。女の買い物は長いですよ」

それでも50年よりは短いだろう。セシルとケラルトも長い付き合いになりそうだった。

懊悩の時期

カルカ達にとってエ・レエブルは安住の地となりそうだった。だが、国という単位でのリ・エステーゼ王国は軋みを上げていた。

前の大戦による労働力の低下。はびこる麻薬。予想される天災。そのどれもが為政者の心胆を寒からしめるものだった。

そこに加えて、王国の貴族階級は波乱の様相を呈していた。セシルはあまり興味もないので、ふーんといった程度だが新興派閥が力をつけたことにより内乱にまで発展しかねないらしい。

この新興派閥というのが負け戦で嫡子に繰り上がった者達が多いとかで、礼儀や情勢を読めない者が多い。だが、この派閥の大きさが他の勢力を上回った時……謀反や内乱が起きる。

と、まあ現在の王国は問題の宝庫だ。ちよつとだけ裏側を知っているセシルだが、罪悪感などは特に無い。なぜならこれは——王国の側が認識していなくとも——魔導国と王国の戦だからだ。

諜報戦とでも言うんだっけか、程度の感想であり、ついでに知識もない。

(問題はうちの三人組だなあ)

正直、王国に勝ち目など無いとセシルは思っている。それはカルカ達も分かっているだろう。だが、アンデッドと人間の戦いが起こった場合、どうするだろうか。

カルカとケラルトはまあ大丈夫だろう。魔導国を憎々しく思っても、それだけだ。しかし、レメディオスは……力ずくでも止めないといけないかもしれない。

(いや、問題児は俺か)

セシルの本当の立場はコウモリを通り越して、完全に魔導国側である。追手から逃れるためとは言え接触し、友好関係まで築いてしまっている。

こんなことを考えるのはエ・レエブルが安定していて、それは魔導王の息がかかっていること知っているからである。

「セシルさん、何か考え事ですか？」

「ああ。珍しくな。王国って戦争とか内乱になりそうだろう？ でも冒険者は参加しない

のが規律だから、ちよつと気まずいな、と」

朝食の際に頭の中で考えていたため、カルカが心配そうにセシルに話しかけてくる。それを聞いてレメディオスが腕を組んで笑い顔で会話を繋ぐ。

「そんなことに悩むのか、訓練兵。今、我々はこうしてここにいるのだから、この街に来た時に助太刀してやればいい」

「冒険者は国家間の問題に首を突っ込まないという話をしているのですよ、姉様……」
「いや、レメの話が一番合っているだろう。余計に動かない方が良い、という意味でな」

ふふんと笑うレメディオス。苦い顔をするケラルトに微笑むカルカ。長くこの退屈な日々が続くと思つていられた時期だった。

あまり笑つていられなくなったのは、王国を冷害が襲つてからである。大冷害というほどのことはなかったが、働き手の減少と合わせて食糧不足の兆しが見えはじめた。冗談のようなタイミングの悪さで、セシルは第6位階魔法コントロールウェザー天候操作の影響を疑ったほどである。

良いのか悪いのかエ・レエブルのような大都市は食糧の備えがあった。味はともかく死者などは出なかった。ところが、小さな領地の領主はそうはいかない。

そんな貴族達が集まっている派閥が都合よく存在し、それなりの規模を持っていた。まるでドミノ倒しのように、王国は内側に混乱を孕んだ。

王国新興派閥が力を大きくし、権力闘争が激化する中、注目されたのが魔導国の動きだ。驚いたことに魔導国は要請があれば、王国への支援を惜しまないと表明した。

「で、結局こうなったわけだ」

アダマンタイト級冒険者チーム『金鎖』は、小さな商人の王都への往來を護衛していた。他人の不幸が自分の幸福というわけで、食糧や物資が余っている者にとっては最大の利益となる。

アダマンタイト級のやる仕事ではないが、小さなキャラバンなどの護衛を慈善事業として率先して受けている。大商人などの護衛は別のチームがやっているだろう。

「まさか噂の『金鎖』の方々に助けていただけるとは……」

禿頭の行商人は御者席でしどろもどろになりながら、礼を言っていた。横に座るセシルは手をひらひらと振って返事をする。

「どうせ野盗は大きな集団など襲わん。無駄な仕事も退屈だからな……つと依頼主に対して失礼だったかな？ すまん」

「いえいえ、これまでの人生で得た最大の人脈ですよ。それにしても王国が波乱の時代に、我が人生が輝くのは不思議なものです」

「救荒食物というんだったか。そりや日頃は売れん。この時期に是非稼いでくれ」

セシルはこうした商人を助けることで、仕事をした気分になりたいだけだ。カルカ達は根っからの善意なので、何も問題は無い。

「しかし、やるせないねえ。野盗も食い詰めた農民混ざりだ。反乱も起きそうだって言うし、どうなるんだか」

「全くだ。きつとろくでもない時代だよ」

これまででこうした仕事で何度か野盗と激突したが、わざわざ思い返す必要もないほ

ど圧勝だった。武器もろくに持たない連中が、セシル達に勝てるはずもない。持つていても勝てないだろうが。

そうして、禿頭の行商を王都へ届け、再びエ・レエブルに戻った。

……物足りない。セシルは自室へと戻ると、自分の手のひらを見つめた。悪いことではない。隠者であるセシルにとって、それは安定を意味していた。だが同時に、欲求をなくすことではない。

セシルの前で誘うように転移門が開いた。

茶飲み友達

フィリップ・デイドン・リイル・モチヤラスは男爵でありながら、大派閥を率いる偉大なる盟主である。後ろには帝国との戦争で血縁が死に、当主に繰り上がった者達を従えている。

つまりは新興の大派閥であり、今やその勢力は王族派閥と貴族派閥に比肩するものとなっていた。

「んふっ」

フィリップは優越感と共に頬を緩ませた。自分がトップ。派閥の中には爵位が上の者さえいる。そう、これがあるべき姿……いいや、この程度ではない。名実ともにもつと上の爵位があつて然るべきだ。

まったく王族達は見えない。しかし寛大なるフィリップとしては「黄金」と称されるラナー姫を差し出し、六大貴族と同等の地位を与えるなら許してやらないではない。

黄金、まったくフィリップの未来は黄金であるべきだ。

だが現在も王や大貴族達は既得権益にしがみつき、フィリップを認めようとはしない。これは国家の損失である。そこに現在の食糧不足。フィリップはやれやれと頭を振った。自分のように作物を切り替えていかないから、こういうことになるのである。

フィリップの領地はまるで高位の森祭司ドレイドがいるかのように、実り豊かだ。領民達も蔑むような目を止め、自分を敬うようになった。

その時、フィリップに電撃が奔った。

これは天啓ではないか？ フィリップの領土を広げ、王国を救えという天の導きだ。そう考えると全てがしつくりと来て、アイデアが次から次へと浮かんでくる。蜂起し、王家に国主たる資格がないと示させるか？ あるいは戦で自領に引きこもったというレエブン侯の代わりに、六大貴族となるか？

いずれにせよ、フィリップの領地が広まれば天候さえ機嫌を変えてくれるに違いない。フィリップの野望は大きくふくらんだ。

アインズ・ウール・ゴウン魔導王は小さな部屋で、切り出した。

「底抜けの馬鹿、というのを見たことがあるか？」

「自分以外だとないなあ」

セシルはアインズの前で紅茶をすすりながら答えた。相手が味覚を失ったアンデッドなので、少し気が引けるが注がれたものは仕方がない。

「いるらしいんだよ。それでそいつが原因となって王国は内乱になるらしい」

「内乱の話は聞いたことがあるな。馬鹿も超がつけば国を揺るがすのか。見習おうか、ならないようにしようか……」

「私の部下達は王国の内乱を望んでいる。そこから魔導国の入り込む隙間ができるからな……という話だ」

「前も言ったけど、それ俺に聞かせていいの?」

いくら興味が無いと言っても、所詮セシルは外部の協力者に過ぎない。国家の大事を話すのに相応しい人間とは言えない。相談相手にしても知識が不足している。

「いや、真面目な話。お前しか頼れる者がいないんだ。警護を依頼したい……といっても私からではなく、向こうからコンタクトを取ってくるはずだが」

「警護つて誰を？」

「王国の次期王……ザナック王子だ」

「向こうを攻めたいのに、守りたいのもいるのか。政治つていうのはよく分からんな」

察するに王国を蚕食し、属国にするにせよ、占領するにせよ、その人物が必要らしい。
奇妙な依頼だ。

「このザナックという人物は中々優秀らしい。動乱の最中にうつかり死んでもらっては落とし所が分からなくなる。できるだけ王国を傷つけずに手に入れたいからな」

「はあ……向こうからコンタクトを取ってくるっていうのは？」

「うん。ザナックはガゼ……ある人物が倒れてしまったので強力な武力に欠けるらしい。ミスリル級やオリハルコン級の冒険者達とコネを持つとうと努力しているそうだし、そこで、異例の早さで昇進した君たちに話がいくのは当然……なのか？」

「聞かれても分からんが、不思議では無いな。エ・レエブルから出てもいいのか？」
「国を出ていかないのなら問題は無い」

しかし、王族というのならカルカと面識がある可能性も存在する。自分一人で行くべ

きか……また、面頬になってもらうしかない。

三人が近くにいないくはこちらが守れなくなる。

「高位のヒーラーでもあるお前なら、暗殺の危険性はグツと減るだろうしな。まあそこは理解している」

「後味悪い展開は避けて欲しいなあ。エ・レエブルの守りは任せても？」

「元々脅迫も兼ねて八^{エイト}肢^{エッジ}刀^{アサシン}の暗殺^{シャドウ}蟲^{タイモン}や影の悪魔を配置してある。少なくとも領主の心配の必要は無いな」

「そんなことしてたんだ……」

それがエ・レエブルが自分の息がかかっていると云った理由か。八^{エイト}肢^{エッジ}刀^{アサシン}の暗殺^{シャドウ}蟲^{タイモン}は不可視化の能力を持つ。単に見えなくなるだけで高位プレイヤーには通用しないが、この世界の住人にとっては最悪かもしれない。

「とりあえずザナツク王子から招待でもあつたら、素直に応じることで良いのか」

「ああ。それで構わない。ふう真面目な話は肩がこるな」

「こるのか、その肩……まあ重そうな服ではあるが」

アインズは肩をぐるぐると回している。正直、かなり奇妙な光景だ。どうやって動いているのかさえ、良くわからないので、そういうこともあるかもしれない。

「ごちそうさん。茶や菓子はこのが一番だな」

「まあ作物もだが、調理スキルの差もあるだろうな。この世界は本当に興味深いよ」

「じゃあ、また会おう」

「待って待て、もう少し話をしていけ。普段雑談など無いんだ」

アインズの愚痴にたっぷり付き合わされた後、セシルは解放された。依頼主とは奇妙な付き合いの長さになってきた。

ザナック王子からの手紙が届いたのは、それからすぐのことだった。

爆弾交渉

通常、冒険者は国家運営に関する活動には参加しない。しかし、それは不文律である上に、法として考えれば当然に抜け道が存在する。

例えば国家運営に関わらない範囲で、貴族や王族が個人で依頼する方法。そして、その過程で得をするというやり方だ。

あるいは物の警護で居場所を固定する方法。建造物や宝物、もつと踏み込んで人間でも構わない。相応の理屈をつければ抜け道はいくらでも存在する。

もちろん、それに対して冒険者組合がどう思うかも自由だ。冒険者組合には総本山と言える統括機関が無い。現に聖王国ではヤルダバオト襲撃の際、冒険者を徴兵した例があるが、これはその街の冒険者組合が大きな権力を持たなかったためだ。

王国もラナー王女の個人資産で依頼する形で、総動員したことがある。

「これは……どうすべきでしょうか」

「さて……俺は受けても良いと思うが……面識は無いんだろう？」

酒場ではなくカルカの部屋に集まって、四人で協議する。

頭が痛いのはセシルだ。アインズからの依頼はザナック王子の警護だが、“金鎖”のリーダーはカルカだ。無理に押し通すことはできない。

「何か王子の下心を感じますね。いえ、下心が無ければ歓談の招待など出さないのですが……問題はどの程度こちらを取り込もうとするかですが、うつつつぶ」

カルカの腹心であつたケラルトが不気味に笑う。今、彼女の頭の中では様々な可能性と謀略が渦巻いているのだろう。こういった場合、セシル並に頼りになるかもしれない。

「レメディオスは腕を組んで立ち、頷いているが絶対に何も分かっていない。と皆が思っていたのだが……」

「しかし、王子から直接招待されて行かないほうが変じゃないか？ それは冒険者の正義とかあるにしても、やましいところが無いことを正直に示すべきだろう。取り込まれようとしたらちゃんと断れば良いんだ」

「誰だお前。レメの偽物か？」

「人が何も考えていないみたいに言うな！」

しかし、話が良い方に転がっていく。利益で考えればアダマンタイト級と言えど、王子の招待は魅力的だろう。そこからセシルはアインズの頼みを聞けるかもしれない。

「そうですね……王国と聖王国はそう仲が悪くない時代もありましたが王族が行き来するほどでもありませんでした……城内でなら身許はバレないでしょうが、外では顔を隠す必要があるでしょう」

「王国内を見るいい機会ですし、行っても良いでしょう。一生エ・レエブルというものなんでしょうし」

普通の人間なら生まれた土地から出ないのもありふれたことだが、三人にはやはり窮屈らしい。セシルは何ら問題ないのだが、人それぞれということだ。

「じゃあ、行ってみるか。気に入られなくても、気に入られても悪いことにはならんだろう」

一番行かないといけないと思ってるセシルがそう締めくくる。気に入られる方を持つていきたいが社交界の知識なぞ脳みその隅でホコリを被っているだろうからあまり期待せずに、あくまで気楽な気持ちで応じたいところだった。

エ・レエブルと王都リ・エステイーズはわりと近い。通り抜けるだけなら何度か機会があつたが、リ・エステイーズは正直、あまり魅力的な街とは言えない。

小さな路地は舗装されておらず荒れた印象を与える上に、實際闇社会的なものが存在する。

それでも王城は流石に堅牢で、威厳に溢れている。多くの塔と城壁に囲まれたそれは実戦的にさえ見えるほどだ。

「しかし、アダマントタイトというのは便利だな。どこでもすぐ通れる。この辺はケラの言う通りか」

「身分証としてもですが、武力の証でもありますからね。アダマントタイト級冒険者に暴れられたらろくでもない、という意味もあります」

王城までにも当然衛士がいて、誰何してくるが、プレート一枚で解決する。便利だが、

警備的にはどうなのだろうかとも思える。

まあ良いか俺には関係ない……とは言えない。セシルの役割はここでの警護なのだから。

やがて見えてきた王城で手紙を見せて、呼ばれるのを待った。

結果はかなり早く出て、慌てた様子の兵士達が宮殿の一つにセシル達を案内した。

「よく来てくれた。『金鎖』の方々。かねてより冒険者との繋がりをもちたかった私としては、最近稀に見る幸運だよ」

「率直に仰られるんですね。『金鎖』のリーダー、カルです。あちらがレメ、ケラ、セシル、私のかけがえのない仲間達です」

ザナック王子は小太りで顔の肉も緩んでいる。風采は悪いが、貴族でない冒険者との挨拶に直接目的を伝える度胸がある。ただ、少しだけ無理に威厳を取り繕うとしているようにも見えた。

「ははっ。色々考えたんだがね。君達、高位冒険者におべっかは意味がない。強いということは我を通せるということだ。この城の兵士など君達の前には物の数ではないだ

ろうしな」

「なるほど。用件はつまり……」

「君達を取り込みたい。この王都で冒険者活動をすると同時に、有事の際には力を貸して欲しいという訳だ。妹も『蒼の薔薇』と繋がりを持つているが私はそうじゃない。ゆえに圧倒的な個という力が私も欲しい」

「直截的ですね。私達としてはようやく安定した生活を手に入れた、というところなのですが……」

「カルカも流石に元王族ということか。話をひきのばそうとしている。いつものような普通の娘のような様子は鳴りを潜めていた。

恐らく報酬について話そうとしたザナツクの発言の前にノックが執務室の扉を叩く。

「はあー。なんだ、妹。俺は大事な来客中だ」

「ええ、ですのをご挨拶を、と思いまして」

了承を得る前に扉から現れたのは黄金の美姫だった。やや幼い感じはするが、セシルはなんとなく気に入らないものを感じた。

「はじめまして、ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフと申します。会えて光栄ですカルカ・ベサーレス様、レメディオス・カストディオ様、ケラルト・カストディオ様、そしてセシル様」

美しい闖入者はいきなり爆発物を放り投げてきた。

時々護衛

王女の放った一言にセシルは、ぼうつとなつた。バレる可能性はあつたが、こうまで早い上にあけすけにだとは思ひもしなかつた。

(……殺すか?)

極めて物騒な思考をセシルがもてあそび出した。何のことはない。この城の住人全員を血と肉に変えてしまえばいいだけだ。

「おい、妹。確証があつて言ってるんだろな? 軽く出せる名前じゃないぞ、それは」
「勿論です。最初に判明したのはレメディオス様のことです。あの方は私の友人達と依頼で接触したことがありますから」

ラナー王女はアダマンタイト級冒険者 “蒼の薔薇” と親交がある。そこから気付かれたのだ。他の証拠を王女が喋っている間、セシルが考えたのはどう嘘をつくかではな

く、どう切り破るかだ。

その前にやることがある。この権力者を排除しても良いのかを確認すべき勢力が一つだけある。セシルは無詠唱化した伝言メッセージを送る。

(おい、ちよつと急ぎなんだがラナーとか言う王族は殺しても構わないのか?)

(なんだいきなり物騒な……! いや待て、殺してはならない人間のはずだ。一体何があつた?)

(俺達の素性に気付いて、べらべら喋っている。正直面倒なのでさっさと片付けたい)
(こちら側の策略に障る可能性もある。しばらくは大人しくしてくれ)

伝言の効果時間が切れると、丁度推理の時間が終わったところだった。仲間の三人は苦い顔をしている。それはそうだろう……せつかく築いた生活が無に帰すかもしれないのだから。

「そうだ。私はレメディオスだ。だが、その二人に関しては違う。聖剣を持って出奔した身だ。どうとなり好きにするがいい」

「というか、姫さんは何がしたい? ここで推理ごっこをしても死体が増えるだけだぞ。

自分で言うのも何だが、俺は結構強いぞ」

ルーン武器ではなく、愛刀のシチセイの柄に手をかける。相手が弱かろうが関係ない。ただ切るだけだ。

「お兄様の新たな友人の架け橋として、話しているんです。お兄様より私の方が手勢が強いということをお兄様は案じておられます」

「弱みを握っているのが、良い関係だと？」

「力関係として、そのぐらいはこちらにも無ければ友人には成れませんから」

友人？ 世の中において上下関係があっても、それなりに理由があれば対等の関係にもなれるが……王女の語る友人という言葉に、何か奇妙なズレをセシルは感じた。

「もういい。ケラ、お前さんが王女さんと話してくれ。俺はザナツク王子と話す」

王子は執務用の椅子に座り込んで、自分が話に立ち入れないようになっていた。実際、王女の語るそれを事実としたならば何ができるだろう？ そう考え込んでいるよう

だった。

「とんだ歓談になりましたね、王子」

「いや……実際、驚いているさ。君達に関する妹の発言が本当なら、まったく凄い集まりとしか呼べない。しかし……見方を変えればどうでもいいことじゃないか？」

「と、いうと殺しにかかりそうな相手とまだ友誼を結びたいと？」

ザナツクは唇を舐めた。顔に反して、覚悟のできる男のようでした。すっかりとセシルの目を見てくる。その様子は覇気があるとすら評せる。

「俺は君達の秘密を守り、擁護する。どこかの貴族の私生児としてでも、文書を発行しても構わん。その代わり、個の武力が必要になったときだけ君達を頼る。最初の提案通りだ」

「なるほどな。だが、あのお姫様が素性をバラした理由は何だ？ どちらかといえばこちらを警戒させる意味しかない。友好関係を壊すだけだ」

「さあな、というのが本音だ。アレの知能は化け物じみていて、良く分からんことをすることがある。本当に友好関係を壊したかったのかもしれない」

アインズ・ウール・ゴウン達が殺してはマズいと思っっている人物。それがセシル達の素性を知っていると明かした。知っっているにしても使い所を間違えているとしか思えないが……それ自体がわざとだとするなら？

ラナー王女の狙っっている目的は何だ？ 少しでも分かったのは王女がセシル達が王国を放つてはおけない状況にすること……恐らく魔導国と繋がりがあることだけだ。顔をあげれば女達が不安げな表情でこちらを見ていた。

「カル。俺としては王子の依頼……時々力を貸すということを受け入れてもいいと思う。お前さんはどうする？」

「私は貴方と同じ道を行きたいと思えます」

「変な懐かれ方をされても困る。自分で決めて欲しいな」

「ええと……元々社会的には死んでる身ですし、正体が表に出ないなら受け入れたいと思えます」

「レメはどうする？」

「もとより、カル様の傍が私のいるべき場所だ。まあついでに手のかかる訓練兵にもな」

その時ケラルトが丁度戻ってきた。話し疲れたような様子で、こめかみを指でぐりぐりと押しながらこちらへと歩み寄ってくる。

「ケラ。今意見をまとめていたところだが……大丈夫か？」

「ええ。王女からは何も聞き出せませんでした。煙にまかれたような、というのはこのことですね。交渉事には自信があつたので、少しショックです」

「じゃああらためて、どうする？」

「王子との盟約ですね。このことがある以上、受ける方が無難でしょう」

そうか、とセシルはザナック王子に向き直つた。商談成立だ。ラナー王女はそれを三日月の笑みを浮かべながら見ていた。

「ザナックの護衛として活動させつつ、いざという時、結び目をすぐ解けるように素性を明かさせたか」

「ええ。占領にせよ属国にせよ、最後まであの王子に付かれていますは協力者の有効活用ができませんからね。他の三人についてはもう利用価値がありません……フフフそれにしては力だけなら同格の者さえ手玉にとるとは流星はアインズ様」

「そんなことはない。ただ、あの男を侮るなよデミウルゴス」
「かしこまりました」

王子の姿

能面のように動かない顔でセシルはザナックと向かい合つて、馬車の中にいた。会談の相手次第でこのようにザナックが時折、護衛を依頼してくる。そういう会談の時は新興派閥の貴族相手だったりした。

起きた戦争で突然、家を継いだ者は貴族社会の常識を知らない場合が多く、武力が必要になる場合もあるということだ。

「……王子というのは」

「え？」

「王子というのは意外と忙しいものだな」

「やつと口を利いてくれたな。そう、王子でも派閥争いからは逃れられんのさ」

先日以来、セシルはずっと不機嫌さを態度で表してきた。実際にはそこまでは無かったのだが、仲間の三人を王女が暴露話で追い詰めたせいだ。

そうした背景を除けば、ザナックは十分好感が持てる相手であることを認めざるを得

なかった。

良くない風体と皮肉げな口調をしているが、ザナツクは自国のために行動している。それは多くの人間を守るためであり、打ち捨てたセシルとは正反対とも言える。

「ただでさえ魔導国との問題があるというのに、いざこざばかりでたまらんよまったく」
「魔導国……」

まさかその魔導国と関係があるとは言えず、表面的な感想に留めておこうと誓う。気付かぬうちに政治の世界にまで足を踏み入れている。

「魔導国には武力では勝てん。魔導王の魔法の前には軍勢さえ無意味だ。いやむしろ軍勢で挑むのは愚かなことだ。同じくらい強大な個人で無ければならない」

「心当たりでもあるのか？」

「ないが、お前ならどうだ？ 勝てるか？」

「さあ……そもそも一騎打ちに行くまでに死にそうだ」

ザナツクの質問は心臓に悪い。危うく一騎打ちなら可能性はあるなどと答えそうに

なる。あくまで自分はアダマントイト級冒険者のフリをしなければならぬ。セシルは久しぶりに頭を使った会話をする羽目になる。

「それにしても護衛はいつもお前だな。他の三人はどうしている？」

「あれらはあれらで仕事をしている。アダマントイト級の実力はちゃんと持っているから、さほど心配はしていない」

嘘だ。セシルとしてはむしろ彼女達の護衛に付きたいところだが、レメディオスに過保護過ぎると釘を刺されている身だ。

「そうか……しかし、あれだな。対等の話し方というのは悪くないな。宮廷に慣れた身には新鮮だ」

「不快なら直すぞ。まあ俺がそういった肩書を軽視しているのは変わらんが……大体そういう奴は間に合ってそうだからこうしている」

「違くない。だが、俺は股肱の臣などといった奴を持っていない。それが父上との違いだな」

皮肉げな口元で目を逸しながらザナツクは押し黙った。こうして会談などに時間を取られるのも、そうした信頼のおける部下がいないからだ。任せられるところは任せるといふことができないでいる。

「真面目にやっついていれば自然と手に入るもの。作ろうとしたところで時間がかかりすぎる」

「まあなあ。せめて、戦士長だけでも決めておきたいところだが……興味ないよな」
「無い。というか冒険者との二足のわらじは無理だろう」

そこからはしばらく無言だった。ザナツクは話題が無いというより、何か考えているようでセシルは暇になった。

戦士の話題が出たということは王国は魔導国に抗う選択をすることもあるのだろうか？ ならばその時、どんな顔をして守れば良いのだろうか。

戦争。幾度も見てきたが、プレイヤーの有無で絶大な差がついたものがいくつあった。王国が魔導国に対して力で勝つ確率はゼロだ。だからこそザナツクは奔走しているのかもしれない。戦い以外の道を模索して、だ。

「魔導国の勢力拡大を止める手立て……本当にあるのか？」

「分からね。だが、探し続けなければならぬ。次期王としての責務というやつだ。勝てなくても、やれることはあるはずだ」

セシルには一瞬、ザナツクの苦笑がとても眩しいものに感じられた。

一方の魔導国でも各守護者達が仕事に追われていた。至高の身に仕えるという自負を持つ彼らに疲れは無いが、忙しいことには変わらない。

王国への侵略計画の他に、これまで一気に勢力を拡大してきた地を統括するシステムを作る必要にかられたからだ。

正直に言えば武力で攻め立てた方が王国への対処としては早いぐらいだが、主に献上する国を瓦礫の山にしたくない。これはアインズも言っていたことだ。

そんな中、一番暇なのはそのアインズだった。部下達は至高の身に雑事をさせたくないし、むしろ自分の結果を褒めて欲しい。どの王も羨む身分だったが、何もしていないというのは心苦しい。

(はあ……もつと上手くやるべきだったな)

暇を埋める雑談相手のことを思いやった。何もかもアルベドとデミウルゴスに任せ
ておけば問題ない、というのが友好関係にヒビをいれることになるとは思いませんかつ
た。

すぐさま呼びつけるというのも考えものだ。伝言で詫^{メッセージ}びを入れるには効果時間が短
すぎる。まるで仲違いした友人に対する未成年のような気分で、関係修復の機をうか
がっていた。

アインズの本心を理解できるのは現状ではセシルしかいなかった。部下達には普通
の話が普通に話せないのだ。

(とりあえず、聖王国の三人を保護リストに入れるとして……他にも何か詫^{メッセージ}びの品を用
意したいな)

アインズはすぐに用意できるアイテムをリストアップし始めたが、相手もプレイヤー
だ。アイテムでは物足りなく思うかもしれない。誠意が見えるような一般品が良いだ
ろうか？

セシルとの関係。ここでも王国と魔導国の熾烈な駆け引きが展開され始めていた。

コウモリの責任

ザナツクの護衛も板についてきた頃……自分の部屋に転移門ゲートが開いていた。ちなみにセシル達は、高級住宅街の中でそこその屋敷を借りて拠点としている。少し四人には広くないかとも思うのだが、カルカ達は生まれ育ちが良いので気にならないようだった。

そして現在、対面者以外誰もいない部屋で、セシルは一国の王が机に頭を打ち付けて謝っている様子を目にしていった。

「本つ当に！ すまない！ 部下があそこまでやるとは思っていなかった。責任はこの私が負う！ 重ねて、すまない！」

「いや、何と言うか……もういいよ」

アインズは口を開きながら希望を見る目で、セシルを見ている。一方のセシルの発言は見えない程度に諦念が込められていた。悪さをした子供の代わりに親が出てきたから、仕方なく許すような微妙な感覚だ。

ようやくアインズが椅子に戻る。サイドテーブルに置かれたお茶を冷めない内に飲むセシル。

「いや、本当にありがたい。俺も今回のような事態になるとは夢にも……言い訳だな。こちらが口に出せることではない」

「まあ部下がいる身というのも大変なものだな、と」

セシルは部下を持った試しがない。現在も表向きはチームの中で部下の方とされている。そうした身で言えば誰かに指示を出したりして、そこにズレが生じても仕方が無いことなのかと納得する他無い。どちらかといえば謝罪に何週間かかっている方が気になる。

「忙しいのか？ そろそろ王国への干渉も佳境だろうか？」

「ん、うん。そちらから見ても分かるのか？」

「ザナック王子の近くにいますからな。王都は良いが、他の街はひどいものだと言っている。後、なんか扇動者がいるとか」

フィリップ餅だかなんだか。セシルは王国の名前に馴染めずにいた。名字があるのは分かる。ミドルネームっぽいのも分かるが、そこまでだった。結果として貴族王族ではザナツク以外の名前は全く覚えていない。

「忙しいのは確かだが、判子をついてばかりいるな。正直、細かくは覚えていない」

「いいのか、それで……王都は良いって言ったけど、麻薬中毒なんかは見ていて気分が悪いぞ、この世界に来る前みたいだ」

「裏社会などにも、勢力が根付いているからな。気分が悪いのはすまないが、対案がなくてな……」

セシルはお茶をすすった。アインズと話していると、昔の光景が写真のように思い出せる時がある。大体が美しいものではない。自分も含めて知らず知らずの内に、あの世界に似せるよう行動していないだろうか？

「向こうというべきかこちらというべきか。民衆の恐怖を煽るものか……食糧はもう流しているが、効果は出てないのか？」

「思ったよりは、と付けるべきだろうな。アンデッドが作った食糧というのは、予想以上

に抵抗があるらしい。良く分からない感覚だけど」

野菜などに貼つてある「私が作りました」という写真を思い出す。アレが骸骨だつたら確かに抵抗はあるかもしれない。

「謀略というのは意外と身近なものなのかもしれないなあ。さて、そろそろ戻るとしよう。あまり長々と居ると、うちの連中がうるさい」

「待て待て、もう少し話をしていかないか？ 緑茶とお土産を用意してある」

「緑茶かあ。少しだけだぞ」

やはり食い物、飲み物には人は勝てないのだろう。それはセシルも同じだった。

ちなみにお土産は伝説級の陣羽織風の装備品だった。かなりのレア度で、セシルは狂つてるのかアイツとちよつと引いた。

「ちよつと凶に乗つてるのではありません？」

帰りの転移門ゲートをくぐる時、そんな声が聞こえた気がした。

元の屋敷に戻ると、セシルは眠る前に色々と準備をしておこうと自室から出た。そこでレメディオスと出くわした。なぜだか既に目が据わっている。

「こんな夜中にどこへ行っていた、訓練兵」

「ある種の夜遊びだ。気にするな」

転移門ゲートを使う時は当然、部屋に鍵をかけている。それをセシルが外出していたと判断したのでろう。

「気にするな、という方が無理があるだろう。カル様も夕食は一緒にできないか、気にしておられた」

「謝っておくよ。今じゃ役割分担しているのだから、あまり気にされても困るがな」

「おい、私達はチームではないのか。確かに冒険者活動は私達が、護衛はお前で分かれているが、だからといって縁が切れたことにはならないだろう」

レメディオスは意外なことにセシルのことを心配していた。自分達の身許が割れた

せいで、余計な負担をかけていないか。何か後ろ暗いことをさせられているのではないかと。

「レメ……随分と優しくなったな。それに落ち着いてきた」

「話をはぐらかすな」

「はぐらかしてはいない。だが、チームだからこそ言えないこともあるんだ。ある意味では俺はお前達以上に問題児だ。危なくなったら、むしろ俺を切り離せ」

「そんなこと、できるわけがないだろう。今更……」

レメディオスがうつむいて、立ち尽くしている。それをセシルが優しく抱きしめる。親愛の心まで失ったわけではなかった。

「そう。問題は俺だ……」

呟いてセシルは天井を見上げた。

首輪でも足かせでもなく

最近森でレメデイオスと出会った日を思い出す。あの時は一人で良かったというのに、気が付けば蘇生にも手を貸し四人組になった。

セシルは自分の立場に苦笑する。鬱屈した半生の方が自由でいられた。隠者の方が楽だということに気付いていたから世の中に関わらなかつたのに、今はこのざまだ。そう、輝かしいモノに惹かれれば苦がついて回る。

「そんなこと、分かっていたのになあ」

「セシルさん？」

「いや、まだ王都は平和だな。そう思っただけだ」

カルカと並んで歩きながら、誤魔化すように言った。しかし、言った言葉に嘘はなく、王都は比較的平和だった。各都市は危険な状態にあるにも関わらずだ。

食糧不足や麻薬。小さな貴族領地では反乱の兆しすら見えるという。ザナック王子の傍にいたので、その状況を一般人よりは把握していた。

「まあ今日はそういうのは良いか、大通りにでも行くのか？」
「ええ、ちよつと良いお店を見つけてまして」

カルカから一緒に外出することを求められた時、セシルは躊躇した。現在の自分の立場……魔導国のコウモリとして生きていくかを悩んでいた時だったからだ。

結局は一人で考えていても何も解決しないだろう、と付き合うことにした。思えばカルカが自分から誘ってくるのも珍しいことだった。

「セシルさんは買物に出かけたりとかしませんね」

「最近はどうでもないな。ケラに付き合わされてだから、自分では何も買わないが……それに安酒場なんかはよく行くよ」

「そうでしたか……」

なにか微妙にどんよりとしているカルカを見ながら、セシルは王族というものには国によつて大分違うらしいと感じた。カルカは王族どころか、女王の地位にあたる聖王女だったから当然かも知れない。

それがこうも機嫌が上下するのはどうかと思わないでもないが、セシルとしては付き合ひやすい。

「女性の買ひ物といえは服だが、最近になってから急に買うようになったな」「身許がバレてしまいましたからね。悪いことだけでは無いことの一つですよ。正直、年中鎧は辛いものがありましたし……それも冒険者稼業が無い時だけですけど」

安全のためにずっと着ていて欲しいとは流石に言えない。それに同じ屋敷に住むようになつてから気付いたのだが、完全に護衛し続けるのも不可能だった。部屋も分かれているし、セシルのように瞬時に目覚めるような真似はそうそうできない。

一人で三人をずっと守っているというのはセシルの独りよがりだった。彼女達は立派にこの世界で生きていける人間なのだ。

これなら親鳥のマネはもうおしまいなのかもしれない。

セシルはそう感じているが、二つ厄介なことが残っている。彼女達が自身の力で生きて行くのを邪魔するもの。魔導国の監視と、それとつながっている自分だ。

カルカ達は魔導国が武力による侵略を選んだ時、自分とは違つて傍観者で居ることはできないだろう。

だが、反抗できるだろうか。監視の排除は簡単だが、魔導国とやりあつて勝てる気はない。奥の手を使つても、向こうも同等の物を自分以上に持つているだろう。

やはり、魔導国の庇護下で生きていくしか無いのか……そんなことを考えていると耳に大声が入り込んできた。

「セシルさん！」

「お、おお。すまなかつた。ちよつと考え事をしていてな」

「女性と二人きりの時は、そういうのは禁止ですよ？」

「確かにそうか。真面目に仕事のこととは忘れるよ」

セシルはカルカに連れられて、様々な店を訪れた。どこも客は少なく、落ち着いた雰囲気だった。それが現在の王国の立場に起因することは明らかだった。

訪れた場所の一つ、装飾店でセシルは良い指輪を見つけてカルカにプレゼントした。信仰系魔法の威力を向上させる透明な宝石の指輪だった。

それを渡す時、なぜかセシルがカルカの指にはめることになつたが、セシルには理解できないままだつた。

夕暮れ時、カルカは子供のように石段を踏み外さないように歩いていた。それは彼女

の金の髪と合わさって、踊りのようだった。

「セシルさん。私達はセシルさんの足枷になっていませんか？　それで時折折悩んでいるのでは？」

「微妙に外れだな。俺は俺こそがお前達の枷ではないか……そう危惧している」

死んでいた身を蘇らせた。ならば、第二の人生は彼女達が思うままに生きれば良い。だが現状ではセシルは魔導国に目をつけられ、アインズの手伝いをしている。セシルがいなければ、彼女達は人質としての役割を失い自由になるかもしれない。

「そんなことはありませんよ。セシルさんは私達にとって、導き手です」

「だが、生き返らせた以上は責任がある。そうでなければ二度死なせるだけになってしまふ」

魔導国から付けられた条件を三人は知らない。王国から出れば死ぬことも、故郷に帰れないことも何一つ知らないままだ。そして現在、王国は静かに魔導国に侵食されている。

「生きていく以上、何か制限があることは当たり前なのです。私がかつて聖王女であり、そこから離れられなかったことと同様に。だから、貴方にこそ自由に生きて欲しい」

「カル、お前は……」

気付いているのか、首輪の存在に。それが、三人と一人を結びつけて協力させられて
いることを。

「きつと、ケラとレメもそう思っていますよ。それと……貴方は隠し事が下手すぎます」

彼女は聖王女。かつて一国を総べていた身。その治世は凡庸だったとしても、一人の
考えを予想するなど当然のことだった。

鍛錬の重み

金属が接触する鈍い音が響く。やや遅れてもう一度。何度も繰り返されて、地面に落ちる音がしたのが最後になった。

その後響くのは息を荒げる音だけになった、ブフウともとれるみつともない音だが、それを笑う者はいない。

尖塔の一つで人払いをした上で、セシルとザナックが剣を振っていたのだ。

「全く、俺には、向いていないな。兄が一部の者に、人気があつたのも、分かつてきた」
「腰をもう少し落として、柄の握りも甘くならないように。だけどまあ格段に進歩はしていますよ」

ザナックは用意されていた水樽から、木のカップを使ってガブガブと水を飲んだ。セシルは汗一つかいていないが、ザナックは滝のように顔を濡らしていた。

政務の合間をぬった気分転換に行われる訓練だが、ザナックの目は本気だった。素振りではなく組み手というのもその真剣さの表れのように思われた。

「良いんですかね。こんなことに体力を使って、悪いことでは無いでしょうが時期外れなのでは？」

「こんな体格だが、会戦なんかが行われれば鎧を着て馬に乗るんだ。体力を少しでも付けておかないとな。それに、できれば雑兵に首を取られるのは避けたい」

「……魔導国相手に戦を？」

刃引きされたロングソードを油染みた布で拭きながら、セシルは訝しげに聞いた。武力という面では魔導国は圧倒的だ。王国に勝ち目はない……などというのはザナックも分かっているだろう。

「王家が意地を見せる時は、そういうこともあるということだ。おかしな話だが世の中には負け方つてものがあるんだよ」

降伏する機会さえ失った時ということだろうか。そうして守るべき矜持だけを残すべく戦う。自分には果たしてそこまでして守るものがあるのだろうか？ セシルが考えれば仲間の顔が浮かんだ。ならば、むしろ自分がザナックから学ぶべきものが多い。

汗が引いて、服装を整えた頃、髪をボサボサに伸ばしてわずかに無精ひげが残る人物が姿を現した。

「よう。秘密の特訓は終わったかい？」

「あんたは確かブレイン……なんとか王女の護衛の……」

「ブレイン・アングラウスだ。良ければ俺にも稽古をつけちゃくれないか？」

セシルはラナー王女の兵士である彼との交流は無かった。ラナーとセシルは初対面が上手くいかなかったただけでなく、セシルからするとどうにもラナーは胡散臭い人物であつたからだ。

ザナツクに目を向けると、頷きを返された。

「俺の側は構わないそうさ。しかし……あんたは別の意味で試合が必要とは思えないけどな」

ブレインは腰から刀を抜き放った。稽古と言いつつも真剣試合のつもりのようにだつた。それに対して、セシルは刃引き剣のまま。相手を侮つてのことではなく、自分の得

物を使えばブレインの刀を斬ってしまうからだ。

「おいおい……マジかよ。セバスさんみたいな人はそうそういないと思っていたが……」

ブレインは一流の剣士。向かい合っただけでセシルの能力を把握した。ユグドラシルプレイヤーの理不尽なまでの身体能力。それを察知したのだろう。

「得ることが多そうだ。少し加減をするが、許してくれ」

「こつちこそお手柔らかに！」

ブレインの刀が唸る。的確に急所を狙ったかと思えば、当たりやすい場所も狙ってくる。実戦で鍛えられた傭兵の武術だ。

それをセシルは難なく弾いた。勿論、抑えようとして抑えられない部分の能力もある。だが、実際に弾いたのは恐るべきことに技量によるものだった。

セシルは武術の天才というわけではない。だが、不老であるため単純に剣を振ってきた時間が長いのだ。ブレインが冴えた剣技ならセシルは厚みの剣だ。

「六光連斬」！

一撃で6つの剣閃が襲う、高位の武技。それすらもセシルは弾いてみせた。

一見、セシルが圧倒的に有利であり、事実そのとおりであるが、セシルは人間の剣技に薄まった感情がざわめくのを感じる。

自分はいくまで能力としてブレインより強い。だが、ブレインの輝きはそんなところには無い。血反吐を吐いて磨き上げた宝石だ。

ブレインの剣技を見て、見て、記憶に刻み込みつつ最後に力尽くで刀を弾き飛ばした。

「……参った」

「こちらは良い勉強になった」

潔く負けを認めた男と、それを受け止めた男は無言で握手を交わしあつた。

「時々、来ていいか？ 今度はあんたの本気を見てみたい」

「それは……試合じゃなくて見稽古ならいいかな？」

持ってきた能力を見せつけるのは少しばかり罪悪感がある。しかし、ブレインの剣技を見させてもらった恩もある。承諾し、本日の稽古は終了した。

「待たせてしまつて良かったのかな、ザナツク王子」

「なに、あのブレインという男も恩を売りたい相手なのさ。優秀な人材を確保するためなら何のことはない時間だ。それで、どうだった」

「素晴らしい技量でした。惜しむらくは身体能力で私のほうが上だったということだ」

実力的にはレメデイオスと互角か、少し上だろう。精神的な面において、凄まじい安定度も見て取れた。隠者であつた期間にも剣を振つてなければ、大言は吐けなかつただろう。

こちらの世界の実力者達の鍛錬の必死さを思い知る気分だった。

護衛が終わり、帰宅するといつもの茶飲み話の転移門ゲイトに誘われた。そこでアインズにもそのことを話すと、彼も覚えがあるようで羨ましい目を持った男の話が出た。

帰ろうとすると、いつも転移門ゲイトを開く少女の姿をした人物が珍しく待っていた。

「ちよつと、用がありんす。手合わせの一つもしていかりんせん？」

吸血鬼との戦い

堂々と姿を見せたのはこれで2度目か。今まで転移門を開く役割しかしてなかった女が、返事を待っている。

「いいよ。行こう」

「思ったより素直でありんすね……てつきり抵抗されるかと思つてありんしたが」「状況考えろ。お前さんのゲートで移動してるんだ。毎回命がけなんだよ」

話しながら、彼女の容姿と立場からNPCだとセシルは見当をつけた。セシル自身は持つていないため、同時に転移してきたプレイヤーという考えを捨てきれずにいたのだ。

「お前さんの主君に伝言で連絡を取つても？」

「構いません。もとよりそちらがそうすることを妨害できるほど、力に差はありんせん」

思っていたより冷静な思考だ。これまでの非難めいた言葉から直情型だと思われていたが、そうでもないらしい。その方がセシルにとっては厄介であると同時に、安心できる存在である。

（おーい。そちらのNPCが俺に何か用らしい。乗ってもいいか？）

（なに？ それ自体は構わないけど……何考えているんだ……なにか危なくなったらまたメツセージをくれ）

「そっちの主君の許可も取ったよ。では行こうか」

セシルの言い方の何かが癪に障ったのか、少し不機嫌になりつつも女は先に歩き出した。長い道のりだが、どうやら上に向かっていているようだった。

そうして辿り着いたのはローマを思わせるコロッセオだった。コロッセオには複数の影があった。スーツを着た尻尾のある男。虫に似た巨体。ダークエルフの双子。どの人物も自分と同等のレベルを持つとセシルは肌で感じた。

「おや、シャルティア。ちゃんと暴れずに連れてこられたみたいだね」

「そこまで考えなしじゃあ・り・ん・せ・ん！」

どうやらスーツ姿の男がリーダーシップを取っているらしい。顔のメガネも相まって、知的な雰囲気をしている。しかし、その奥にある悪意を知るものはどれほどいるだろうか。

「まずは、はじめましてだね。私はデミウルゴス。この地下大墳墓の第七階層守護者だ。

一応歓迎はしておこう、協力者よ」

「ああ、セシルだ。よろしく」

セシルが異形にもまったく動じずに返事をする、周囲の空気が少しばかり冷たくなった気がする。そのことから彼らにとって独自の上下関係を築いているのが窺える。そして、セシルはそのヒエラルキーでは下に位置していることも。

「勘違いしないで欲しいのだが、我々はアインズ様に忠誠を誓う身。そして君は単に人質を取られた協力者だ」

「身の程をわきまえろ、と？」

「まあそういうことだね。だが、今回の招待は君と親睦を深めるためだ。アインズ様に仕える我らとも面通しを済ませておきたいと、そういうことだ」

「なるほど。だから試合か。こちらの戦力をあらかじめ把握しておこうと。レベル100がそれだけののに随分と慎重なことだ」

「シャルティア……」

「ちよつ、ちよつと口が滑っただけでありんす！ どちらにせよ親睦試合には変わりなく……戦うのは私でありんしょうが！」

声とともに女の衣装が真紅の全身鎧に変わる。そして手には槍のようなものを持っている。前衛職、何系まではセシルにも現段階では判断できない。

「いきなりか、まったく。モモンガに確認を取る暇も短い」

（聞こえているか？ 親睦試合だそうだ）

（は？ それはどういう……）

「様を付けなんし！ このシャルティア・ブラッドフォールンがお相手してあげましようや！ 朱の新星！」

紅蓮の炎が飛来する。名前に相応しく周囲まで赤く染まるが、対個人用であり、その系統では最強の炎系魔法だ。

しかし、セシルはシャルティアが術を発動させる前から移動していた。

「当たらないと意味がないって、この世界だと身にしみるな」

移動しながら信仰系のバフを自分へと付与しつつ、セシルは飛行を起動させる。それに合わせてシャルティアも空を飛ぶ。

先の攻撃からして、魔法攻撃を使うだけ使うタイプと見たセシルは接近戦に持ち込む腹積もりだ。

「^{エクス}魔法^{ステント}持続^{マジック}時間^{延長}・^{サン}太陽^{ライト}光」！

「ああ！ 鬱陶しい！」

目くらましのつもりで使った太陽光だったが、シャルティアの動きが鈍っている。どうやらヴァンパイアだったようだと考えながら、セシルはシャルティアに肉薄する。

愛刀シチセイを閃かせ、好機と見て畳み掛ける。槍と直刀がぶつかり合う。互いに魔

法を使う余地を与えないよう、激しく打ち合った。

しかし、次第にセシルの方に天秤が傾いていく。太陽光サンライトによる一手の遅れ、それを最大限に活かしているのだ。

加えてランス相手など戦い慣れてると言わんばかりに、セシルは防御と攻撃を一体化させつつ切り刻む。そこにあるのは圧倒的な技量差だ。レベルや能力値に関係なく、ただひたすらにセシルの剣撃は上手かった。

そこにセイクリッド・フエンサーによる〈聖撃〉が載っているので、手がつけられない。シャルティアは起死回生の策として死エせる勇者インヘリヤルの魂による分身の生成があるものの、セシルは王道をぶち壊すかのように邪魔をする。

痛みのタイミングで物理的に魔術の詠唱を邪魔し、スキルの発動を許さない。集中力を削いで削いで戦いの流れを一方的にしていくな。無詠唱化による攻撃魔法を防ぐため、常にピタリと相手との一定距離を保っているのは超がつく一流の剣士だ。

シャルティアは悪態をつく余裕すら妨害された。長期の消耗戦を強いられることを覚悟したが、ただ苦戦が長引くようにも思えた。

「双方、それまで！」

それを止めたのはこの地の主、アインズだった。セシルはそれに従うように肩を竦めて地上に降りた。シャルティアも青ざめた顔でゆっくりと着地した。

影から胃痛

アインズは影からその戦いを見ていた。純粹にセシルの戦闘能力を見たいというの
もあったが、それ以上に何でこんなことになっているのか分からないからだ。

親睦試合という名目と、他の守護者達が介入しないことから殺す気は無いようだが、
戦っているシャルティア自身は痛めつける気満々である。

(どうして、こうなったんだ?)

アインズに覚えはない。いや、もしかすると日頃の何気ない会話からこの事態に陥つ
た可能性が高い。なにせアインズは凡人であり、一週間前のこともよく覚えていない。
文字通り無い脳みそを絞って考えると初めてセシルと出会った日が思い起こされた。

『構わんで、デミウルゴス。これでやつに首輪ができ、計画に支障もない。なにより、あ
の男には利用価値がある』

『——なるほど。そういうことですか』

『フッフッフ。そのようなことは考えていないぞ、デミウルゴス』
『フッフッフ。ええ、分かっておりますともアインズ様』

何がそういうことなのかさっぱり分からなかった会話。アインズにとってはお茶を濁すだけの会話だが、デミウルゴスにとっては違った。

(あれか——！)

アインズが立てたとデミウルゴスが思っている策に、セシルが確実にナザリック側に立っている必要があるのかもしれない。そのため親睦試合と称して、力の差を見せつけているのだ。セシルと同等の存在がこれほどいるんだぞ、という主張か。

(それにしても、強いなセシル。信仰系前衛職なのはシャルティアと同じだが、それだけに差が見えている。ユグドラシルでも運動神経高い方が前衛は有利だったし……：たつち・みーさんと同タイプか？ まあ装備とスキルに差があるから、あそこまで化け物じゃないけど)

そんなことを考えている場合ではないのが惜しい。これからデミウルゴスのメンツを潰さないように戦いを止めなくてはならないのだ。セシルを使った策などアインズにはこれっぽっちもない。だが、あるように見せかけながら、威厳を損なわれないようにしなければならぬ。

できればこうした出来事が起きないように、セシルをNPC達に認知させる必要がある。彼をナザリツクに益のある協力者であることを知らしめるか、自分自身がそう思っていることを伝えるのだ。

アインズの無い心臓が高鳴る。部長にでも呼び出された気分だった。しかも資料も何もなしだ。

だが、アインズにとってセシルは味方でいて欲しい存在だ。いや。この世界に転移したプレイヤー同士として、友人関係にまで持っていきたいのだ。

「双方、それまで！」

シャルティアが大怪我をする前に、なんとか声を発することができた。あとは堂々たる振る舞いを見せながら、事態を收拾しなければならぬ。

骨の両手を打ち鳴らして拍手をしながら、アインズは守護者達に近づいていく。守護

者達はひざまずき、立っているのはセシルだけだ。

「シャルティアよ。見事な戦いぶりだったぞ」

「は、はい……ありがとうございます！ アインズ様！」

「どうだ、我らが協力者も中々の腕前だったと思わないか？ うん？」

「は、はいいい」

暗に怒られていることと思つたシャルティアはがくんがくんと頭を揺らしている。それに対して、他の守護者達は冷静なままだ。

これはやはりデミウルゴスの作戦の一部なのだなと思いつつ、デミウルゴスとはなるべく目を合わせないようにした。

「セシルよ。お前も見事な腕だ。かつての仲間たちを思い起こされた。感謝しよう」

「あー、ありがとうございます。陛下」

（なにこれ、どうなってるの）

（知らん！ なんとかなるよう調子を合わせてくれ！）

「アインズはぐるりと守護者達を見渡した。かつて、自分もミスをすると言ったはずだ！ ならばこれもなんとかなるはずだ、と自棄を起こした。」

「すまん、デミウルゴス。至らぬ我が身を許してくれ」

「アインズ様……？」

そして、ばさりとジルクニフのように衣を翻させて、声高らかに宣言した。

「私はこれまでセシルを協力者として遇してきた。だが、この才と人柄はそれには惜しい。このアインズ・ウール・ゴウンの友人として迎え入れたい」

「それは……」

「アインズ様が仰るのなら、それが正しいんじゃない？」

「武人トシテハ歓迎デキルガ……」

「このナザリツクにおいてアインズ様のお言葉は絶対。いや、世界中のどこにあつてもです。我々もまた、セシル殿に頭を垂れましょう」

デミウルゴスの発言を合図としたかのように、守護者達がセシルに向き直る。

「これまでの非礼の数々。お許しくださいセシル殿。我らもこれより敬意をもつてセシル殿を迎え入れましょう」

「いやいや、そう畏まらないでください。私もまた、魔導王陛下の協力者として依頼を受けていくだけです」

表向きにこやかにセシルはアインズの友人という肩書が増えた。場をあらためてセシルはアインズと向かい合つて茶を飲んでいた。アインズは縮こまったような姿勢になつている。

「部下を制御できてないとは聞いていたが……」

「いや、本当にすまない。ここまで直接的行動に出るとは……」

「大体お前の友人つて何するんだ。公然と茶を飲みに来れるようになっただけだろ」

「もちろん、相応の礼は出す。人質も解除する。その代わりと言つては何だが引き続き、力と知恵を貸してくれ。俺の友人でいて欲しいというのは本当だ」

「愚痴の話し相手の間違いでは……」

セシルはしばらく黙っていた。何か気に障っただろうかと焦るアインズにセシルはぼつりと言った。

「あの連中はお前がいないと生きていけないんだな。うちの奴らはそうでもなかったよ
うだよ」

茶番でも必死に

季節が少し巡り、とうとう王国の状況はいくところまでいってしまいました。コップに注がれ続けていた水が溢れ出したかのようだった。貴族派閥の反乱とそれに迎合した新興勢力の台頭である。

「とうとうこの時が来ましたね……」

カルカが物憂げな顔で呟いた。借りている屋敷の一室にセシル一行は集まっていた。全員冒険者として登録している身である。国家の危機に関わることはできない。たとえできることがあつたとしてもだ。

「食糧不足や治安の悪化といった内政。魔導国という外圧。そのどれにも決定的な手を打てずにはいましたからね……元々王族の勢力が圧倒的というわけではない国で、この状況を覆すことはできません。恐らく私やカル様でも無理だったでしょう」

元々国家の内政にまで関わっていたケラルトの発言は重い。セシルもザナツクを通じて覚えがあるが、王族の派閥は結束こそ強いものの、外への干渉は難しい立場に置かれていた。

国王ランポツサⅢ世もそうした人物らしく、常道を外れてまで強権を振り回せる性質ではないと、ザナツクから聞いていた。

「そこで登場するのが魔導国か。救世主になるのか侵略者になるのかは分らんが、あの骨野郎の思うがままだ」

「意外と上手いこと言うな。王国の倉庫には魔導国の食糧が大量にある。高く付くだろうが、それで王族派の勢力圏は飢えから解放される。間接的にせよ魔導国は絶対に関わるし、得をする」

割高の値段だが、王都の倉庫や港の倉庫には聖王国への支援物資も含めて大量の食糧が詰まっている。それを使えば民の不満は抑えられるだろう。

だが当然に王国全土に行き渡るものではなく、王都から離れるごとに十分な支援を受けられなくなる。

「反面、魔導国は豊作だそうだからな。貴族派閥や新興派閥は魔導国に支援を求めたりするかもしれない」

セシルはぼやいたが、最悪はとち狂って反乱軍が魔導国を攻めることだろう。まあ戦力という点で魔導国は王国を遙かに越えているので、そんな馬鹿はいないはずだ。

「俺はいつもどおりにザナツク王子の警護だが、お前達は無理に働くことは無いんだぞ？ 特にレメは魔導王となにかあったようだからな」

「……王国の民を守ると思うことにする。王国は聖王国への救援はしなかったが、弱き者は守るべきだ」

「変わったな……」

レメディオスを最初に見た時は狂犬のようで、まさに狂気を宿した強い目をしていた。だが、戦う理由はそのままにレメディオスは穏やかになった。

それは成長と呼べるものだろう。それに対して自分は何か変わったか、セシルは自身に問いたくなる。変わったのはほんの少しだけ。生きていて欲しい者がいくらか増えただけだ。だが、それで良いのかも知れなかった。

「王国からの依頼で、私達も倉庫街を守ります。魔導国のためではありませんが、善良な民のためにはなるでしょう」

「気をつけてくれよ。何が起こるか分からん。できれば常に三人一緒にいるのが好ましい」

「心配してくれてるんですか？」

「そういうことになるのか……だが、ある意味俺よりお前達の方が強い。思うままにやってくれて良い頃だろう」

自身が蘇生させたとはいえ、彼女達は立派な一個の人間だ。きっと死に時も生き時も自身で決めるだろう。もはや自分の手は必要ない……その感情を寂しさと呼ぶということセシルは忘れてしまっていた。

ザナック王子は徴兵され始めた兵の訓練場を視察したが、その時間はわずかなものだった。訓練は明らかに気が入っていないが、理由はそれまでの戦場とは異なる。

反乱を起こした貴族派閥が兵を興して攻め入って来た時、同じ国の人間同士で争うことになるのだ。人間というのはおかしなもので、奇妙なところで連帯感を持つものだ。

恐らくは貴族派閥も似たような悩みを抱えていることだろう。

徴兵制を取っているリ・エステイーゼ王国の泣き所だが、おかげで短い貴重な時間が稼げる。

「状況は最悪を通り越したようなものだ。こちらが勝つたとしても、弱った半死半生の国を他所の国が放つておいてくれるかね？」

「聖王国は同じように疲弊してる。だから当然、その相手は魔導国となるわけだな」

「笑えるだろう？ ただでさえ戦場で勝てない国を相手に、素手で挑むわけだからな。最高の茶番になるだろうさ。それでも親父は魔導国の属国になるのを拒むだろう。歴史と忠臣に挟まれて、身動き取れ無いのが現状だ」

ザナツク王子がたるんだ顔に皮肉げな笑みを浮かべた。その顔つきのまま執務室へと向かう。

王子は最近では机に向かい、何とか被害を広げないような方策を探っていた。そんな彼と話すのは最初、妹王女とセシルぐらいのものだった。

だが、今では軍務尚書や内務尚書など次第に増えてきている。セシルは今、一人の王の誕生を見ているのかもしれない。例えその道が魔導国の属国という形になるにせよ

だ。

各尚書達が知恵を絞って、どうにか独力で今のあらゆる苦難を弾き返す方法を探す。そんな手段などないことは皆分かっている。食糧不足に内乱……これに打ち勝つには敵国だったはずの魔導国の支援が必要だということに。

王への道

ピンと糸を張ったような音が響いた。その音楽を奏でたのはセシルであり、相手は人間だった。貴族服の下にクロースアーマーを着込んだ連中は、貴族としては最も最下級であるはずの者たちだ。

勢力の巻き返しを謀るザナツクを狙った刺客達である。勢力には人数が必要だが、誰彼構わずに取り込むとこういうことがまま起きる。

刺客として入り込んだは良いものの、絶対的な盾によって念入りに四肢と頭を切り刻まれて終わるとは彼らも思っていなかっただろう。

「人の死体を見るのに慣れていくのもどうかと思うな……親父のところは大丈夫か？
すまんが、セシルが見てきてくれないか」

「一緒に行くなら。二箇所と同時に存在することはできない」

ザナツクは少し青ざめた顔に、ニヤリと笑みを貼り付けて父王の部屋へと早歩きを開始した。

セシルがいる限り、ザナックは安全だ。事実としてセシルほど護衛という役目に長けた者はいないだろう。圧倒的な剣腕に加えて、信仰系の術者でもある彼がそばにいれば例え毒を盛られたとしても、すぐさま復帰することが可能だ。

果たして王の部屋にたどり着くと、丁度貴族が短剣を振り下ろそうとしているところだった。すぐさま、セシルが刺客を解体すると老体であるランポツサⅢ世は、軋むような動作で立ち上がるところだった。

貴族派閥との戦闘では堂々たる戦場より、こうした暗殺が恐ろしい。リ・エステイーズ王国、国民900万とも言われるほどだが、つまりはそれだけ貴族の数が多いことも意味する。

ザナックがセシルを雇い、ラナーがブレインや蒼の薔薇と親しくしているのもそれだけの理由があるのだ。

「しかし、随分と直接的な行動に出てきたな……衛兵！ 死体を片付けろ！ 身許なぞどうでもいい！」

「陛下、王子。体調が悪いのならすぐに言ってください。治療しますので」「いや、私は大丈夫だ。しかし、貴族たちがこのような手を使うとは……」

確かに恐ろしいが、外聞は悪い方法だ。これは貴族派閥も物資の調達に苦勞していることを意味する。長期間の戦時体制には耐えられないのだ。

そのことをあめ玉のように口の中で転がしながら、ザナツクは一旦自室に戻った。護衛の身としてはザナツクだけ気にしてればいいのだが、要人を守るのに無防備すぎる城内をセシルはどうかと思つた。

死体は短時間のうちに運び出されているが血は軽く拭かれただけだ。肝がすわつてきたのか、ザナツクはそんな部屋で仕事を開始した。

「貴族派閥も食糧に窮しているのは確かなようだ……元々、それを大義名分の一つにして起こつた争いだから当然だ。ここはやはり……」

軍務尚書と内務尚書が騒ぎを聞いて訪れてきたが、四方に残る血の跡にぎよつとしていた。作つたセシルとしては仕事だと理解して欲しいところである。

「軍務尚書、内務尚書。ここはやはり、魔導国に支援を求めると思う」

「王子！ それは恐らく陛下が……」

「許さないか？ だろうな。だが、俺と親父を暗殺者が襲つた後だ。安全のためという

ことで親父には静養してもらおう。この件が終わった後、俺が罰せられても構わん」

軍務尚書と内務尚書は顔を見合わせた。王国と国境を接している聖王国は現状、親魔導国だ。助けなど期待できないというよりは魔皇ヤルダバオトの一件の後で、その余裕もないだろう。他にも評議国があるが、同盟関係を結ぶに至っていない。

食糧を持ち、内乱の最中でそれを運ぶことができる国……それは皮肉にも敵国であるはずの魔導国しかない。不承不承うなずいた。

「しかし、それではより大きな脅威を国内に呼び込むことに……」

「そうだな。だが、内乱で国を乗っ取られるよりは王族派閥は残る。二人には魔導国に対する見返りを考案して欲しい。最悪、属国となっても自治権をより大きく譲歩してもらせるように……どのみち、魔導国が攻めてきたのなら敗けるわけだしな」

王国の優秀な部分を残して落とし所をつける。セシルはそれを知っている身として、魔導国の思惑通りであることがどことなくむず痒い。

「セシル、金鎖に新しい依頼を頼みたい。魔導国への使者を護衛して欲しい」

「……貴族派閥よりも先に要請が届くように？」

セシルの返答に分かっているじやないかと言わんばかりに、ザナツクは笑った。となると、面識のあるレメデイオス。表向きいいことになっていくケラルト、カルカはマズい。

「俺が行こう。その間、王子の護衛は他の面子に頼む。倉庫街の護衛はそちらから出すことになるぞ」

「分かっている。支援を頼むのに魔導国の持ち物が略奪にあつたらマズいからな」

ゲートを出してもらえば一瞬のことだが、それは行えない。ひどいマッチポンプだと思いつながら、ザナツクが親書を作り終えるのを待つ。

こういう時、無詠唱化した伝言メッセージは便利だ。恐らく、相手は迅速な対応として見られたはずだから事前に連絡しておいたほうが良いだろう。

（おーい、王国が援助を求めることが決まったぞ。表向き使者がエ・ランテルに到着するのはもう少し先になるだろうが）

(よし、そうか。食糧や簡単な装備を大量に用意する。ルーン武器も持っていこう)

いつもどおりだなコイツ……と思いつつながら無言の会話を終える。この時王国は貴族派閥との争いに集中するあまり忘れてしまっていた。新興派閥という第三者の存在を失念してしまっていたのだ。

腕が痛い

新興派閥の面倒なところは、特に何ができるわけでもない、というところにある。貴族派閥に迎合し、反乱を扇動したりしている癖にどこにでもいる。誰も覚えていないような木っ端貴族だからだ。よって子爵や伯爵といった比較的地位の高い人物だけが警戒される。

だから誰も気付かなかった。扇動の首謀者でありながら一介の男爵に過ぎないフィリップ・デイドン・リイル・モチャラスが王都に舞い戻っていることに。

フィリップは王都で噂を聞いて、これが最大のチャンスだと確信した。

王子が王を軟禁しているというのだ。聞いた瞬間に思惑は加速し、彼を迅速な行動に移させた。忠臣が王を救う。これほどの英雄譚が他にあるだろうか？

「完璧過ぎる……」

現在は貴族派閥に乗っかっている形だが、王を戴けば正当なる勢力を名乗れる。王族派閥は瓦解して、軍門に下るだろう。王を救出すれば爵位も思いのまま。2つの勢力を

合わせた数と権勢の前には貴族派閥もどうしようもあるまい。

協力者から情報を得て宮殿内に侵入するのは、思いの外容易だった。王が軟禁されている部屋の防備も手薄なものだ。全てがフィリップのために用意されていた。

「それが、なぜこうなるのだ！」

ランポツサⅢ世は突如現れたフィリップに屈しもしなければ、協力もしなかった。挙句の果てにフィリップを不心得者扱いし、自分を軟禁している兵を呼ぼうとする始末。そこで逃げる機を失い、現在フィリップは王を人質に立てこもる羽目に陥ったのだ。

「親父はどうしている？」

「とりあえず危害は加えられていないようです」

「といっても親父も歳だ。あまり長い時間、立てこもられても困る。大体そのおかしなやつはどうやって入ってきたんだ」

「どうも王城内に隠し通路があったようです」

ザナツクは兵の言葉を聞いて唸った。恐らくは王になった者にだけ教えられる通路

なのだろう。そうしたものがあるのは少しもおかしくない。どうやって賊がそれを知ったかは不明だが……

「レメ殿、行けるか？」

「外に出てくる瞬間さえあれば、割り込んで引き剥がすのは容易いが……こんな時に限って訓練兵はいないと来てる」

「訓練兵？」

「王子の護衛に付いていたでしょう」

「ああ、セシルか。アイツなら閉じこもってもどうにかできそうだが、使いに出したばかりだ……」

レメディオスも強者だが、刃を首に当てられたままの王を中に飛び込んで救う真似はできない。せめて賊が道を開けるよう要求してくれれば、扉を通る瞬間に引き剥がすことができるのだが現状どうしようもない。

危機的な状況なのだが、なんとも締まらない空気だった。仕事はほとんどザナックに移っている。更にザナックの護衛はアダマンタイト級冒険者だ。正直、情を排して考えればどう転んでも何とかなってしまふ。むしろ貴族派閥と新興派閥が、王を汚い手で暗

殺しようとしたという宣伝すらできてしまうだろう。

「なにがやりたかったんだアイツは？　だが、立てこもられている間は厄介だ。宮殿内でこのままにしておく訳にはいかない……」

「人間種魅了を使うのはどうでしょう？」

「悪くないが、向こうから扉を開いてくるタイミングが必要だな……食糧か水を要求してくるまで待つしか無いな……」

扉が開けばどうとでもできるという状況だが、それを待っている訳にはいかない。全員で知恵を絞り合い、積極的に状況を改善できる方法をひねり出した。

第3位階魔法次元デイメンジョナル・ムレフの移動でケラルトが中に侵入すると同時に、魔法遅延化デイレイマジックであらかじめ発動させておいた聖なる光線ホーリーレイで賊の腕を攻撃する。失敗すれば治癒魔法の順番になってしまうが……ケラルトは第5位階まで使えるマジックキャスターだ。相手が首を裂いた程度なら時間との勝負である。

「同時に私とカル様も扉から入る。頼んだぞケラ」

「ええ、セシルさんがいなくてもできることを見せつけてやりましょう」

3人は頷き、絆を確かめあった。その横でザナックがわざとらしく咳払いをした。

「難しいことだが、賊はできるだけだけ生かして捕らえてくれ。今後の外交カードになる。失敗しても恨みはしないが……親父を頼んだ」

作戦が決行された。ケラルトが黒紫の穴に入り、室内へと侵入した。同時に聖なる光線ホーリーレイがフィリップの腕を焼き払う。光線はコレ以上無いほど上手い軌道を描き、剣を持つ腕と肩の間の肉を削り取った。

そのままケラルトがフィリップに飛びかかり押さえつける。フィリップは渾身の力を出してそこから逃れようとするが……

「弱い……」

「痛いよおおお！ 腕が！腕が痛くて！」

フィリップは死力を尽くしているようだが、ケラルトの細腕を振り払えない。レメディオスが扉を蹴り破り、事態は収束していく。

こうして新興派閥に対する絶対的な切り札をザナックは手に入れた。それ自体が魔導国の狙い通りのゴミ掃除だと気付かないまま……

一方のセシルも使者の護衛をして、つまらない妨害にあっていた。

セシルは使者の馬車を止め、目の前に立つ幾人かの男女に興味なさげに質問した。

「誰だ、あんたら」

「漆黒聖典とだけ言っておこう」

支援要請

馬がいななき、馬車の再始動を促す。セシルは白髪からホコリを面倒くさそうにはたき落としながら、ちらりと馬の方を見た。

「なんだか仰々しい名前の集団だが、道を急いでいる。とつとどいてくれ」
「ふむ。我々を見て怯えぬか。思っていたより弱者なのか？ それとも……」

規格外の強者なのか。漆黒聖典の半裸の男は測りかねた。一方のセシルの方は彼らの力は大体想像がついている。威厳をまとっているが、自分には脅威に感じられない。大体レメデイオスかそれより少し上の集団だろう。

「とりあえず弱い人を巻き込むのは反則ということにしよう」

セシルは直刀を何も無い空間に突き刺すような動きを見せた。するとそこから血しぶきが舞い、奇妙な金属板を身にまとわりつかせた男が現れた。その様子に王国の使者

は思わず絶句し、顔面が蒼白になった。

直刀は暗殺者の肩をえぐり抜いていた。

「彼の動きを見抜きますか……想像以上の強者ですね。アダマントイト級冒険者のセシルさん」

金髪で温和そうな男が、称賛するように片手を上げた。奇妙な格好をした男はそれで馬車から離れていく。暗殺者じみた男を殺さなかったのは単なる気まぐれだと感づいたらしい。

金鎖では比較的大人しくしていたセシルだったが、金髪の男はセシルのことも知っていた様子だ。余程前から見ていたようだった。

「それで用件はなんだ。初対面だが既に印象悪いぞ、お前ら」

「用件ですか。率直に言えばまず貴方を仲間に引き入れたい。そして、次に王国が勢力を残したまま魔導国に併合されるのを避けたいといったところですよ」

「嫌だね。俺の仲間はもういるし、現在その魔導国に向かって仕事の最中だ。仕事はちゃんとやらないとな。それで、そこをどいてもらえるんだろうな？」

「我々としては穏便な方だったのですが……王国に残った貴方の仲間を勧誘しに行つてもっ。」

「それは自由だ。あいつらは立派な冒険者だからな。自分の行く道など、俺に聞くまでもない。」

少しだけ眩しさを感じるが、彼女達は自分がいなくても生きていける。この漆黒聖典とやらにレメデイオス達が入りたいというなら、それも良いだろう。

だから、今セシルがやっている仕事とは無関係だ。

「十秒以内に道を開けないと、全員殺す。十、九……」

温和な男が頷くと、彼らは素直に道を開けた。だったら最初から妨害なぞするなよと思いつながら、セシルは後方の馬車に合図して移動を再開した。

馬車の横に移動しながら、いかにも気怠そうな格好をした女が不服そうに口を開いた。

「ちよつとー、あんなやつに言わせておいていいの?」

「良いんですよ。あくまで自由意志に任せた勧誘ですから……それとも勝てましたか？」

半裸の蛮人は真剣に小首を傾げながら考えてから、言葉を発した。

「いや……なんとなくだが不可能に思える。一瞬見せた動きは間違いなく強者だが、それでいて何も感じなかった。次元が隔絶しているのかもしれない」

「貴方がそう言うのなら、我々では無理だったということでしょう。このことは上に報告するだけにして、蒼の薔薇や朱の雫などに粉をかけに行きましようか」

今の男が魔導国側の人間では無いといいのだが、そう思いながら職務に戻ることにする。漆黒聖典はスレイン法国の特殊部隊だ。勝てない相手に躍起になったり、帰還できなくなる状況になるようなことはしない。それが軍人と冒険者の違いと言えるかもしれない。

「全く、余計な時間をくった」

依頼を果たすだけならセシル一人の方が圧倒的に早いのだが、王国の使者を伴っていないければ親書の意味は無い。そう考えると先の邂逅は案外、危険だったかもしれない。守りながら戦うというのは、どんなアクシデントが起きるか分かったものではない。

無論、敗けることは無いがセシルはこの世界の存在を軽く見るようなことはしない。武力的に優位でも精神面の強さは別なのだから。

途中の街で馬を替えながら、馬車とは思えない速度で進む。走ったほうが速いセシルは馬に悪いとは思いながらも、護衛のために酷使し続けた。

そうして魔導国の勢力下にある街、エ・ランテルへとたどり着いた。都合よく、魔導王はエ・ランテルにいるらしい。

使者は検閲所で簡単な説明だけ受けて、薄汚れた服を着替えて謁見に臨んだ。セシルはようやく終わったかと思いつつ、庁舎には入らず馬車の中で待った。後は予定された結果を待つだけだ。

「本当に亜人と人間が一緒に暮らしているんだな……」

セシルは感慨深く馬車の窓からエ・ランテルの街並みを眺めた。かつて見た世界でも同じ街に亜人と人間種が一緒にいることはあったが、どちらか一方が明らかに優遇され

ていた。

あの奇妙な茶飲み仲間の偉業だろう。もしくはその部下の。このような光景を彼は本当に世界中に広めるかもしれない。

そんなことを考えながら待っていると、庁舎の扉が勢いよく開かれた。異様なローブに身を包んだアインズが先頭に立ち、その横には青ざめて体が震えている王国の使者がいた。まあアンデッド相手に謁見など刺激が強すぎたのだろう。

「王国からの支援要請、確かに請け合おう！」

その声はセシルの耳にまで届いた。というよりはセシルに聞こえるように言っているのだろう。王国の反乱分子達の上にギロチンの刃が設置された。

速達便

魔導国の支援部隊は充分以上に物資を用意し、荷物の運搬には魂喰らいソウルイーターに騎乗した死の騎士達デス・ナイトが付いている。荷馬車には大量の食糧が積まれているが、王国の人間が喜んで口にするかは意見が分かれることだろう。

警護につくのは死の騎兵達だ。デス・キャバリエ正直、ソウルイーターに騎乗しているデス・ナイト達だけで既に十分なように思えるが、見栄えを重視したのか黒色の鎧に身を包んだ彼らの姿は確かに魔導国の支援部隊には相応しい威容を備えている。

「壮観ですな。デス・ナイト達だけで、戦場で出くわした者達は震え上がるでしょう」

表向き魔導王とは関係ないセシルは口調をあらためて言う。喋っている内容はいつもどおりに素直だった。デス・ナイトは総勢200体を数える。正直、これだけで国を落とせるだろう。

「ありがとう。君のように優秀な人間に褒められるほどではないがな」

アインズとセシル、王国の使者は魔導国の豪華な馬車に乗っている。元の速荷馬車も後日届けるとわざわざ言われている。

アインズはスケルトンだが顔つきや装束に威厳がある。同乗した使者はできるだけ隅に寄ろうとべつたりと端にくっついていてる。

(なんだこのデス・ナイトとソウルイーターの数。わざわざ策謀しなくても、普通に王国侵略するの余裕じゃないか)

(日課の作成数制限を無駄にしなかったんだ。ぶっちゃけ余っているから、働かせるには良い機会だ。それにこのぐらいの数じゃないと見た目にインパクトが出ないだろう?)

哀れな使者を放っておいて、無詠唱化した伝言メッセージで会話する二人は実に呑気なものだった。国家の存亡をかけた要請をしたザナックが、会話を聞いていれば泡を吹くだろう。

とはいえ、王国への支援に王たるアインズ自身が出向くことは意外だった。片手間にするだけの物資と人員の余裕が魔導国にはあつたはずだ。

「それにしても、魔導王陛下自らが向かわれるとは。お国柄でしょうか？　ねえ使者殿」
「そ、そうですね。このようなことになり誠に……」

「その先は無用ですぞ使者殿。王国の危機的状況を救わんがため、過去の遺恨を水に流さんとしたザナツク殿下と、そのために走った使者殿の内心を考えてのこと」

「はいいい……ありがとうございます……」

哀れなのは怪物と怪物に挟まれた常人だ。だが、常人で良かったとも言える。半端に強者であったのなら、それこそ力量が分かり失禁しかねない。

二人は同乗している一人を孤立させないだけの気遣いがあった。それが彼の苦しみであったが、それはすぐに解消されるのが救いだつた。

転移門^{ゲート}。高い魔力の持ち主なら千人は通せる、デタラメがそこに出現した。

ここまでわざわざ遅い手段を使って来たのはなんだつたのかと思うほど、帰り道はあっさりとしたものになるのだ。

「いきなり王都に乗り込んで迷惑だろう。都の中には兵は入れないよう少し離れた場所を選んだが、それで良かったかな？」

「はっ。はっ。」

「魔法で転移……というよりこの場合近道を作るのですよ。それで出現地点に気を遣った……と、魔導王陛下は仰りたいようです」

「はあ……その……お願いします」

王国は魔法を軽んじる気風がある。そのため、瞬間的な移動の知識が無いのだ。第3位階にも距離は限られているものの、次元ディメンショナル・ムーブの移動などがあるのだが……まあ使者にとつては貴重な体験となることは間違いない。

「では支援行動を開始するぞ。先触れを出せ」

アインズが窓からデス・キャバリエに指示を出すと、伝令のように先頭へと駆けていった。セシルも知らないが、デス・キャバリエは以前も王国への使者として使われたことがある。そうした面での配慮だった。

デス・キャバリエ達が門の向こうに消えてから、セシル達の馬車が静かに動き出す。

「え？ あの黒い丸に入るのですか？ 本当に？」

「そういえば何で、あの手の門は黒とか紫なんでしょうね？ 別に他の色でも良いで

しように」

「一般的なイメージの問題ではないかな。魔法の色を変える実験でもしてみようか……」

「う、うわあああ！」

馬車が黒紫の穴に入り込むと、呆気なく何の感動もなく王都リ・エステイーズの門前に到着していた。叫んでいた使者は狐につままれたような顔をしていたが、門前で待っていたザナツク王子達も似たような顔をしていた。

それでも取り乱さずにいたのは流石。ザナツクは歩みはじめて馬車の近くまで来た。

「魔導王陛下自らお越しとは……今回の我が国への救援。国を代表して感謝申し上げます」

「顔を上げてくれないかザナツク王子。食糧はすぐに届くが、貴国の窮状に対して私はまだ何もしていない。貴国とは因縁めいたものがあるが、これから良き関係を築きたいものだ」

「その件については後ほど取り決めましょう。我々としてもできる限り譲歩したいものです」

ザナツクに連れられてアインズが門を潜っていく。これでセシルの当面の依頼は終わりだ。きつかけを見たものとして最後まで見続けられるといいなど、思った矢先に視界はふさがれた。

アインズがいなくなるまで隠れていたのか。もつともアインズはそれに気付いていないに違いないが。

「セシルさん！ お帰りなさい！」

「飛びつくとは意外と子供っぽいことをするなカルは」

くるくると回転してからセシルはカルカを下ろした。それを何故かぶすつとした顔でレメディオスが見ており、ケラルトが苦笑している。

「俺がない間になにか……あつたみたいだな」

「それなりにな。まあ私にかかれば問題ない」

「真つ先に突入したのは私なんです、姉様……」

「俺も変なのに出くわしたよ。まあこれから先のことを話すには良い機会かもしれない

な」

宮殿に向かう前に、どこかに寄ろうか。ザナツクの安全はアインズが近くにいる以上、問題はない。それぞれが目的に向けて真剣に話し合う時が来ているが、笑顔の一つくらいはあつていいだろう。

好ききな仲間

王都は静まり返っていた。外にアンデッドの大軍がいるとだけ聞いた住人たちは、ただ静かにしていれば嵐が過ぎ去ってくれると思っただけだ。そうだった。

仕方のない反応だ。そうとしか思えない。彼らにとってアンデッドは命ある者全ての敵であることが常識だ。それを完全に統率できる者がいることも、下心があるにせよ自分たちを助けに来たとも到底思えまい。

「敵視してるなら、引きこもっている場合じゃないと思うんだがな。外の部隊が敵なら逃げるか、戦うしかないだろう」

「そういう風に行動できる者自体が、平時でも少ないじゃないですか。ごくごく自然の反応だと思いますよ。実際、何もかも捨てるなんてことはほぼ全ての人ができないんじゃないんですかね」

セシルはケラルトの説明にそういうものか、と少し驚いていた。彼自身が地位や立場などあつさり捨てられる者だからだし、そうしてきたからだ。

「セシルさんだって、地位や仕事……概ね安寧を約束してくれるような何かを奪い合う人々から逃げたんじゃないやありませんか？」

「名誉やお金を取り合うのだから、自分の幸福を確保するためだと思いますよ」

「それをあつさり捨てられるのはお前が強者だからに過ぎん。私達もお前と比べて規模は小さいが、身一つでやっていけるだけの強さがあつたから国を捨てることができたんだ」

三人の口撃に参つたと手を上げるセシル。確かにそうだ。手に職というのが何かしらの実力が無ければ、進むも退くも自分では決められない。

そうしているうちに高級住宅街に入り、自分たちの屋敷に戻ってきた。セシルは少しばかりの私物を置いただけの部屋が懐かしくなり、先程の話に出てきた捨てられない意味が分かったような気になった。

やがて思い思いの格好で、示し合わせたかのように居間に四人とも集まった。セシルとレメディオスは武装している。

「これからどうするか、という話を決めるために現在持っている情報を共有しようか」

「といっても私達は王子の護衛に付いていましたから……でも暗殺騒ぎがありました。どこからか入り込んだ貴族が国王を人質に立てこもったのです」

「立てこもった？ やるならさつさとやった方が良いし、逃げられるのに……馬鹿なのかそいつは？」

「王国の尋問官によると本気で馬鹿なようです……ちよつと信じられませんけど」

セシルはそれを解決したのが三人ということも知った。作戦も立てたようであり、あらためて彼女達の強さを知った。自分がいなくとも大丈夫だろうと。

「俺の方は漆黒聖典とか言う連中に妨害じみた勧誘を受けた。お前たちにも話をしにくそうだけぞ」

「漆黒聖典……聖典ということは法国の部隊なのでしょう……漆黒聖典にどういう役割があるかは知りませんけど」

「偉そうだったから有名人かと思つたが、そうでもないんだな」

「法国と聖王国は交流がほとんど無いんです。それに法国は秘密が多くて……ケラでも知っていることは私とそう変わらないと思います」

「カル様の言うとおり。間に大森林がありますからね、貿易が途絶えているんです。た

だ、漆黑聖典については噂程度ですが聞いています。全員が英雄の領域に達した者たちで構成されてるとか……」

英雄の領域がどの程度かピンとこないセシルだったが、相手をした感じでは脅威には思えなかった。しかし、この世界では強者なのだろう。王国が魔導国と関係を持つのが、それほど嫌だったらしい。

「それほどの連中なら勧誘に乗っても良いんじゃないか？ 俺はしばらく魔導国の側に立って見ていることにするよ。どういう動きをするのか分からないしな」

「「は？」」

「なんだその息の合った疑問は……ザナック王子と魔導王の近くで事態の推移を見るだけだった」

「いえ、そうではなく……」

「まるで、法国に行っても構わないというような……」

「……」

セシルは手を出してはいけない話題を出してしまった気がしてきた。三人の中で無

言なレメデイオスが特に怖いオーラを放っている。

「いや、お前達が俺に守られるような人物ではないことは理解した。確かに生き返らせたいのは俺だが、お前達は立派な人間だ。どこへ行ってもやっていけると思ったんだが……」

「そんな！ セシルさん、そういう風に思って私達と一緒にいたんですか!？」

「なるほど、なるほど。それは逆に言えば私達もまた、貴方のことをその程度にしか見ていないと思っていたわけですが」

「……」

「いや、違う。優れた人間だからこそ、俺の手はもういらないと……」

「いい加減にしろ！ この訓練兵！」

レメデイオスが襟元を掴んで持ち上げる。セシルは抵抗が容易な状況でも黙って受け入れた。そこは抗弁するときでも、振り払うところでもない、どうしてか感じたからだ。

「仲間というのは能力だけで評価するものではない！ 一緒にいたいと思うからこそ仲

間なんだろうが！ 例えきつかけがなんだったのであれ、私達はお前と一緒にいたいと思っただから、ここまで来たんだ。お前のが好きだから！」

「レメ……ん、好き？」

「そうではなくて……ああ、もう！ 話にならない！ しつかりと反省している！ そしてチームを抜けることなど許さんからな！」

足音荒くレメディオスは二階に戻っていった。残ったカルカとケラルトは首を開放され、椅子に座り込んだセシルの手に優しく手を重ねた。

「そう。私達は貴方が好きだから一緒にいるのです」

「嫌だと言われても、ついていきますからね……」

セシルはずっと昔を思い出していた。仲間、好き、チーム。そんな理由で誰かと一緒にいたことがあっただろうか。

何のことはない……セシルはただ長い間さまよっている迷子に過ぎなかった。

劍となりて

夜もふけ、高級住宅街は静かになった。ただし宮殿では官吏が走り回り、城壁に近い一般人は期待と恐怖が合わさって眠れぬ夜を過ごしているかも知れない。

アンデッドの軍勢がすぐそばにおり、しかもそれがなぜか支援物資を持っているのだ。物資の受け渡しなどで働く者達もいるだろう。静かなのはここだけだ。

それなりに高価な屋敷の廊下でも歩けば軋む音もする。その度に立ち止まりながらレメディオスは自問する。一体私は何をやっているんだと。行きたければ堂々と行けば良い。そうでないなら引き返せば良い。だというのに半端に足音を殺して忍び寄る始末。

(ええい、一体何をやっているんだ私！　すぐそこだろう！)

一大決心をして部屋を出たのにこの体たらく。顔から火が出そうだ。目的地が目的地なので仕方ないが、昼間のこともあるので妙に意識してしまう。ええい、ままよ。女は度胸と、むしろ度胸が女の形になったレメディオスは勢いを付けて歩き出した。

目的地はほんのすぐそこという通り、本当にすぐたどり着いた。屋敷内だったので当然だ。

「よしー」

勢いよくドアノブに手を出すと、中の住人に断りもなく勢いよく扉を開いた。赤くなつた顔を悟られないように、住人……セシルに声をかけた。

「く、訓練兵。反省は済んだか？」

「レメ？　なんだこんな時間に……」

「いや、なんだ。昼は貴様の態度も悪かったが。少しばかり言いすぎたと思つてな……入つていいか？」

「……どうぞ」

セシルの私室に椅子は一つしかなかった。なぜかベッドに横並びに座つて、水の入つたカップを口に運んでいる。

「酒も茶もなくてすまんな」

「いいいい、いや構わん」

セシルは茶を好むが自分で淹れられる技術を持っているわけではない。薬草茶なら別だが、隠者暮らしの嗜好品は流石に持ち込んでいない。酒は元々なにかの集まりでしか飲まない。嗜む程度だ。

自然、客に出すのは魔法で作り出した水ということになってしまった。饗応としては落第だが、今のレメディオスにはそれがちょうど良かった。

（入ってきたはいいものの、ここからどうするか、皆目分からん！）

心臓の音のうるささを感じながら、レメディオスは何度も水を口に含んだ。そして、やや落ち着いたあたりでとりあえず話をすることにした。

「少しは仲間について理解したか？ あれから私も考えたが、お前は優れ過ぎているんだ。周囲の反応が大きくて、それで一人でいることにして、そして慣れてしまった」

「そうだな……力の大小や精神性だけを考えれば、俺は魔導王とぐらいしか一緒にいれ

なくなるな。全く色気のないことだ」

「い、色気……だが、その通りだ。もちろん、私達はお前に比べれば弱いだろう。そんなことは最初から分かっていたはずだ。一緒にいるのに、そんなものは関係ない」

「ああ……それにカルのように人を惹きつける力もないし、ケラのように頭が良いわけでもない。レメのように勢いが良いわけでもない……誉めてるぞ」

窓から差し込む月明かりが一瞬、ロウソクの火を上回った。悩みはまるで子供のようにだが、この男はどれだけ夜を一人で過ごしてきたのだろう。

「仲間か……俺はこの期に及んで関係ないことだと感じていたんだろうな。カルやケラを蘇らしたあの日から……いや、その前にお前と出会ってからずっと俺は世界と交わっていたのに」

「……夢のようだった」

「え？」

「カル様やケラを失った時は悪夢のようだったが、お前と出会って二人は帰ってきた。私の悪夢を、お前は良い夢に変えてくれたんだ」

レメディオスは手をわきわきと奇妙な動きをさせてから、セシルの手を握った。汗などで気持ち悪いと思われてないの良いなと考えながら。

「お願いだ。私の剣となってくれ。私には守れないといけない人と正義がある。そして、お前を握っている限り、敗北からでも立ち上がれると信じているから……」

「レメ……」

「セシル……で良いか？」

締まらないなと思いつつも時間は過ぎていった。

翌朝、レメディオスはギクシャクした動きで、居間にやってきた。セシルは落ち着いた様子でそれを見守っていた。カルカがなにかに気づいた顔をして、ケラルトがにやにやと笑っている。

「今日は魔導国の作業をザナツク王子と見に行こう。民の暴発も防げるし、人間がいたほうが安心できるかもしれん」

「はいはい。そういうと思って、ザナツク王子の警護を引き続き受けられるよう依頼を出してもらいましたよ」

「流石だな。ケラ」

「ですが、私達全員で？ 王の警護はあのままで大丈夫なのでしょうか」

「こういってはなんですが、何があってもなくても、じきにザナツク王子が王になりますよ。それに、両方を守ろうとすると両方とも守れない……なんてこともありますしね」

セシルは魔導王、つまりはアインズと行動をとるつもりでいた。彼の中でザナツクがどう位置するのかは不明だが、第三者もいたほうが公平に見えるだろう。

それにルーン武器の使い方などで、実演を求められるかもしれない。

王国の先行きが定まりつつあった。

開戦の前に

セシル達『金鎖』は城壁の上に立ち、二人の為政者の護衛についていた。セシルはアインズに護衛など必要ないと知っていたが、ザナック王子には必要だと常にカルカ達三名をつけていた。信仰系のマジックキャスターであるカルカとケラルトならザナックが傷を負ってもすぐに回復できる。

セシルは護衛対象であるアインズが何をするか分からないので、そちらについている。

「ふふふ……知ってはいたが、レメディオス団長が冒険者とはな。世の中、何が起るか分からんものだ」

「ああ、そうか。面識があつたんだつたな」

「あまり良い関係は築けなかつたがな」

少し離れて小声で会話をする。兔ラビッツ・イヤの耳を使われでもしたら聞こえてしまうだろうが、アインズはあまり気にしていないようだった。

ザナック王子の近くに返ると、彼の顔が少し青ざめて見えた。

「壮観だな。アンデッド騎士団とでも呼ぶべきでしょうか？」

「いやいや、貴国のために急いで作った部隊。そう大したものではありませんよ。もっとも戦力的には充分な量を揃えたつもりですがね」

ソウルイーターに騎乗するデス・ナイトというのもユグドラシル時代では考えられなかったが、この世界ではこのような応用ができるらしい。

城壁の下にはそんなまさに騎士となったデス・ナイト達とデス・キャバリエが陣形を組み、出番を今かと今かと待ちわびている。物資は既に王都へ移動した後だ。疲労も眠気もない彼らにかかれば夜のうちに済んでしまったらしい。

アインズは謙遜して言ったが、下のアンデッド達は中位のモンスター達だ。実力的にはこちらの世界の兵など相手にもならない。禍々しい瘴気のようなものが見えているのは、これだけの数が一箇所に集まったためか。

カルカ達もそれを見ているが、彼女達はなまじ強者である分この軍勢がどの程度の力を秘めているか分かってしまっている。折れない心に拍手されてもいいぐらいだ。

この軍勢にかかつては反乱軍など物の数ではない。ザナック王子が魔導国と同盟を

組む決心をした時点で、内戦の趨勢は決まっていたのだ。

ザナツクの内心は悪魔にでも魂を売ったような気分になっていたが、それを見せることはしない。

「殿下の決断一つで、この軍勢を動かして敵を滅ぼすことができます」

「ああ……一刻も早くこの事態を收拾せねばなりませんね」

派閥も違えば、考え方も違うが相手は同じ王国の民。反乱軍が魔導王の動きを知り、降伏してくれば良いのだが……そうはならないだろう。

ザナツクの王道は血と泥で始まった。せめて、王国軍も共に動いて矜持を示すことが精一杯だった。

魔導国の支援が決定したことを告げる使者が反乱軍に向けて出発した。使者の働き次第によっては貴族派閥に徴兵された兵だけでも助かるかもしれない。それを以て今日の政務は終わりを迎えた。

だが、レメディオスとセシルは残って練兵場に赴いた。理由は簡単に魔導国から流れてきたルーン武器の扱いを教えるためだ。

「それほど扱いは難しくくない。馴染みの無い技術ではあるが、基本はエンチャントされた武器と同様だ。つまり手を通じて念じるような感覚で……ほらできた」

セシルの手元で簡素な剣が燃え上がった。それと同時におおっという声が上がるとセシルとしては当然のことだが、徴集された兵にとってはそうではない。例え一文字か二文字ルーンが刻み込まれたものであっても、魔法の武器だ。戦士にとっては当たり前に欲しく、農民たちにとっては子供のころに夢見た魔化された武器なのだ。

日頃、やる気のない民兵達もこぞつて鍛錬に注目し実際に使用する。スペシャルな見たらを見せて回るより、安価な魔法武器としての側面を見せたほうが宣伝になるのではなかろうか。今度会った時に言ってみようかなと思っていると、気合の音が想像を妨げた。

「いいか？ 手に向かってぐうううとやって、剣がぐわああとなるイメージだ。一度成功すればもう完全に習得したと同じだ。ほらやってみろ」

半信半疑で民兵は奇妙な体勢で、ぐうううと呻いている。どう見ても異様な光景だ。それでも火を出すことに成功した者が数名いた。案外、教え方として正しいのかも

しれない。

レメディオスは昔、聖騎士の団長だったそうだが、その頃からこんな感じだったのだろうか？ 団長、団長ってなんだ。アレでいいのか。

「……レメのところでは失敗した者はこちらに來い。逆に俺が教えて失敗した者はレメのところにいけ」

まあ良し悪しということなのだろう。それにしても民兵はよく従ってくれる。それはアダマンタイトのプレートのおかげだった。アダマンタイト級冒険者は生きた伝説、単なる騎士などより余程尊敬されているようだ。

その後は同士討ちを避けるアドバイスをしていく。炎の剣は騎馬兵が乗る馬に対して、効果が強い。敵にやるのは結構だが、自分達の馬を混乱させても仕方がない。

魔劍の扱いの難しさは発動させることよりも、加減と停止にある。そのあたりを民兵に覚え込ませるようなことはできないが、注意事項として伝えることはできる。

「レメ、そつちはどうだ」

「ひゃいっ！ いや、大丈夫だ。ただ私は人に教えたことがなくてな……その、アレだ。

むしろお前に教わりたい」

「俺のシチセイは自己強化の塊で聖剣とは扱いが違うが……まあいいか。俺達も一緒に鍛錬することで、兵達も分かりやすくなるかもな」

出兵の時期は近い。ザナック王子が魔導国に対する謝礼が決まれば、すぐ動くだろう。セシルは珍しく、民兵達の出番は少ないと思いつつも周囲のためにできるだけのことをするつもりでいた。

そんなセシルの様子をカルカは城壁の上からじつと眺めていた。

会議の後に

ザナツク王子と官僚達は大いに悩まされることになった。魔導王の軍勢は数としては少ないが、戦力として一級どころではない。それは歴史を紐解いても、裏付けられた。ソウルイーターソウルイーター魂喰らいが一つの街をほぼ壊滅させた伝説や死の騎士デス・ナイトのわずかな記録が残っていたのだ。

ザナツク王子は個人的にセシルを呼び出して、話を聞いた。夜だというのに、珍しく各尚書だけでなく重臣も集まっている。

そこで珍しい人物とも出くわした。金髪だがカルカとは違い、健康的な魅力の女性だった。自分でそんな評価が出てくるとは、自身の内面が変わったかな？ とセシルは考えた。以前は美女であることを気にしたことはあまり無かった。

「『蒼の薔薇』のラキユースです。貴方が噂の新しいアダマンタイト級冒険者の『金鎖』の方？」

「ああ。『金鎖』のセシルだ。よろしく頼む……それにしても、同じ用件で呼び出されたのかな？」

“蒼の薔薇”はセシル達の正体を知っているラナー王女の手勢と言つて良い存在であり、それゆえに接触を避けていたが今となつてはどうでもいいことだろう。

ラクユースの本来の名はラクユース・アルベイン・デイル・アインドラという長つたらしい貴族名だが、それを省略した簡潔な自己紹介だったと後からセシルは知るようになる。

総じて好感の持てる女性冒険者だった。

「来たか。セシル、話し合いが堂々巡りになつて退屈してきたところだ」

「はあ。外の軍勢の評価とかですか」

セシルの態度に幾人かの貴族は眉をひそめた。貴族に対する礼儀もなく、白髪頭をかきながら答えたせいだった。がザナツクはそれを見て面白がつているように頬を緩ませた。

「例えば、アダマタイト級冒険者ならあの連中に勝てるか？」

コウモリというのはこういう時、困るなどセシルは考えた。それは嘘を付かなければならないことにある。もつとも自分なら全滅させられると言い出した奴が、正気扱いされるとしたならばの話だ。

だから自分がない場合のメンバーで考える。アダマンタイト級冒険者なら、という質問なので嘘にはならない。

「一体、二体なら。運が良くても十体は超えないでしょうね」

「こちらも似たようなものです。もつともイビルアイならかなり粘れるでしょうが……数が数ですから魔力切れを起こすでしょう。つまり勝てるか勝てないかで言えば、勝てませんね」

どうやらあちらにもイビルアイという名の切り札があるらしい。レメディオス達を見てきたセシルとしては、この世界では規格外の存在では無かろうかと思う。

「つまり、普通の軍隊なら？」

「練兵場にいる民兵とか、宮殿にいる騎士とかですか？ 話にもならないでしょう。一体にも勝てないでしょうね」

「貴様つ……い！」

セシルのあけすけな答えに憤慨する貴族もいたが、ザナックが手を横に出して止めた。顔には苦笑と疲れが滲んでいる。ザナックは魔導王と共に彼の軍勢を実際に見ている。予測が補強されただけなため、皮肉げな顔をする余裕があるだけだ。

「つまり、利益が最大のものにならないければ、その軍勢がこちらを向くわけだ。代価は相應のものを払わなければならないと、実につまらん結論だ」

「やはり、反乱貴族の領地を渡すのが一番ではないでしょうか？」

「飛び地を貰っても嬉しくはあるまい。反乱貴族の土地を使って場所を整理して、隣接するよう組み替えるか。もしくはエ・ランテルと地続きな貴族に涙を飲んでもらうかだな。それでも駄目なら属国だ」

あつさりと属国という言葉を口にしたザナックに対して、不満の視線が飛ぶ。魔導国の軍勢を引き入れる決定を下したのは彼なのだから、当然と言えば当然だ。

だが、横にある国が王国をあつさりと武力で侵攻できる武力を擁していた。その事実を受け入れた者は視線を逸した。全てはエ・ランテルを割譲した日に決まっていたの

だ。

なにせ外に駐留している軍はあくまで支援の軍に過ぎない。それ以上の軍勢を魔導国が自国に残しているのは当然だろう。むしろ支援に対する見返りという形を取れる現在は幸運とさえ言える。

そんな苦境を毒で乗り切らないといけない面々を前にして、セシルは早く終わらないかなとだけ考えていた。どう考えを弄つてもザナック以上の考えは出てこないだろう。

そこに悪いけれども、思ってしまったあたりだけがセシルの変化だ。セシルは『金鎖』の者であり、『金鎖』に利益が無ければ動く気はない。

「政治向きの話になってきましたね。ここにいても役には立たないでしょうから、退出しても？」

「ああ、夜にすまなかつたな。モモンの件以来、アダマンタイト級冒険者に過度の期待を寄せる者も多くてな……」

期待の元になった件に関しても興味はなく、セシルは外へと出ていくことにした。ラキュースは残るつもりのように、奇特な人物だと思っただけだった。

宮殿を出てしばらくすると見覚えのあるシルエットが立っていた。話題の人物がこ

うしてホイホイと出歩いているのが滑稽だ。

「それで……ここでお前と出くわすわけか」

「そう言うな。宮殿内には入れて貰えなくてな。王城の貴賓室に変わりはないが、そこで部屋を借りている。良ければ寄っていかないか」

「いいのか。俺のことがバレても」

「我が魔導国は、真の冒険者を求めてもいる。勧誘の一環だ。もしもの時に備えてお前の仲間のところに転移門ゲートを開く用意もあるし、ハンゾウを送ってもいい」

「茶飲みにどれだけ警戒してるんだよ……まあ、こちらへんでバレても良いかもな」

セシルはアインズの後ろをゆっくりと着いていった。こんなことをしているからこそ、仲間たちは薄々感づいたのだらうなと思いつながら。

勧誘と誘い

アインズに用意された部屋は、貴族趣味的なアンティーク調の部屋だった。部屋の間取りは広く、数人で生活できそうなほどだった。いかにも王国らしい部屋だ、というのが正直な感想であろう。格調高く見せようとしているようで、実用的にも思えない。

「こんな時にまで茶に誘われるとは思わなかった。飲めないのに趣味なのか？」

「と、言うよりは素でいられる時間が欲しいだけだ。実際、魔導王として振る舞うのは疲れる……今回のように他国でそうすべきときは特にそうだ。まあ部下達の前よりはマシかもしれない……」

やたら仰々しいローブ姿の骨が徐々に椅子へと沈んでいくさまはシニールだった。温泉にでも浸かった中年男性のようだ。

どうやら今回は完全にアインズがリラックスするためだけに、セシルは呼ばれたらしい。お茶も最初から用意されていたが、メイドのように付き従う者は誰もいない。

セシルも椅子の背もたれに深く身を預けながら、それらしい話題を提供していく。

「今回用意したルーン武器は好評だったぞ。フレイム・スペシャル・ソード・ハイパーとかより、ああいうシンプルなものの方が受けるんじゃないか？」

「え？ マジで？ 格好良くて派手な方が当然嬉しいかと……矢じりに使うための試験品に作ったものだし」

「普及させるならそこそこの代物が定番だろう……強力なものだと買えるのも相応の身分の者に限られるし、大衆化させるなら安価な物が無難だ」

情報の伝達が遅いこの世界では、よほど目撃者が多くない限り逸品を使っても宣伝効果が薄い。加えてプレイヤーは自分の基準でモノを考えがちだ。派手に活躍させる武器を譲ったりなどすれば、どうなるか分からない。

うーん、と唸りながらアインズは少し姿勢を持ち直した。

「そういうえば会議はどうだった？ どうせ進んでないだろうけど」

「片手間に話す内容か？ まあ想像通りどこまで譲るかでモメているよ。最悪は属国も考えているようではあるが」

「属国かー。そこまで行けば部下への面目も立つが、支援の見返りが国そのものって話

の流れ的にどうよ？　なんかおかしくない？」

「まあ、言われてみればそんな気もするが……得するなら良いんじゃないか？　ザナツク王子なら上手くやってくれるだろうし」

「あー、少し話したが良いよな。ちよつと皮肉っぽいが常識あつて。元の世界の上司もアレくらいだったら良かったのに」

「元の世界の人間なんて、もう顔も名前も思い出せん……それで？　今日は随分と気怠げじゃないか」

アインズは今度こそ姿勢を整えた。セシルもぬるくなつた茶で口を湿らせた。

「うん。王国への影響力を最大のものにした後のことだ。セシル、魔導国に来ないか？」

「それは冒険者としての話か」

「そうだ。俺は冒険者もつと世界を開拓していくような存在にしたいと思っている。エ・ランテルの組合長は個人的に賛成してくれたが、他の冒険者達はモンスター掃除屋に甘んじている。そこでお前だ。アダマントイト級冒険者として名声もあり、実力は確かで何より信頼がおける。魔導国風の真なる冒険者の先駆けになつて欲しいのだ」

それはセシルにとって、意外なことに魅力的な提案に思えた。森に引きこもっていたセシルだったが、この頃は刺激的な体験を「悪くない」と思える程度には人間性が戻ってきていた。

なによりプレイヤーであるセシルにとって通常の討伐依頼などは弱い者いじめな感がある。刺激を感じているのも主に人間関係に起因するものばかりだ。

「そうだな。俺個人としては悪くない。地図を一から作るような探検か……だが俺は金鎖のメンバーだ。他の面子が断るようなら行けない」

「ああ、考えるだけでも頼む。この世界の情報がもつと欲しいのだ」

始まったときは真逆の真剣さで互いの熱意を確認し、この日のお茶会は終了した。そしてセシルは自分達の拠点へと戻ったのだった。

セシルが魔導王と話をしていたのはもう王宮内に伝わっているだろう。はじき出されても仕方がないが、王国の動乱だけは顛末を見てみたいものだと考えながら……

屋敷に戻った時はもう深夜だった。屋敷内は静まり返って、どこか物悲しい雰囲気包まれていた。流石にもう全員が眠りについたのだろう。セシルは猫のように足音を立てずに自分の部屋に戻ると、思わぬ先客がいた。

月の光でも輝く金髪をした女性……カルカだった。

「カル。まだ起きていたのか」

「仲間が仕事に出ていましたからね。飽きて、ここで待っていましたけど」

いたずらをした子供のようになり、カルカは笑っている。セシルは身につけていた装備を外してラックにかけた。

「それで、何のお話でしたか？」

「魔導王の軍勢の強さを聞かれたただけだ……あと」

「魔導王に勧誘された？」

「見ていたのか？」

「まさか。ただ貴方のここまでの行動と、実力を考えればすぐに分かります」

「これまでの行動……なら気付いているだろう。俺は魔導国と繋がっていた。刺客を避けるため、同時に個人的な付き合いとして……追い出すべきだ」

「私達を守るため……でしょう？　そこまで皆、気付いていますよ」

カルカはセシルの手を握って笑った。全てを受け入れた母親のように。

「良いですよ。王国での仕事が終わったら、魔導国へ行っても。私達はチームで、私がリーダーですからね。決定です」

「そこまでして、なぜ俺に合わせる……」

「続きを言ったら流石に怒りますよ？ 理由についてもです……それとも、レメは良くても私は駄目ですか？」

カルカの少し暗い熱を帯びた目にセシルは吸い込まれていった。

力の差

壁の上から、北に向けて進発する軍勢を見守る。前軍と後軍に分かれており、前軍が魔導国の援軍であり、後軍が王国軍だ。数としては圧倒的に後軍が多く、長い列を作っていたが、前軍からは異様な雰囲気が出ていた。少数の部隊が大軍勢を率いているようにも見える。

実際、軍の内実を知るものなら魔導国軍の方が遥かに威容があり、優れているのが分かっている。

「始まってしまったか。こうなると後の流れが目に見えようだな」

「せめて、降伏でもしてくれれば……」

カルカがセシルの横で呟いた。カルカ達はこの世界の強者だ。ゆえに魔導国軍の異常さに恐れる。あの一体一体が自分達と同格の強さを持つのだ。

強力な個が多勢を打ち破るのは、この世界では決してあり得ないことではない。それが強大な個の集まりになるとどうなるか……少し想像力があれば分かるだろう。一方

的な虐殺だ。

「今更、降伏などしたら反乱貴族達はどのみち終わりです。最後の賭けにでも出るでしょう。チツプは民衆の命だというのに」

ケラルトの皮肉っぽい言葉にセシルは頷いた。王国は元々からして徴兵制の国だ。貴族があゝの恐るべき軍に向かってけしかけるのは国の基となるはずの、無辜の民達だ。

貴族というものは最後の最後まで、自分の命を賭けようとはしないだろう。

「ただ……少し気になるのは魔導王の出方だな。アレもそれぐらいは分かっている。敵軍を全滅させてしまえば、この国を救った見返りが少なくなる」

敵兵は日頃は働いて何かを生産する者達だ。蹴散らすのは容易いが、その後の生産力を見るも無惨に落ちるだろう。流星にアンデッドを労働力としてそっくり入れ替えるほどの数はいないだろう。

「あの骨野郎なら貴族だけ殺すのも容易いだろう。もつともアンデッドが民の命をそこ

まで気にかけるかは疑問だが」

レメデイオスは聖王国の動乱で魔導王の力を知っている。知っているが、アンデッドが生命あるもの全ての敵という考え方もまた捨ててはいない。これはケラルトも同様だろう。

「ところで、カル様。少し近すぎではないですか？」

カルカはセシルに身を預けるような形で立っており、手は腕をがっしりと捕まえている。カルカはレメデイオスの肩がつり上がっているのを見ても、動揺せずに体勢を戻さなかった。

「いえ、これぐらいは近いとは言いませんよ？」

「……少し慎みを持たれたほうがよいかと」

主君なのであまり強く言えないがレメデイオスとしては精一杯の抗議だった。当のセシルは知らぬ顔で軍勢を見守っている。

「おい、セシル。お前から何か言うことがあるんじゃないか?」

「無いな。流れに流された男に言い訳などあるはずもない」

「貴様ア!」

レメデイオスはセシルの襟首をつかんでグラグラと揺らしたが、セシルは一向に抗弁しない。「金鎖」内での人間関係をこじらせたのは間違いなく自分だからだ。それで特に後悔は無い。というよりは現状の方が面白いとさえ思っている。

セシルもまたこじらせた性格になりつつあった。

「それにしても……王様と次期王自身は戦場に出るとは変わっている」

眩きは舞い上がった風にのまれて消えていった。

会戦は王都にほど近いリ・ボウロロール近くで行われた。流石の貴族たちも兵士を分散させるような真似はしなかったようだ。リ・ボウロロールは貴族派閥筆頭であるボウロロープ侯の領地だというのも都合が良かったのだろう。

いざとなれば籠城する覚悟もあつたはずだ。しかし、そんな機会は与えられないことを全員がすぐに知ることになる。

「さて、ザナツク殿下。私としてはなるべく敵の被害も小さく抑えたいと思つてはいるのだが……彼らも元は王国の民たちだろう？」

アインズの目にうつるのは簡単な革鎧を着て、槍を持った兵隊達だ。陣形を組んではいるが、どこか統率の取れてないところがありゆらゆらと揺れて見える。

「もちろんです。ですがボウロップ侯の兵達は訓練された兵で、民兵もあそこまで多くなれば……」

「そこでだ。私の手勢に先手を任せてはくれないかね？　なに、少しばかり我が兵らの力を見せるだけだ」

「……お願ひします」

「よし。ではお前達、作戦通りに動け」

その言葉に黙々と従うように、デス・ナイト死の騎士200体がソウルライダー魂喰らいから降り、一直線を描く

ように横に広がった。

巨軀を誇るデス・ナイト達は、盾を地面に打ち付けるような体勢で反乱軍に向けて進行を開始した。それは歩みと言えるほどゆっくりとしたものだったが、確実に一歩一歩敵に近づいていった。

万を遥かに超える軍勢を持つ反乱貴族達は、それを見て愉快そうに笑い、全軍での突撃を命じた。確かに見かけではデス・ナイトの守りは薄皮のようなものだっただろう。

しかし、貴族たちの薄ら笑いも軍が激突するまでだった。

破れない。デス・ナイト達はただ盾を構えて前進しているだけだ。それに圧倒的な数の突撃が弾かれていく。剣で切ろうが、槍で突かれようがデス・ナイトは止まらない。

圧死を避けるため民兵達は戸惑ったように足を鈍らせた。ボウロロープ候の專業兵士たちも何をしても引かない相手に段々と押し込まれている。

「滑稽だな。戦場が茶番になってしまった」

「ただ進むだけで……」

もし迂回することを考えたものがないでもソウルイーターと死の騎兵デス・キャバリエによつて終わりを迎えるだろう。だが全軍突撃を命じられた兵達はただデス・ナイトに押され続け、や

がて逃げ出した。

アンデッド軍団の外見を前に良くこらえた方だろう。民兵達は領主に罰せられるより、散り散りに逃げることを選択した。

人間たちは魔導王の手勢が歩いているだけで敗北を喫した。

これから

戦いはセシルの予想通り、魔導国の手勢の圧倒的勝利に終わった。事情を知る者なら誰でもそう思うだろう。しかし、多くの人々にとつてはそうではない。わずか千にも満たない魔導国軍が、万を超える反乱軍に勝利するなど何の冗談だろう。

実際、この戦場を知らない者にとつては信じられなかった。だが、方々に逃げた反乱軍の兵士たちが自ずと真実を語ることになる。

「色々と終わったな。反乱軍も二度と集結できまい」

アインズは兵を散らした後のことを考えて、ハンゾウ達に反乱貴族達の捕縛も命じていた。彼らは意外にも王国軍に引き渡されて、正式な裁きを受けられることとなる。

後は残党の処理だが、これはさすがに王国軍でもできることだろう。降伏してくる貴族はともかく逃げた兵の処理には大分時間がかかってしまいうだろうが。

戦争が一回の会戦で終わってしまったようなもので、アインズとザナックは1週間ほどで王都へと戻ってきた。民草はアインズの軍勢が通り過ぎた後で歓声をあげたため、

魔導国が不快に思いはしないかとザナック達は気がでない様子だった。

あらためて魔導国の戦力を見た王国は、かなりの土地を魔導国へと割譲。時間を稼いで、自治権のある属国化を目指すようだ。

セシルは今日、ザナックの護衛という依頼の最後の日を過ごしていた。

「やれやれ、やはり暴力の強い国こそが強国ということか。セシル、お前達はこれからどうするんだ？」

「色々と勧誘を受けましたが、とりあえず魔導国へと移籍する予定です。面白そうな仕事も提示されたものなので」

「王国を見限った冒険者も多いが、魔導国へ行ったものは少ないな。人材が減って頭が痛いよ……それで、最初から魔導国のスパイだったのか？」

「信じなくとも構いませんが、魔導王とは雑談ばかりしていましたよ。俺は機密を盗んだりとか、そういうことはあまり上手くありませんしね。まあ政治が話題になることもありました、噂レベルでしたね」

「ふん……我々は搦め手を使うまでも無い相手だったということか。帝国との戦争では魔導王の個としての強さ。そして今度は軍の強さを見せつけられた。確かに歯向かうような気力はもうないな……」

ザナツクの顔は皮肉げだったが、清々しい様子も見せていた。やることが定まったからで、セシルを恨む気持ちが起きないのもそこにある。

「魔導国へ行く冒険者か……まあお前達の幸運を祈っておこう。なにせあんなモノ達がいる国に行こうというのだからな。いくらあつても困らんだろう」

ザナツクは冒険者組合で報酬を確かに受け取るよう言ってから、セシルに背を向けた。セシルもあの小太りの男の背中にこれから一国の重みが載せられるのかと思うと、複雑な心境がした。依頼とは言え長い時間を共有した男にこちらも幸運を祈ることにした。

さて、セシルも魔導国に移籍する身として世話になった人々に別れを告げた。ブレインなどはあつさりとしたものだったが、ラナーとラキユースは複雑なようで形式ばったものになった。特にラナーからは何か不可思議な印象を持ったが、セシルがそれを看破することはできなかつた。

居を変えるというの中々骨が折れるもので、屋敷の返却や冒険者組合へのあいさつ回りが終わる頃にはセシルも精神的にやや疲れていた。

屋敷で過ごす最後の日。情勢が情勢なのでやや高価だったが酒や料理を買ってきて、軽い宴会のような席になった。長椅子に座ったセシルはカルカとレメディオスに挟まれる形となって、奇妙な配置になってしまった。

「そういえば、この中で魔導国に行ったことがあるのはレメだけなんだよな。どうだった？」

「どう、と言われてもな。エ・ランテルの建物などは王国時代のものだから、そう大差ない。異形種と人間種が共に暮す町と言えば聞こえは良いが、その分規律などは異常なほど厳しいな」

「聖王国も人魚マーマンと協力関係がありますが、それともまた違うでしょうしね……」

カルカの声が耳元で囁かれるようなものだったセシルは少し震えた。

魔導国への移籍に関してカルカは賛成してくれた。もつともセシルへの好意から来るもので、思案して決定されたことではないだろうが……ともかくリーダーである彼女が納得してくれたのなら話は早い。

「カル様、セシルに近づきすぎです。それはそうと、あそこの冒険者というのは何をす

んだ？ モンスターなど自分達でどうにでもできるだろう」

「現在の人間種の勢力圏から離れた、そんな場所への探索行などがメインと聞いているな。文字通りの冒険者を集めて、あらたな地を切り開くつもりらしい」

「ふうん。厄介な所と繋がらなければ良いがな」

意外なことにレメディオスは魔導国入りにあっさり賛同した。相変わらず異形種が味方とは思えないと言っていたが、それとは別に心境の変化があったらしい。

「大陸中央には様々な種族の国があると、物の本にはあります。果たしていい選択かどうか……」

移籍に難色を示しているのは、ケラルトだった。元々神官であり、異形種への見方も凝り固まっている。姉が賛同したので渋々と着いていく……といった様子だ。現地ですれすれが起きないよう、注意せねばなるまい。

しかし、ケラルトのものの見方では行くところはそれこそ無くなってしまおう。故郷のローブル聖王国も今は親魔導国。スレイン法国には冒険者がいない。

「ケラは考え過ぎなのですよ。既に一度終わった命。真逆に行つてみるのも悪くはないではないですか」

「はあ……カル様と姉様も難儀な男に引かなかつたものです」

確かに難儀だが、大恩ある身としては仕方もない。既に冒険者として築いた実績を活かさないのも勿体ない。

明日からは『金鎖』の新しい旅が始まる。

王国編後

登山

エ・ランテルにほど近い山脈。そこは誰の手も入っていないし、道などがあるわけでもない。ただ単に山と呼ばれるだけの代物だ。都市とこれほど近い山々でありながら、鉱山を期待した形跡すら無い。あるのは申し訳程度に生えた木々だけだ。

王国と法国を阻む山脈の一つとしてしか、その価値は無いようだった。だが、今はそこに人がいる。白髪で陣羽織のような服装をした剣士と、茶髪の白い甲冑をした女騎士だ。

「試したことは無かったが、こうなると中々怖いものだな。まあ滑落の危機ぐらい無くては冒険と言えないだろうが……レメ！ そっちはどうだ!?」

「少し待て！ お前は速すぎる！ こっちの方が上に開けた場所がありそうだ！」

山師や鉱夫がいればその光景に度肝を抜かれただろう。彼らがいるのは崖だった。そこを岩塩を求めて進むヤギのごとく人が立っている。しかも、どう見ても山登りに向

いた格好ではない、重そうな装備を着込んだ上だ。

その光景を茶髪の女騎士によく似た女性……ケラルトと、金の髪が光輪のように美しいカルカという女性が上を眺めて見守っていた。

「姉様をつかまえて言うのもなんですけど……あの方達は先祖が猿やヤギなのかと思っ
てしまいます」

「まあ、それでは貴方もそうなってしまうでしょう？ レメの妹なんですから……能力
的には私達も可能なはずなんです」

同じだけの敏捷性を持っていても白い岩肌の崖を、飛び回って登るといふ真似はでき
る気がしない。これが前衛職と後衛の違いかと思ってしまうほどに。

「というか飛行フライの魔法を使ってしまうばいいのに、なんだってわざわざ登るんでし
ょうね」

「途中にも何かないか探しているのでは無いでしょうか？ まあセシル様のやること
……なんだか意味がない気がしてきました」

女騎士レメディオスは時折休んでいるが、剣士セシルはほとんど休み無く飛び回っている。かなり高い山なのだが、もう登りきってしまえばいい。セシルは単純に身体能力がレメディオスとは比較にならないほど高いのだ。

「斜めになっている部位なら足をかけて立てるな……この肉体の馬鹿馬鹿しい強さをあらためて思い知る……よつと」

今度はどこからか粗末な剣を二本取り出して、セシルは反り返った壁に突き立てて登っていく。時には足場として使ったりとやりたい放題である。

「ズルいぞ！ 私は聖剣しか持ってきていない！」

「いや、別に競争しているわけじゃないんだが……そつちは安全なルートを探して登ってこい！」

叫んだ後、セシルは山の頂上へとたどり着いた。そこは台座のように平べったくなっていて、何かを建造するにもいい場所に思えた。だが、それ以上に達成感がセシルの身を包んでいた。登山家はこのような気分を味わうために生きているのだろうか？

しかし、目を凝らすところは山脈の中の一つに過ぎないことが分かる。

「調査依頼……少し見くびっていたかな？」

アダマンタイト級冒険者「金鎖」は現在、魔導国に所属している。他国の冒険者がモンスター退治を主とするのに対して、アインズ・ウール・ゴウン魔導国は未知を既知に変えることを目的としている。この方針が打ち出されてからはまだ日が浅く、魔導王アインズの肝いりである「金鎖」が先駆けとして活動を始めたのだ。

この山は都市エ・ランテルの近くでありながら調査が進んでいない絶好のポイントというわけだ。

しばらくすると、多少息を乱しながらレメディオスが姿を現した。その目は少し非難めいている。

「回り込んで登った方がずっと楽だったぞ……」

「そうか。俺は単純にこちら側がエ・ランテルの方向に向いていた……というだけで選んだからな。登山ルートになりそうな場所は見つかったか？」

レメディオスはどうしようもない、といった感じで肩をすくめるポーズを取った後、考え始めた。猪武者ならぬ猪騎士であるレメディオスにとって頭を使うのは随分と集中力を消費するのだ。

「ある程度の実力者なら登れそうなどころもあつたが……一般人ではとても無理だな」
「そうか。なら道を作らないとな」

セシルは耳に指を当てて、メッセージ伝言を下にいる仲間に送ろうとしたが、この世界ではあまり遠距離通信の魔法は信用されていないことを思い出して止めた。

周囲を見渡すと、頂上の台座は意外と植物が豊かだった。調査依頼である以上、主役は崖を登った二人ではなく知恵者であるケラルトだ。

「飛行」
「フライ」

「結局使うのか!? ここまでの苦労はなんだったんだ!」

「いやあ単なる仕事に楽しみを見出してみただけだ。レメ、俺とお前で登山道を作るぞ」

「道? どうやって……」

「そりやお前さん……剣で崖を綺麗に斬りきざんでだ」

飛行でこれまでの行程を逆再生するようにしながら、取り出した鋭利な直剣で崖を階段状に斬っていく。彼の前には岩肌など熱されたバターのようなものだ。

「粗いところはレメが上から整えていってくれ。お前だつて岩ぐらい切れるだろう?」
「それは切れるが、聖剣をこんなことに使うのは……」

言つたところ、青い美しい剣がレメデイオスの前に投げ出された。セシルが魔導王アインズに貰つたルーン武器だ。

「頼りにしてるぞ。良い感じに仕上げてくれ」

「えへっ。そうか、そんなに期待しているか。なら仕方がないな」

「あと大声で下にいる二人に警告してくれ、岩が降ってくるからな」

下ではカルカとケラルトが落ちてくる岩から急いで退避していた。あの二人はまったく! といった具合に顔を渋くしている。

「これで強敵とでも出会えればな……というのは不謹慎か」

未踏の地に爪痕を残しながら、彼らの旅は再開された。行くべき場所は多く、この山脈だけではない。多少の予想外というのはあるものだが、ソレと出くわすのはもう少し先の話になる。

予感

山の頂上から見渡す景色は雄大だったが、セシルの興味はそこにはない。魔導国が打ち出したように未知をこそ求めている。滑落による死亡への恐怖はあったが、既に知っている感覚だ。怖いということと見飽きたという感覚は両立する。ある意味それが一番の恐怖だろう。

「ハルピユシアにギガントイーグル……生態はアゼルリシア山脈のソレと似ているな。見たことがないやつはいない」

「それはモンスターにばかり目を向けてたらそうでしょうよ。動物なんかだと新種がいるかも知れませんか?」

丁寧に地面の草や花、樹を見聞するケラルトはそう言い放つ。姉や主君と異なり、セシルと精神的な距離を保ったままのケラルトからすれば、この男は面倒臭さの極地のようだった。

山を登りきった一行は、フィールドワークをケラルトに任せて周囲の警戒を続けている。

る。薬草毒草希少植物……それらを見抜くには知識が必要だ。一行の中でこの役割ができるのはケラルトしかない。カルカが持つ知識とはまた違った分野だからだ。

もっとも完全な専門家では無いので、ケラルトも判断がつかない物は街へと持ち帰るしかないが、まず持ち帰る物の選定に知識が必要だった。

「動物とモンスターも変わらないだろう」

「小動物や虫とかまで、貴方は見ないでしょう。なんだかんだと言って、貴方の興味には傾向があるんですよ。強さとか、刺激とか。一歩間違えれば危険人物ですね。この草は私も凶鑑ですら見たことが無いですが、どうだつていいでしょう？」

ケラルトの発言に意表をつかれたセシルは、ケラルトの手元にある草をじっと見た。草を凝視すること自体久しぶりな気がした。いや、したこと自体あったかどうか……で長く暮らしていたというのに。

「まあ対人関係には多少興味があるようですから、それでギリギリ人間らしいですね。はあ……」

それは何に対してのため息か。何にせよよく思われていない部分があるようだ、セシルは感じ取った。ケラルトの姉との距離だろうか、主君との関係だろうか？ 思い当たるフシが多すぎた。

「今日はここで野宿することになりそうか？」

「そうですね。一旦街に戻ることになりそうですから、それなりの量を持って帰らないと」

「……この山は有望そうか？」

あとになってみないと分からないと返されて、セシルはインベントリから簡易テントを取り出した。夜番として一人で物思いにふけるのも悪くない。

それなりに高い山だ。夜は少しばかり冷え込む。火に枯れ枝を放り投げてみると、カルカがやってきた。横倒しにした木に座っていたセシルの横に滑り込むようだった。

「セシルさんは、これからどうするお積もりです？」

「どうと言われてもな。今回は役割があるから、世界の広さを見に行くよ。魔導王との約束もあるしな」

「私は……静かに暮らすのも良いと思うのですが……小さな家でも買って、貴方と一緒に……」

「俺にとつては気が付けば百年経ってそうだな……つと悪い。難癖じゃないぞ」

パチパチと枝が弾ける音だけが残った薄明かりの中で、カルカがセシルに身を寄せようとして……逆方向に急速に離れた。

「カル様。抜け駆け禁止です」

「最初に抜け駆けしたのはレメの方じゃありませんか……」

「こういうのも男の果報かね……それとこれからどうするって話だが、とりあえず宣伝も兼ねてここらの山の探索をして見せて、他の冒険者達を触発させる。それが『金鎖』としての活動だ。それでいいと言ったのはカルだろう?」

魔導国に引越してきた時にした会議を思い起こさせると、カルカが頬をふくらませるように黙った。その隙にレメディオスも木に座った。

「だが、あの時お前もなにか言っていたな……目的地の話だったか」

「ああ、このあたりの本格的な探索は、他の冒険者に譲ってカツツエ平野と竜王国の間にある山を調査したい。個人的な欲求だがな」

なるほど。確かに自分は未知と言っても危険を好むのは確からしいと、ケラルトに指摘された点をセシルは思い起こして苦笑した。以前は森で隠者として暮らしていたのだが……世に出るところらしい。

カツツエ平野はアンデッド多発地域であり、この世界でも危険な存在を生み出しているという。アンデッドは放っておけば放っておくほど強力な存在が生み出される。もし、セシルを楽しませるほどの敵がいるとしたら、カツツエ平野の中で更に放置されている場所に期待が持てる。

ユグドラシルの世界では強力なアンデッドもいたものだ。それと同格なら文句なしだ。

「まあ期待薄だが、仕事と両立できるなら良いだろう」

「確かにセシルさんが苦戦してるところは想像できませんね……」

プレイヤーであるセシルと同格など、アインズとその配下ぐらいしか存在しないはず

だ。カルカとレメディオスの考えも当然と言える。特に魔導王と接したことのあるレメディオスはそう思っている。

だが、セシルは何か予感めいたものがあつた。きっと自分はこの新天地で思いがけない敵と出会える気がするのだ。

いつの間にか自分にもたれかかって寝てしまっている二人に苦笑しながら、こういう出会では無いだろうと思う。火が消えかかっていたので再び枯れ枝を投げた。

エ・ランテル

セシル達は山を降り、拠点であるエ・ランテルへと戻った。エ・ランテルは王国の東にある都市で、現在は魔導国の支配下にある。実り豊かで、防護面でも3つの城壁に守られている。

この街は魔導国に支配されるようになって大きく変わった。街には亜人種も住むようになり、彼らを見ても刃傷沙汰にならないよう検問所には講義室が併設された。賄賂などは一切許されておらず、それを破った者には恐ろしい罰が待ち受けるとか……

今も昔も人の出入りは激しいが、現在では魔導王配下のアンデッドに対する恐怖感や忌避感から活気は薄れている。

そんな現状のエ・ランテルでセシル達は活動している。異形さえもいるため、レメディオスが暴れないか危惧していたが、一度来たことがあるということでも落ち着いたものだった。

このあたりはレメディオスが皮むけたということだろう。

冒険者組合にたどり着くと、カルカが静かに扉を開けた。支配直後には閑古鳥が鳴いていた組合だが、今ではそれなり程度には人数がいる。中にある全ての目がカルカに向

けられるが、流石に元聖王女、落ち着いた様子を崩す気配は微塵もない。

セシルの異常な戦闘能力に埋もれがちだが、「金鎖」のリーダーはカルカなのだ。威厳という意味ではセシルはカルカの影も踏めない。

「アインザックさん。ただいま戻りました」

「おお、カル殿。その様子では上手くいったようですね」

組合長のプルトン・アインザックは顔に笑みを浮かべて、「金鎖」のメンバーを迎え入れた。魔導国の冒険者組合は他国の組合と異なり、魔導国に吸収された。

そして「未知を探索する」冒険者を生み出すべく、今では魔導王の協力者となった。ちなみにセシルは、アインザックの白いヒゲとアフロの組み合わせに思いを馳せていた。

「南西の山の一つを攻略してきました。セシルさんが階段を作ってくれましたし、今後の行き来は楽になるものかと。見本になれば良いのですが」

「それと、あそこで採れた植物類がこれですね。モンスタアはアゼルリシア山脈と大差ないですよ。流石に鉱石の類は専門外なのでよく分かりませんが」

「流石はアダマンタイト級冒険者。鉱石についてはこれからの冒険者に鉱夫を連れて行かせて調査しよう。君たちだけに攻略させるのは心苦しいからな」

“金鎖”の活動をもとにして、機運を盛り上げようという構想はアインズが立ててアインザックが実行しているものだ。

わざわざ階段まで作ってきたのには練習場という意味合いもある。練習場といえば駆け出しの冒険者向けの訓練場も開設する計画だという。

「植物の類も信頼できる錬金術師を紹介しよう。いや、こちらから解析を依頼する形にすべきか……バレアレ薬品店が今もあれば簡単だったのだが」

「しかし山一つ調べるのにも大層な時間がかかるものだな」

「だからこそ、この国ならではの冒険者の仕事が増えるのだよ。あっさりと全てが判明しては先細りになってしまう」

「俺達は攻略するのには慣れていても、じっくりと根を張るような動きには不向きだしな。時間がかかるのも当然だろう、レメ」

「まあ私の剣がそう言うのならそうだろう」

ケラルトの採取物が入った袋を組合に収めた後、アインザックの勧めでしばらくここで時間を潰すことになった。アインザックは飲み物を用意して、セシルにすり寄ってくる。

年齢の割に頑健なアインザックが近寄ってくるのは、かなり鬱陶しいのだが立場ある人を立てるぐらいにはセシルの常識も回復している。

「セシル君、この前の話は考えてくれたかね」

「剣技教官の話なら、俺よりレメの方が向いてますよ。俺の剣術は我流の喧嘩殺法ですからね。効率よく相手を殺せても、効率よく学べはしません。その点、レメは正式な訓練を施せる……まあ人格面で少し問題は出るでしょうが」

「ふむう。そうか。モモン殿には頼めないし……では時々私に稽古をつけてくれないかね。それとラケシルにもケラ殿に指南を頼みたいところだ」

ラケシルというのはテオ・ラケシルという人物で、現在は形骸化したエ・ランテルの魔術師組合で長をやっている人物だ。

アインザックとラケシルは元が付く冒険者だが、今から復帰を狙っている。その個人的野望は不思議と爽やかさを感じさせるものだった。

「まあ、暇な時なら良いですけど。その代わりカツツエ平野のこととか教えて下さいよ。後、その近隣の地域の調査許可も」

「カツツエ平野か。あそこは魔導王陛下がほとんど支配下に置いてあるそうだから、古い知識になるが……まあ今でもアンデッドは出現するが、君にとっては軽い相手だろう？」

「そうとも限らないってことで期待してるんですよ。アンデッドが湧けば湧くほど出現する個体は強くなるそうですし」

「依頼も無しに強敵を求めるか。君達はまさに新世代の冒険者だな」

加えてカツツエ平野には古い建造物の遺構などがあるという。そうした場所を調査するのも面白いのではないか。セシルはまだ見ぬ敵と邂逅し、謎を解いてみるのも悪くないと思っている。そして、そんな自分を見て仲間たちは喜ぶのだ。

「じゃあ、早速稽古と行きますか。アインザックさんの剣技を盗むチャンスかも知れませんか」

「お、お手柔らかに頼むよ?」

一刻後、
アインザックはあざだらけの姿で戻ってきた。

冒険準備

象の墓場という都市伝説がある。象が一箇所に集まってその生を終える場所という話で、他には鯨の墓場など似たような話がいくつもあつた。

しかし、この世界において実際にそれがあつたら、どうだろう？

それを思いついたのはカツツエ平野に現れた一体の死者の大魔法使いだった。アンデッドは生まれれば生まれるほど、強力な個体が出現するようになる。そのエルダールリッチが生まれたのもそれが理由だった。

過去には帝国が死の騎士と遭遇したこともある。

エルダールリッチは慎重というよりは臆病さを備えていた。人間という種族を脅威となり得ると認識し、それが結果的に討伐隊の巡回ルートから外れるように存在するようになった。

自らの身を守るために低位のモンスターを呼び出し、身を潜める。試行錯誤の末に、自分より低いレベルのアンデッドを支配する呪文を編み出してからは、支配したアンデッドも同じように身を隠させた。村のような共同体にすれば人目をひくと良く知っていたのだ。

さて、人間種にとって問題があるとすればそれが大昔のことであったことである。もはや最初に隠棲を始めたエルダーリッチなど問題ではなかった。

「カツツエ平野の竜王国側にある山脈の調査ですな。確かにそれは行われておりませんね。王国と帝国の砦からは遠すぎますし、冒険者は依頼があつた対象を討伐するだけの存在でしたから」

さも今は違うぞと言わんばかりにアインザックは答えた。現在は旧来の傭兵じみた冒険者から、探求者としての側面を強くした冒険者への過渡期だ。古い資料は倉庫から引つ張り出され、昼夜を分かつず解析と修正が加えられている。

この地域の調査をしたいと言い出したのはセシルだが、彼はアインザックがカルカ相手だと時折敬語になっている方を面白がっていた。

「良かったです。そちらの調査に行つてみたいとセシルさんが仰つていて、カツツエ平野には数百年前の建造物もあるそうですから冒険には丁度いいかと」

「セシル君が？ 一体またなぜ？」

「俺にとって冒険、となると全く見たことが無い場所や敵に限られるので……多少の高

さから落ちてでも大丈夫ですし飛行フライもありますから。そうなる場所は結構限られてくるんですよ」

「まあ小さな発見にも目をやるように教育中一ですけどね」

そう言つてケラルトは植物学の入門書でセシルの頭を叩いた。セシルもまさかこの年齢になつて勉強する羽目になるとは思つてもいかなかったが、これも一つの冒険だろうか。

「ふふん。アンデッド退治なら久方ぶりに聖剣の出番だな。これまでは二番手に甘んじていたが、これからは違う」

レメデイオスは聖騎士らしくアンデッド退治には一家言いっかげんありそうだったが、セシルが敵と見なせる相手だと心もとないとは氣づいていないらしい。

「俺も信仰系の前衛職なんだが……しかしまあ、ここもちよつと活氣づいて来ましたね」
「君達の存在が大きいね。アダマンタイト級冒険者に加えて、言つて良いのか分からんが見栄えもする。元々学者肌の冒険者というのも少なくは無いから、そういつた人物が

移ってくるいいきつかけになっているよ」

アインザックは半ば萎れた麻紙の束を取り出して、ホコリを吹き払った。

「今、手順の整理をしていてね。未踏の地に行く者には近辺の資料を先に見せるようにしたら、どうだろうという話になってるんだ。これができるだけ東の書類だよ」

「これはまた随分と……古臭いですね。読むのに時間かかりそう」

「君達にはケラ君がいるから、またまた良い見本になると思つてね。一つ頼むよ」

こうして『金鎖』一行は奥のテーブルを借りて旧資料に目を通すことにした。その歩みを他の冒険者達は敬意とともに道を開けて邪魔しないようにした。

セシルなどはそこまでしなくとも、と思うが冒険者も一種の階級制である。その点力ルカは堂々と好意を受け取る形にすれば良いのだということをよく知っていた。

「古い資料ではあるが、あの平野はもつと古いんだろう？ 見ろよ、この絵図。資料の時点で既に崩れてるぞ」

「カツエ平野に点在する遺跡は数百年前の物とされていますから、当然でしょう。な

ぜ滅んだかわからないのが難点ですね。こういう時、付近の民話などに残されているのが常ですが、あの平野に村なんてありませんし……」

「山に近づけばアンデッド以外のモンスターも増えるでしょうしね。あ、これ魔導国の幽霊船の絵じゃないですか？」

「おお、アレですか。見ましたが、陸上の船というのも妙なモノでしたね」

それはかつてカツツエ平野を浮いていた巨大幽霊船の絵だった。それは今、魔導国の支配下にある。このことから魔導国がカツツエ平野を平定したという話が本当だったとわかる。

セシルからすれば、ちよつと戦つて見たかったという感情もある。まあ歯ごたえは無かったかもしれないが……

(アレは外へ侵攻することに集中しようとしているようだし、案外雑にしか調査してないだろうな)

セシルは主に東部の絵図だけ覚えて、文章はあまり覚えられなかった。そこは適材適所。ケラとカルが覚えてくれるだろうという、レメディオスと大差ない思考だった。彼

の脳が危ぶまれた。

強敵

カツツエ平野は常に薄霧を漂わせている。これにはアンデッドの反応があるため、感覚の鋭いセシルにとって居心地の悪い地域だった。

確認されている建造物の残骸が残る地域を探索し、その文化様式を探るのも今回の任務の一つだ。崩れ落ちた尖塔などは王国のそれに似ていたが、飾り気のない印象を受ける。ケラルトが記録に残していくが、特筆して変わったところは無いという判断のようだ。

だが、この数百年を経た石の塊にセシルは不思議と郷愁を覚えた。縁があるというほどハッキリしたものではないが、どこかで見たことがあるような気がした。

「意外だ。レメがスケッチが上手いとは……」

「悪かったな、意外で。ふふん、まあ軍事と地図は切っても切れないものだからな」

「練習なんてしてないから感性によるものですよ。勉強していれば絵師にでもなっていたかもしれませんが、正確に写し取るのが姉様の特技ですねー」

意外な人物が持つ特技にセシルは感嘆した。親密になっても知らないことは多いものだ。自分は戦闘関係の他にそんな才は無いという思いがある。

「カツツエ平野に点在してる残骸を見る限り、なんというか街だったのか？ 小規模じゃないよな……でも城って感じもしないし」

「城塞都市か何かだったのでは無いでしょうか。どちらにせよ、こうまで跡形もなく消えるのはおかしい気がしますけど」

「カルの言う通りだな。ある日突然崩れ去ったって感じだ」

それでも遺跡化していないのは奇妙だった。セシルがかつていた世界でも滅んだ都市などはその跡を残していた。だが、ここは文字通り平野だ。ポツンと塔や家が点在していたのはいくら何でも無いだろう。

やはり、ここは期待が持てるとセシルの胸がわずかに高鳴る。あまりに長く生き続けた人間にとって刺激は数少ない。早々に見切りをつけただけに人間関係も刺激の一つとして残っていたのは嬉しい誤算だったが、それとは別の話だ。

魔法で空を飛んでしまえる者に登山の素晴らしさを説いても意味が無いのと同じこと。セシルに楽しみをもたらしてくれるのは、人々が作り上げた未知である。

絶景を楽しめない哀れな超人にとって、既知から未知へと変わってしまったものこそ救いだ。

「山を目指して進もう。きつとまだ見つからない遺跡なんかがあるはずだ」
「そこに怪物がいれば、なお嬉しいんでしよう？ これだから戦士というのは」
「そう言うなケラ。私にも少しは分かる感情だ」

レメディオスとセシルの間には大きな戦闘力の開きがあるが、それでも戦士には違いない。あまりに理不尽な手合はかつてのヤルダバオトで、もうゴメンだと思っではいるが、強者同士の戦いというのが魅力的なことは分かる。

一行は目印や資料を更新しながら、竜王国近辺へと足を進めていった。アンデッド多発地域での休止はいつもより神経を削ったが、レメディオスやセシルが見張りをしてくれるので、カルカとケラルトは充分に休むことができた。

「……なんだか、霧が濃くなってきたな」

「本当に。戦が行われる日には晴れると聞いたことはありますが、濃くなるというのは……」

「普通の人間にとつては良くない変化でしょーね」

周りを警戒しようにも霧自体にアンデッドの要素があるので上手くいかない。そのまま誘われるように東へと足を進め続けた。

「なんだ、アレは」

その果てにそこはあった。山と建物が融合したような奇妙な建造物。人目で建造物と分かるのは、それが直線で構成されているからだ。

しかし、ここまで見た遺跡とは大分違っているのが一行に違和感をもたらしたが……まあ奇妙なことには変わりない。

カルカ達が高い建物を見上げているうちに、密かに振るわれた刃に反応できたのはセシルだけだった。鋼と鋼が噛み合い高い音を立てる。

成立したのはその一撃だけだった。弾き返した衝撃で相手は面白いように吹き飛んでいった。

「……………デス・ナイト死の騎士？」

カツツエ平野がアンデッド多発地域とは言え、滅多に出てこないという伝説級のモンスター。いきなり斬りかかってきたあたり魔導国産のものでもないようだ。

ならば倒しても問題あるまい。カル達に己一人でやると口にしようとしたその時、周囲が灰色に染まり、起き上がると思っていたデス・ナイトの動きが止まった。

「なんだ、これは!？」

「セシルさん！ 後ろに！」

ああ、分かっている。そうセシルは思った。

自分の所有していた武器を装備している3人は動いているが、デス・ナイトは止まらなかった。つまりはこれまでと違った敵がいる。

少なくとも位階は互角。第10位階魔法、〈時間停止〉。それが使えるアンデッドとは……

「死の支配者の時間王！」

最低でもレベル80を超える強敵。骸骨の後ろに時計の針にも似た漆黒を背負い、こちらを睥睨していた。自然発生した個体なのか、建造物に関係があるのかは分からないがセシルは口角を歪めて強敵を受け入れた。

「すまないが、デス・ナイトは3人で相手をしていてくれ……俺は、コイツを相手にしなければならぬ」

セシルも当然に時間停止対策はしている。灰色に染まった世界では攻撃は成立しない。そういう法則だ。世界が色を取り戻した瞬間、火蓋は切って落とされた。

程よい相手

セシルが死の支配者の時間王と激戦を開始したのと同時に、カルカ達も難しい戦いを強いられていた。

死の騎士^{デス・ナイト}。カルカ達は詳しくは知らないが、この世界では伝説的な強敵だ。特に、その能力に偏りがあり攻撃より防御を重視した性能は戦う者の心を折る。

「セシルさんはアチラにかかりきりになっています。せめて私達はこの敵を相手取りましょう」

「こつちも只者じゃなさそうですけどねー」

彼女たちも素人ではない。対峙した相手の力量ぐらいはなんとなく把握できるのだ。少なくとも自分達と互角ということは理解していた。

「なに、先程アイツも一撃で吹き飛ばしていたではないですか！ 我々にもやってやれないことはありません！」

「セシルさんを基準に考えるのもどうかと思いますけどね……」

ともあれ、かつてのような絶望的な戦いではない、気を引き締めれば勝てる相手だ。それを思ってたなのか、何も考えていないのか……レメディオスが死デス・ナイトの騎士に突撃を仕掛けた。

「聖撃！」

その打ち込みは身の丈ほどもある大盾に阻まれてしまったが、盾にも剣の跡を残した。死デス・ナイトの騎士はアンデッドであり、「金鎖」は信仰系の職種で構成されている。相性としては有利なはずだ。

現に巨体と言って良い死デス・ナイトの騎士がレメディオスの一撃でわずかに後退している。

死デス・ナイトの騎士もフランベルジュ状の大剣を振り回すが、レメディオスの聖剣サファルリシアは見事にそれを受けきった。

そうだ。レメディオスは考えなしで頭を痛くさせたが、その勢いでカルカとケラルトの心を和らげてくれた。そんな彼女の奮闘に続くのだ。

「聖なる光線ホーリーレイや太陽光サンライトで攻め続けましょう。盾の方向が変わるだけでもレメなら隙を突いてくれるはず」

「天使も呼んでみましょうかー。最悪、盾にもなりますし」

方針が決まってからは早かった。カルカはレメディオスの位置に注意しつつ、強化された魔法を叩き込み、隙を作る。その隙をレメディオスとケラルトの姉妹が突く。特にレメディオスは仲間のことを完全に信頼しているのか、自由に動き回り剣による攻撃で的確に攻撃を加えていった。

予想外だったのは天使の活躍だった。死デス・ナイトの騎士は空中に向ける攻撃手段を特に持つておらず、陽動や妨害に大きく貢献した。

「おおおおおっ！ コレで終わりだ！」

聖剣サファルシアによる強化された聖撃が、とうとう死デス・ナイトの騎士を芯から捉えた。長い時間をかけて人知れず小さな偉業が達成されたのだ。

「かはっ」

レメディオスの鎧をフランベルジュが貫いていた。死デス・ナイトの騎士には一度だけ即死を免れるという特殊能力が備わっているのだ。魔導国で重宝されるのもこれが理由の一つだった。

即座に放たれたカルカの攻撃でデスナイトは塵にかえったものの、レメディオスの腹部の傷は深い。すぐさまケラルトが重傷治療ヘレリカバを唱えて、治療にかかる。

前衛がいなくなっただけで、セシルの応援には行けなくなっただけが、それは幸運というものかもしれない。

セシルと死オーバーロード・クロノスマスターの支配者の時間王の戦いはもう片方の戦場よりも激しく、苛烈なものとなっていた。

この世界での前衛戦闘はやはり違う。そうセシルは唇を舌で湿らす。レベルはセシルの方が高いため苦戦というわけではないが、レベルが一定以上の者との争いは凄まじい緊張感をもたらしてくれる。

なにせ相手はオーバーロード。第10位階までの魔法を強烈に放ってくる。得意とするだろう時間に干渉する類の術は対策済みのため、それが致命傷になることはない。

しかし、それでも強力な呪文などは大迫力であり、背筋をヒヤリとさせてくれる。

そんな中を超速で駆け抜けながら、愛刀で相手を切り刻む。そして戦士職にはこの世界の武技は使えないが、代わりにスキルがある。

「クラフトピアス！」

鋭い突きで相手の命中箇所に応じてデバフを与える技だ。今回は足を突いて、機動力を削いだ。マジックキャスターと違い、戦士職は実際の動き方が求められる。相手が遅くなってくれればやりやすいというものだ。

「モンスターだからか、会話が無いのが辛いな……！」

あるいはNPCか。役目だけをこなすようにできている。戦闘相手としては楽しいが、コミュニケーションで盛り上げられる手合ではない。

そろそろ終わらせるか。多少無理すれば、強力とは言えダンジョンに配置されているモンスターを早めに処理することもできる。

『ヴァーミリオンノヴァ』
『朱の新星』

セシルの体を対個人最強の炎が包む。ダメージを負う感覚は久しぶりだった。何よ
り視界が赤で塗りつぶされ、息が詰まるのは昔を思い出す。

しかし、悠久の時を生きてきたセシルの冷静さを奪うには足りなかった。

クラック・イン・ザ・グラウンド
「地 割 れ。落ちて首を差し出せ」

信仰系第9位階魔法。相手を大地で挟み込み、様々な行動阻害などを起こさせる魔法
だ。セシルが狙っているのは相手が動き回らないこと。死の支配者の時間王は突如と
して割れた地面に挟まれて、身動きが取れない。そこにシチセイを下段に構えながら、
セシルが迫ってくる。

『タ……』

「遅い」

時間停止で抜け出そうとしたのだろうが、時間停止中は攻撃できない。だからどちら
にせよ詰みだった……いやセシルが戦いを楽しんでいなければ結果はもつと早く出て

いただろう。

頭蓋骨を縦に割られてオーバードは塵となった。

ほうれんそう

セシルはそれなりの戦いの後を大治癒ヒーラルで完全に癒し、清潔クリーンですすを払う。一連の後始末がつくと、急いで仲間のところへ向かう。

死デス・ナイトの騎士はセシルを除いた「金鎖」の面々とほぼ互角なはずであり、無傷で勝てる too 太鼓判を押せる相手ではない。

戦いの現場はセシルの戦いに巻き込まない程度しか離れていない。すぐさまたどり着く。カルカとケラルトは無事のようにだが、レメディオスは横たわっているように見え、セシルの胸は少しだがざわめいた。

「レメは無事か？」

「あ、セシル様。ええ、命に別状はありません。ただ、敵の悪あがきを受けて随分と痛めつけられたようです。重傷治癒ヘビリカバをかけたので、しばらくすれば起きれるはずです」

腹にフランベルジュで穴を開けられたのを冷静に話しているのも、カルカたちがこの世界での強者である証だが、痛みはそのままなはずである。

どうにも痛ましい気分になったセシルはレメデイオスの腹に手を当て、魔力を發揮した。

「大治癒」

大治癒は回復だけでなく、多くの状態異常も癒やす。痛みも和らぐのではないかという判断だった。

その甲斐があつたのか、レメデイオスの吐息は安らいだものに代わり……ついでの癒やされすぎたのかカルカルの膝の上で寝息をかきはじめた。

「……凶太いのか、豪快なのか判断に困りますね。姉様は」

「普段のレメなら意地でも起きてそうだがな。余程打ちどころが悪かつたんだろう……さて、ここは想像以上に危険なようだ。地図に記して一旦、撤収しよう」

死デス・ナイトの騎士はまあ現地発生したとしても、驚きではあるが無い話ではない。だがオーバードが自然発生するとはとても思えない。ユグドラシル時代でも難易度の高いダンジョンにポップする敵だ。なら必然的に目の前にある建造物が関係してくると考

えるのが自然だ。

信仰系前衛職として一人ならどうこうできる存在だが、仲間を連れてはそうはいかない。オーバーロードは範囲の広い魔法も使う。それに巻き込まれる確率が高い。

「ここは多分、魔導国自体が調査することになるだろう。探索の成果としては上出来だ。

エ・ランテルに戻ろう」

「セシル様がそう仰るなら、そういたします」

「金鎖」のリーダーであるカルカだが、言外に足手まといになるということを感じ取ったのだろう。忸怩たる思いで決定をくだしているようだった。ケラルトはなんとも言えない目で頷いた。

「まあ、さつきみたいなのがたくさん来たら困りますし。ここはそれが最善ですねー」

「ああ、そうだな」

雰囲気軽くするようなケラルトの発言だが、似合ってはいなかった。ただ、カルカの心中をおもんばかったのことは伝わった。

こうして『金鎖』は成果ある撤退をした。

『金鎖』はエ・ランテルに戻り、冒険者組合に危険地域と報告した。特に建造物には近づいてはいけないという勧告も同時に出された。

夜中になるとセシルは伝言^{メッセージ}でアインズに現況を報告することにした。エ・ランテルでは『金鎖』は多少大きな屋敷を借りている。かつて、王都の高級住宅街に住んでいたときと同じような配置になっているのは偶然ではないだろう。

バルコニーの柵を背もたれにして、相手が伝言^{メッセージ}に反応するのを待つ。

(すまん。王国の方に行っていてな。会議などで時間を食ってしまった)

(いや、報告書は送ったから、時間が無いようなら切るけど……)

(終わってから応じたから、すぐに声がかかったりしないだろう。大丈夫だよ)

セシルはカツツエ平野での探索の結果を短く詳細に伝えた。これにはアインズも驚きを隠せない。

(^{オーバーロード・クロノスマスター}死の支配者の時間王だ!? あれはモンスターでもレベル80以上はあるし、プレイ

ヤーでも成るには結構面倒だぞ)

(そうだけど、戦った感じじゃプレイヤーじゃない。現に普通に倒せたし。でもさオーバードには経験値を消費して同族を作り出すスキルがあるだろ？　そんでもって正体不明の建造物が近くにあると来てる)

(俺たち以外のプレイヤーか、NPCが存在する可能性があるか、か)

(俺一人で突っ込んででも無駄だし、逆に空振りの可能性もある。何百年も大人しくしていたなら、これからも何も無い可能性だってあるしなー。というわけで報告してみたわけだ)

(確かにレベル100案件だ。困ったなー。最低でも俺とお前含めて4人組か、かなうならレイドでいかないとなー)

(ギルドが健在ならそれでも難しいけどな)

考え難いが、ギルドの体裁を保っている場合、ギミックやギルド武器の脅威にさらされる。城攻めが難しいのはここでもユグドラシルでも同じだ。

(今やっている仕事が終わる次第、そちらへ戻るよ。あちら側がおかしいことをしないか、見張ってみてくれないか？　動きがあつたら伝言メッセージで連絡してくれ。最悪でもお前だ

けはゲートで連れ帰る)

(了解。見張るだけはしておくよ)

伝言メッセージが終わると、セシルは少し興奮している自分に気づいた。ユグドラシル時代の準備のような懐かしい感覚がしていた。

入り口

単独行動は久しぶりだな、そう思いながらセシルは遠眼鏡でカツツエ平野の建造物を見張っていた。近くの窪地にはアンデッドが害虫のようにうごめいているのが見える。先日の戦闘以降知ったのだが死デス・ナイトの騎士はこちらの世界ではとても珍しいものらしい。

アンデッドは放置しておく、強い個体が湧く。恐らくはあのアンデッド溜まりの近くにオーバーロードがいたので、その影響があつたのだろう。

とうの建造物には動きがない。死オーバーロード・クロノスマスターの支配者の時間王は門番でもなかったのか？ あ
るいはプレイヤーはもうあの建物にはいないのか。外に分かるように動きが無ければ、
判断がつかない。

「……何かに似てるんだよな、あの建物」

建造物は見れば見るほどおかしかった。四角い建物を斜めにつなぎ合わせて時々方向を変えれば、ああなるだろうか。遠眼鏡の倍率を上げると屋上部分には何かふさふさしたものが敷いてあるようだ。

「まあ飯にするか……さっぱり分からんし」

インベントリから今日の食事を取り出すセシル。今日はホットサンドのようだ。焦げ目が付いたのはカルカのものだろう。いびつに歪んでいるのはレメデイオスのもので、完璧な形で作られているのはケラルトのもののような気がする。

保存食でも良いのだが、こうした仲間たちの心遣いも悪くないように思える。そうしてセシルがもそもそと昼食を取っているうちに伝言メッセージが届いた。

（今から転移門ゲートを出すぞ。準備しておいてくれ）

（ちょうど昼飯が終わったタイミングだ）

黒い球体の門が出現する。そこからアインズを先頭にして、虫の姿をした巨体、頭の後ろで手を組んだ褐色の少女エルフが続いた。

「ご苦労だったセシル。ダンジョンらしき建造物を発見したのは称賛に値する」

「ありがとうございます」

アインズがさり気なく入れてくるジエスチャーから『偉そうにしてゴメンね』というニュアンスが伝わってくる。セシルは曖昧に頷いて返した。

「我が国も大きくなった……フルメンバーとは言えんが、調査に必要な最低限の人材を用意した。既に顔見知りだったな。コキユートスとアウラだ」

「よろしくお願いします」

「前はシャルティアとしか会話してないよね？ よつろしくう！」

「アウラ、協力者二対スル態度ヲ忘レヌヨウ。第五階層守護者コキユートス。ヨロシク頼ム」

以前戦ったNPCとは違い、友好的な印象をセシルに与えるメンバーだった。特にコキユートスという蟲人めいた姿の悪魔からは敬意を感じる。

「なるほど。アレが件の建造物か。確かに異質なものを感じるが、敵意があるかどうかは入ってみないと分からないな。占領するにせよ情報が必要だ。今回はそのための調査だ。威力偵察……だったか？」

「この面子だと俺がヒーラーですか？」

「そうだが、内部から応答が無い場合はアウラの魔獣を先頭に突入する。多少の敵なら押しつぶしてしまえるし、最悪盾となってくれる。すまないな、アウラ」

「いい、いいいえ、いいえ。良いんですよ！ 至高の御方のために働くことこそあたしとあの子達の役目です！」

アウラはガッツポーズをしてみせた。真実、捨て石となつて働くことを望んでいるのだろう。こうして見ていると、異常な忠誠心のように思えてしまうが、これがNPC……被創造物の一般的な思考らしい。

小市民的な思考だとさぞ胸が痛むだろうと思つてみれば、アインズは意外と鷹揚にしている。子供にしてやるようにアウラの頭を撫でて、さてと切り替えた。

「では行つてみようではないか。未知を探求すべく」

アインズを先頭に、カツツエ平野を移動する。建造物までの道のりでは何も障害が起きず、肅々とことは進んだ。そこでアウラの魔獣達が合流してきた。全てが高レベルのモンスターで、彼女のテイマーとしての力がうかがい知れた。

「……ここまで結界も妨害もなし。間抜けと見るべきか敵意がないと見るべきか。いや、相手を過小評価してことを進めるべきではないな。コキュートス、ドアをノックしてみてくれ」

「カシコマリマシタ」

アインズとアウラの魔獣達に囲まれながら、固唾を飲んで見守る。巨大な手が扉に打ち付けられたと思った、そのとき手がドアに触れた勢いそのまま簡単に扉が開いていた。

「……内部二、ギミックト思シキ像ガアリマスガ、イカガイタシマショウ」

「ギミック？ まあ入り口に置くのは悪い選択ではないが……アウラ、一体任せられるか」

「おっまかせくださいい！」

獵犬の姿をした魔獣が中に飛び込んでいく。が、少なくとも入り口には何もなかったのかすぐさま無事に戻ってきた。

「ふんふん。とりあえず入り口のギミックは攻撃的なものではないようです」

「そうか。では入ってみるとしよう」

「俺が先に行きますよ」

並んで歩いて入り口に入った二人は絶句した。そこには確かにギミックと呼べるものがあつた。台に載せられた2メートルほどの像が手を振り上げては下ろしているのだ。

白を基調としてツルツルとした陶器状の猫の像だつた。左手には輝く金の板がはめ込まれ、右手を半永久的に振り下ろしている。

「招き猫じゃねーか！」

二人にしからぬ思いを込めた叫びが虚しく響き渡つた。

先鋒に

いきなり既知文化が襲来した衝撃が収まると、色々なところが見えてくる。ここは間違ひなくプレイヤーが関わった建造物であり、ユグドラシル時代は戦闘に積極的なギルドでは無かった可能性がある。

「アインズ様、招き猫って一体何ですか？」

「うむ。利益は色々だが、幸運を招く……要は縁起物だな。入り口に置いてあるということは本来なら歓迎の意味も込められているはずだが……現時点ではなんとも言えない」

「流石ハ、アインズ様。ソノヨウナコトマデゴ存ジダトハ」

「ははは。そう世辞を言われるまでの知識ではないぞ」

NPCに持ち上げられているアインズを見て、セシルは苦勞しているなあと平凡な感想を抱いた。以前から思っていたがNPCもこの世界にいる以上は、自我を持った生命体だと考えた方が良さそうだった。

「それでアインズ……様。今日のところはこの一階部分を調べるおつもりですか？」
「うん、そうだな。大事を取つての休息は重要だが、消耗してはいないうちに退くのも勿体なからう」

そうして招き猫の入り口部分を通りぬけると、広間のようになっていた。しかし、壁はパステルカラーで無駄に可愛らしくなっている。これではまるで子供向けの休憩所だ。

「うわっ。骨置き場がある」

アウラが言ったとおり、部屋の隅には骨が山積みになっていた。形からして何かの動物のものであり、周囲の色と合わさって不気味な印象を与える。

「どれ、見てみようか」

コキュートスにバフを山盛りかけていたアインズが、アウラとセシルの側によつてき

た。動物の頭蓋骨を一つ取り、少し集中した様子を見せると骨の山から頭蓋骨以外の骨が集まってきた。それらが合わさって一体の動物型スケルトンが出来上がった。

スキルでアンデッド作成を行ったのだろう。

「これは……ただの猫だな。レベル1のNPCという可能性もないではないが……そこから辺にいる普通の猫と見たほうがいいように思える。動物相手にどこまで理解できるか分からないが、記憶を読んでみよう。各々警戒を怠るな」

アインズが記憶を読んでいる間、警戒体勢に入る三人。アウラは弓を取り出し、いつでも撃てるよう構えている。コキュートスも4本の腕に3つの武器を持った。その真剣な様子は場にピリピリとした緊張感をまとわせるほどで、セシルはやや面食らった。

セシルには苛烈なまでの忠誠心などないが、シチセイを取り出し武器を構える。魔導国の冒険者は国家に所属する組織だ。最高位の上役といえばアインズになるわけで、それに伴う義理は果たすべきだろうと切り替えた。

のどかな内装の中、真面目に武器を構える光景ははたから見れば間抜けだろうが、ここにプレイヤーでもいればまさに死地である。気は抜けない。

アインズは随分と時間をかけて記憶への旅を行っていたようだが、生物の一生だ。そ

れも当然かもしれない。しばらくすると、骸骨の身でありながらふうと息をはいた。

「これ自体はなんのことはない猫のようだが、プレイヤーらしき人物達に飼われていたようだ。それと見えた光景と音声からして、ここはギルド拠点ではなく後から作った……いわば別邸のようだな」

「となると、ここにギルド武器があつたり、NPCがいる可能性はそう高くないことになる……のですか」

「断言することはできない。である以上、警戒を解くべきではない。しよせんは猫の感覚から得た情報に過ぎんのだからな」

「シカシ、アインズ様。問題ハ、ココノ住人ガ友好的ナ場合デハナイデシヨウカ？」

「いいところに目をつけたなコキュートス。ここに勢力があつた場合、友好的な関係を築いた方が利益となる可能性がある」

確かに敵対する存在でもないなら戦う意味はない。相手が真つ当な知性の持ち主なら交友が結べるだろうが……仮にこの建物に誰かがいた場合、外がどうなろうと引きこもっていたものだ。かつてのセシルと同じように。

だがアインズとしては高レベルの存在を放っておくという選択肢はないだろう。な

らば……セシルにしかできないこともある。

「上の階に突入する時に配慮が必要だ。例え何もない場合でも、警戒しつつ友好的にというのは難しい。猫にこだわっている傾向が見られる以上、アウラの魔獣も最適ではない。だから、俺が様子を見に行くというのはどうでしょう?」

「お前が? 変則的だな……通常はタンクが先頭をきるものだ。しかし、ヒーラーとしては戦闘能力も高い……だが、いいのか? 場合によっては自分が戦闘の先鋒になる。プレイヤーを蘇生できるかどうかはまだ未確定だ」

「武器も構えずに行ってもいいのは俺だけです。その二人を失いたくはないでしょう。最悪、集団相手になっても逃げられる可能性は俺が一番高い。まあ助けは期待しませんがね」

アインズにとってNPCはギルド仲間が残した……いわば甥っ子や姪っ子のようなものだった。セシルはそこまでは知らないが、アインズが彼らを身内として愛情を注いでいるのは理解できた。

ならば一番浮いているのは自分だと考えたのだ。

「万が一のときは『金鎖』をよろしくお願いしときます」
「分かった。任せるが良い」

大事が起こらなかつたら間抜けな会話だなと考えながら、セシルは階段に足をかけた。

望まない永遠

階段に足をかけて、慎重に登っていくセシル。臆病なようにも見えるが、踏んで発動するギミックなども「ユグドラシル」には存在した。それ専用のアイテムを作るプレイヤーもいたほどだ。

セシルは遙か昔の記憶が鮮明に残っていることにクスリと小さな笑みを浮かべた。もうこの世界にいる方が長いのに、故郷はあの時代だと心に未だに引つかかっている。

郷愁は置いておいて、現在に意識を戻す。このあたりの切り替えがセシルは非常に上手かった。飛行でわずかに浮きながら移動するか？ いや、罨を警戒するのなら空中をも疑わねばならない。そのあたり「ユグドラシル」なら何でも有りだ。今、この一時だけはゲーム時代のように物事を考えるべきだった。

覚悟を決めて足を進めて、次の階へと行く。決心してしまえば、行動は果断に。幸い防御面でも重装備には劣るが、低い方では無い。リカバリーは効く。

あつさり後半端な長さの階段を踏破して2階へと足を踏み入れた。

2階の内装は相変わらず可愛らしい雰囲気だが、黒を基調とした……そう服飾におけるゴスロリに似たフリルやレースをふんだんに使った代物だった。

「どなたか、いらつしやいませんか？」

友好的であることのアピールにわざと声をあげながら進んでいく。

「今日の仕事も終わりニヤ。キレイに片付けた。シーはキレイに片付けた。明日になればきつとご主人は褒めてくれるニヤ」

「……ニヤ、ね」

部屋に建つ4本の柱。そのカゲに隠れた中央から声が聞こえてくる。その言葉はセシルに向けられたものでもない。威圧的でも無い。

だというのに、セシルにおぞけを注ぎ込んだ。その声はつい最近までの自分と同じもの。彼女たちと出会う前の……ひどく虚しい声音。

姿が見えた。人間の半分ほどの大きさの猫がマントをたなびかせ、その背中には翼が生えている。確か、ケットシーという獣人種族の一つだと記憶が蘇る。

彼、もしくは彼女は浮いたまま、ブツブツと呟いていて話ができるような状態には見えないが、とりあえず声を投げかけなければ始まらない。

「すいません。ちよつと良いですか?」

「……誰ニヤ。シーの知らない人間がここにいる。ここにいるのはご主人達だけのはずニヤ。ああ、でもお客様には愛想よく。もてなして語らい、猫の偉大さを広める。でも、ここにいるのはシーだけ。他の奴らも呼ぶかニヤ。いや、でも……」

「あの……」

セシルは確かにコミュニケーション能力が高い方とはいえないだろう。だがそれを差し引いても異常な会話だった。いや、これは会話ではない。ただ眼の前の存在が独り言を呟いているだけだ。

セシルの脳内にアインズ配下のNPC達の姿が浮かぶ。絶対的な忠誠心。そして、設定に基づいた確固たる性格。仮に、そんな普通の精神を持つNPC生命体が永遠に孤独に過ごしたらどうなるか。報われぬ奉仕を続ける毎日、セシルとは違う結末を用意する。

そう。単純に、狂う。

セシルは知らないことだが、そうした存在はこれまでの歴史の中で幾たびか出現して、社会への圧倒的な敵として立ちはだかったり、崇拜の対象となった。

「ああ……そうかニヤ。お前、ご主人達のことを何か知っているニヤ？ そうじゃなければ現れない。それなら帰って来ないのも分かるニヤ」

鬼気が溢れ出す。数少ない拠点NPCとして力を注がれて創造された存在が、よく分からない理屈のままに行動を開始した。

「ちよつと待て。俺は敵じゃないし、ここへは調査に來ただけだ！ 落ち着くんだ、俺は猫嫌いってわけでもない！」

「シーはご主人を守る。ここにはいないご主人を。お前を殺せばご主人は帰って来る」「なぜ、そうなる!？」

吐く言葉に理屈など無い。一つのギルドの拠点NPC。すなわちレベルだけ見れば自分と同等の存在が、襲ってくる。

この戦いの生死に意味など無い。ケットシーは壊れていた。

前哨戦

〈ヘUGドラシル〉において、物理系戦闘職は現実リアルにおける運動神経を要求されることがあった。ことがあった、というのは万事がそれではゲームとして自由度を大きく削いでしまうからだ。ゆえに運動神経の良さ、あるいは武術の経験があることを求められるのは雲の上。上の上の戦士に限られていた。

だが、この世界では全員がそうだ。セシルは自分が徹底して我流の剣士であることを少し後悔していた。

「敵対行動！」

そう叫んだので、十数秒でアウラかコキュートスが増援に駆けつけるだろう。アインズも動かない性質の者ではないが、NPCは忠誠からしばし押し止めるはずだ。

拠点NPCが相手である以上、誰かが加われればそこで大幅に有利になるが……逆に言えばその十数秒はセシル一人での戦闘となる。

セシルは感覚で相手の強さを感じ取った。自由意志を持ったNPCはAIによる稚

拙な動きが無い。プレイヤーと同類同格だと見て良いだろう。この世界では珍しいレベル100との戦いになる。

ケットシーは異形種で、どちらかといえばマジックキャスターに向いた種族である。そのため高位の魔法を警戒して、セシルは一瞬で懐に潜り込む。

「バイパーソード」

インブロージョン
「内部爆散」

命中させた相手を鈍化するスキルと、対象を爆裂させる魔法が同時に放たれた。セシルの一撃でケットシーは空中から叩き落され、復帰に時間がかかっている。手応えは柔らかいモノを叩いたようで、断ち切るとはいかない。やはり同格の防御力は剣で切断しきれないという理不尽を実現した。しかしダメージは確実に蓄積される。

一方のセシルも第10位階魔法で体内を爆発させられたにもかかわらず、カートウーンのように口から煙を吐き出すというデタラメぶりだ。高レベルの肉体は内臓まで強靱になっているのだろう。

「フー！ シャー！」

「これは飯が入らなくなりそうだ！」

煙は吐き出されるに任せたまま、倒れたケットシーへと剣を振るう。ケットシーも爪で応戦するが、肉体の一部である爪の性能は、プレイヤーが所有する武装に劣る。

セシルとケットシーの能力差は装備によるところが大きいの。異形種は素の能力値が高い反面、どうしてもどこかでデメリットを有する。かつてはバランス取りの一環でもあったのだろうが……あるいは単に主の趣味かもしれないがケットシーの装備は軽装にもほどがあった。

「おっ待たせー！」

十数秒は経過した。扉を吹き飛ばしながらアウラが弓を携えての乱入だ。魔獣たちがなだれ込んで来ないのは、狭い室内ということを考えてだろう。

「敵は一体。硬めのマジックキャスターで、レベルはおそらく100だ」

「おっけー。レベルが同じならこのまま弓で援護するね」

「またご主人の邪魔者かニヤ！ 掃除、掃除をしなけりや……」

ぶつぶつとケットシーが呟きながら、浮き上がるのを横目にセシルは大治癒ヒールで自身のダメージを回復させた。ここがセシルのビルドのいやらしいところである。強大な火力に欠けるところはあるもののスキルで敵にデバフを、自己にバフをかけて回復までする。

ともあれ単純に数が倍になったことで、ケットシーの敗北はほぼ確定したようなものだ。アウラの直接的な戦闘能力は低いが、後方から弓による援護が可能だ。

「コキュートスは？」

「アインズ様のそばに念の為付いてるよ。それより、何この変な生き物。ぶつぶつと気色悪いんだけど……んーティマーとしてはそそられないなあ。なんか人間っぽいし」

「そんなものか。空を飛べるようだから、この地形のまま戦った方が良い。下手に外に出ると面倒そうだ……？」

わずかな振動を感じ取った瞬間、3階へと続いているであろう扉がぶち壊されて、白い虎が乱入してきた。ここは敵地。こちらと同様に敵にもまだ札があったのだ。

猫・猫

入口にあつた骨といい、ケット・シーの言動といい、この建物を作つたものたちは猫にこだわりがあつたのだらうと推測はつく。自分の領域だ、好きなもので埋めたいというのも分かるのだが……はてさて。

「これも猫といえば猫なのかね……！」

セシルの独り言にうなりで返す白虎。どうやらケット・シーとは違い言葉を喋れる設定ではないようだ。だが戦闘行動に支障がないぐらいに知能があることは、ケット・シーを後ろにした配置でうかがえた。

セシルも同じようにアウラを後ろにして白虎と対峙している。噛みつきこうとする白虎の牙と口内の赤さに慣れない者は怖気づくだろうが、セシルは野生動物やモンスター相手に慣れていて、直刀を顎肉に押し込みたいが、予想以上に牙が長くて上手くいかない。

今更だが虎と人間が力比べのような格好で組み合っているのは、なんとも奇妙な光景

だった。

「つばぜり合い……というより牙ぜり合いといったところか。押しきれないあたり、こいつもレベル100のNPCか……」

「余裕あるねえ。あたしはどっち狙ったほうが良い？ 個人的にはその虎が気になるんだけど……」

「他に動きがなければ、マジックキャスターが鬱陶しいので牽制してくれ。けど何か動かせるのなら、一気に邪魔な後衛を切り捨てたいかな」

「オツケー。ここじゃフェンは動けないから……入れる子は入ってきて！ それじゃ、虎を足止めだー！」

命令とともになだれ込んできたのはレベル70台の魔獣たちだ。セシルはなんとなくしか感じ取れないが、この魔獣たちはアウラのテイマーとしての能力で強化されている。それでも多少のレベル差はあるが、白虎でも手こずることは間違いない。

「今だー！」

その間にケット・シーを叩く。強力な魔法を唱えようとするが、アウラのレインアロー「天河の一射」の一撃によって妨害される。発動に成功しても、一撃では倒れない。セシルは直刀を構え、全力でスキルを発動させる。

「キング・オブ・ペイン！」

強力な一撃に加え、命中すれば各種ステータスの下降、さらには即死効果が付与されている。フェンサーのスキルでも最高の一撃だ。流星に即死には耐性を持たせているだろうが……威力の上昇だけで十分だ。

未だに攻撃を加えようとしていたケット・シーは隙だらけだった。キング・オブ・ペインはケット・シーの首を捉え、宙から叩き落とした。

「シャー！…このシーがご主人の留守を……」

地面に叩き伏せ、通常攻撃とは比べものにならない攻撃スキルは硬い肉体へと食い込んでいく。とうとう首から血しぶきが上がった。さらに今のケット・シーは位置を固定化されている状態である。その隙を逃す手はない。アウラの強力な射撃がケット・シー

の頭部を撃ち抜いた。

ここに狂った生は終わりを迎えた。もしかすればそれは救いになったかもしれない。もう一方の白虎も数に押しつぶされた挙げ句、同格二人も加われれば末路は決まっていた。

「ご苦労……ふむ、私も加わった方が良かったかな？」

戦闘後、大治癒^{ヒール}で自身とアウラのダメージを回復させていると、アインズがコキュートスとともに入ってきた。あっさりと決着したようだったが、乱戦と回避不能な魔法などでそれなりのダメージは負っていた

「まあ、王様が出るほどでもなかったですよ。確かにレベルは高かったです、能力の割り振りは随分とちぐはぐ……言ってみれば趣味的でしたね」
「ふむ。ロールプレイのギルドだったのかな」

といつてもアウラの魔獣たちはかなり傷ついていた。そちらの方も回復させていく。腐つてもレベル100の敵だったということだ。そうして、周囲に気を配っているとア

ウラがニカッとセシルに笑いかけた。

魔獣たちも等しく回復させたことで好感を得ることができたようだ。

白虎が降りてきたことからして、次の階層には既に何もいない可能性が高いが、準備を整えてから進んでいった。

時の流れに

サバイバルゲームよろしく、3階に突入すると同時にセシルが入口の左側を、アウラが右側へと武器を構える。しかし、やはり先程の白虎しか配置していなかったのだから。この部屋には他に誰もいなかった。

「コキュートス、4階への階段の前で警戒している」

「畏マリマシタ」

アインズも大分警戒を緩めているようで、当面の安全が確認されると部屋へと足を踏み入れた。次の階への扉へはコキュートスが四本の腕でハルバードとメイスとブロードソードという四刀流で向かって、乱入者を警戒している。汽笛のように冷気を放出していて、やる気がうかがえた。

「と言っても、戦力の逐次投入は愚策というからな。4階にも敵はいないだろう。それでも備えておかなければな。石橋も叩いて渡れというだろう」

「さっすがアインズ様！ アインズ様がおっしゃるなら絶対安全ですよ！」

アウラの追従でコキュートスの吐いていた冷気が止んでしまった。コキュートスは今回一度も戦闘していないのだ。

セシルとしてはそのあたりは身内で処理して欲しいので何も口出ししなかった。

「これまでの客を通すような造りと違って、実用的になりましたね」

セシルは現実世界にあつた猫カフェを思い出していた。1階と2階が客をもてなすメインでそこよりは倉庫や従業員通路……という構造だと覚えばかりやすい。

この建物自体は排他的雰囲気は無く、むしろ歓迎を主張しているように思われた。ケット・シーや白虎と戦闘になったのは住人が狂ってしまっただけなのだ。

「ふむ。倉庫のようだ……アウラ、セシル！ 全ての棚などから物品をかき集めるのだ！ 調度品なども忘れるな！」

「……はあ」

「わっかかりましたあ！」

セシルからすればイマイチ意図の見えない命令が飛んだが、アウラと話している間に納得した。

ユグドラシル世界の金貨は物品をエクステンジボックスに入れないと手に入らない。そして、現実の通貨も何らかの手段で得なければならぬ。

ということでも火事場泥棒的な行為もアインズ・ウール・ゴウンには必須という。拠点を持つ彼らだからこそその悩みだ。

「それでも国家規模になってるんだから、何とかならないものなのかね。こういう壺の価値とか分からないし」

「む、国家運営に必要な分は流石に何とかなってるよ。スケルトンたちで農場や鉱山を活動させる……まさに魔導国らしい生産さ。帝国とかドワーフ国との交易もあるし……」

「ほー、なら何に使われるんだろう」

「そこはアインズ様の深いお考えあつてのことさ」

深い考え……あるんだろうかとセシルは微妙な気分になる。実際にはアインズが国

庫に手を付けるわけには行かないと考えて、細かく動くときの資金にしているのだ。大枚ではなく、小銭が必要になるときもある。

冒険者モモンとして活動することはほとんどなくなったとはいえ、使いを出したり、お忍びで動きたいときもあるのだ。なので深い考えというよりは浅い事情というところだ。

魔導国は望めば望むだけアインズに金品を献上するだろうが、アインズとしてはそんなことは望んでいない。正確には望むと期待されたり、支障が出たりと恐ろしくてできないのだが。

「結構、色々あるものだな。何に使ってたか分からない飾りとか……宝石付いてるから磨けば価値が出るのか？ 考古学的な価値とか……」

結局セシルとアウラは装飾品と調度品のほぼ全てを一箇所に集めて、アインズがそれをインベントリに収めた。

「さて、次の階だな。外から見た限りではそろそろ終わりだろうか……ここは結局何を目的として建てられたものだったのか」

「分かると良いですね。先に行きます」

セシルは自分から次の扉へと手をかけた。いい加減慣れてきたことでもあるし、この建造物への好奇心も大体満たされてきた。

扉を開いた途端、埃っぽい空気が舞った。この階はどうも他の階と異なつて空気の入れ替えも何もなされていまいようだった。視界も悪い。

「ダーク・ヴィジョン
暗視」

暗闇を見通せるようになる魔法を使い、セシルは慎重に進んだ。だが、なにも出てくる様子はなく念入りに確認した後、窓を開き外の空気を呼び込んだ。

「敵影なし！」

報告を受けてアウラ、コキユートス、アインズの順に入ってくる。窓から入ってくる光で空間にあるものが見えてくる。

「ここは……さっきの階とは違って何もなさそうですね。目立ったものといえば、この人骨と本棚ぐらい。ベッドもありますが、人が住んでたのかな」

「NPCという可能性も高いな。寿命がある種族なら普通に老化して死ぬだろうからな。さて、貴重な本があればいいが……これは」

バサバサと本棚の中身をインベントリからアイテムボックスに無造作に突っ込んでいたアインズが動きを止める。それは本といっても随分と原始的な感じを放つ、手稿と言ったほうが良い代物だった。

「ふむ。これはモノクルを使わなくとも読めるな……」

探索も終わったため弛緩した空気の中、アインズがページをめくる音だけが響く。しばらくすると今にも崩れそうな本がパンと閉じられた。

「文字は欠けていたが、どうやらここはネコ何とかというギルドの別邸だったようだ。しかし、ギルド構成員たちが寿命で倒れてしまうとNPCたちが変調をきたし、暴走した結果として拠点は壊滅。寿命のない種族だけがあの2体だったようだな」

「NPCが暴走って……それらしい話が残ってないということはレベルはさほど高くなかったのか？」

「分かんが……我がギルドがそのようなことはないよう努めていかなければならないな……」

「アインズ様……」

どこことなく物寂しい雰囲気の中で謎の建造物探索は終了を迎えた。アウラとコキユートスは主人に哀願するような目を向けていた。

セシルは“金鎖”の3人に会いたくなってきた。いずれ別れが来てしまう仲間に

……

事務と得意な彼女と

カツツエ平野での活動はなかなか刺激的ではあったが、魔導国にとってはあまり利益のない探索ではなかったかとセシルは思う。アインズの中身を知る身としては彼にとって良い息抜きになったとも感じる。

“金鎖”としては純粋に仕事だった。魔導国の冒険者は自由ではあるが、国家に取り込まれている。セシルを貸し出したのも役割の一つである。

もっとも知名度としては“金鎖”の中でも見目麗しいカルカの方が上だ。セシルが多少遠出をしても揺るがなかったのはそのためだろう。

帰還してもスムーズに日常は取り戻された。セシルとしても三人に合流できるのは喜ばしいことだ……多くの意味で。

「お前の腕で苦戦する相手がいるというのも、信じがたいな。そんなやつが気軽にいは世界が危うい」

「なんだ、剣の言う事を信じないのか？ 大体そういう存在がいるというのは、魔導王やモモンが証明しているだろう。それに噛み合わせ次第では俺でもあっさりと負ける

ぞ」

「二応こういつた場では魔導王『陛下』と呼んだ方が良いんじゃないですかねー。それと仕事してください。うっふふふ、私ばかりなぜこんなに処理済みになっている紙があるんでしょうね」

あー、と冒険者組合の中で無気力な同意が広まり皆がのろのと動き始めた。国の機関になるにあたって冒険者は自由だが、報告などの手間は増加した。そこで半冒険者ともいうべき『職員』が誕生した。彼らには一定額の手当が支給されるが、いかんせん向き不向きというものはあった。

そんな中、純粋に冒険者であるはずのケラルトがなぜか腕をふるうことになっていった。

「それはな、ケラ。俺達が一枚書いている間に、お前は三枚終わらせているからだよ」
「いえ、そもそも、なんで『金鎖』が手伝っているんですかというわけで！」

意外に読み書きできる冒険者は多いものだが、国へ提出する作業だ。書式作りから始めており、ぶっちゃけ現在の体制自体作り上げたのはカルカとケラルトだ。なので皆が

目をそらした。レメディオスもそらしている。

「はあ……セシルさんが意外にできているのが不思議ですが。速度は遅いですが丁寧な文章なので、やり直しがなくて助かります」

「人に歴史ありというか……ほとんど忘れていたんだが、体は動くもんだ。アインザックさん『職員』の教育を早めてくださいよ。ラケシルさんでもいいですけど」

元々冒険者組合長だったアインザックと、魔術師組合長であるラケシル。非公開だが聖王女だったカルカと神官団団長をつとめていたケラルト。ついでに元の世界での記憶をうろ覚えで持っているセシル。都合五名の車輪である。

「魔術師組合はもう解散したも同然だ。一人二人は手伝いに回しても良いかもな」

「実際、早くしないとケラが動けないので、そうしてくれると助かる。冒険者の呼び戻しの方は上手くいっていますか？」

「いや、やはりというか……こればかりは仕方ない。戻りたい者もいるようだが、一度移籍した手前……というのもあるようだな」

冒険者養成所の草案は後回しでも良いか、などと言い合いながら仕事を進めていく。奇妙な一体感心地よいが、これが常態化するのには避けねばならないことをセシルは知っている。人はかつてそれをブラック企業と呼んだ。

「やれるところまではやりますが、明日からはカルとケラは返してもらいますよ。元々我々は探索の一番槍として雇われたわけですし」

「むむ。我々もこれではいつ復帰できるか分からんし、仕方ないか」

結局、仕事は夜まで続いた。セシルたちは冒険者組合からそう遠くないところに、一般的な住居を借り上げている。高位冒険者が使うような黄金の輝き亭に毎回泊まるよりこちらの方が気が楽だ。アダマンタイト級冒険者なのにせこいと思われそうだが、カルカたちは自国へ戻ることでできない身。そのため自分たちだけのスペースが欲しかったのだ。

夜中、居間でケラルトは一人で眠れずにいた。誰かが起きていると動き出すセシルがそれを感じて、やってきた。

「姉様かカルカ様のところになくて良いんですか？」

「失敬な。純粹に眠れないやつを見舞いに来ただけだ」

「それはそれは……私はそう簡単には落ちませんからね、うつつつつ」

「まあ努力してみよう。眠れない理由は故郷の聖王国か？」

「そうですね……正確には東のアルビオン丘陵の書類があつたからですが……いまさらですが、私達はあそこへの調査依頼は受けられないでしょうね。親魔導国になつた聖王国ではかつての権力者は邪魔でしかないのですから」

言葉には出さなかつたが、セシルがそうした密約を取り付けることで生かされていることも察しているのだろう。頭が良いことも考えものだった。カルではなくカルカというのもあえて呼んでいるのだろう。

「それ以前に死人だしな。受け入れられるわけもない。直接確認したわけではないが、聖王国は魔導国にとって都合の良い国に変えられていくのだろう」

「……カルカ様の理想についてよく三人で話し合つたものです。途方もない夢でした。もう私たちにとつて夢ですらなくなつたと思うと……笑えますね」

セシルは座つたケラルトを後ろから抱きしめる。身内にだけ愛情を向ける彼女にも

郷愁の念はあつたのだ。

「俺にも国をどうにかする力はない……できるのは枠組みの中でお前たちを守ることだけだ。それでも功績をあげて、いずれ故郷の土が踏めるよう努力してみよう。魔導王の犬である俺が言うことを信じてもらうのは難しいだろうが……」

「うつつつつ、信じていますよ。あなたがお人好しということは……私の趣味は人間観察なんですよ」

竜王国へ

セシルはエ・ランテル旧都市長館の応接間に待たされていた。メイドがお茶を淹れてくれたあたり、なにか敵意があつてのことではないようだ。

「金鎖」は現在、魔導国の冒険者である。他国の冒険者と違うのは国家に属しているという点にある。となると、なにか頼み事……表向きは依頼があるのだろう。それはそうと休憩時間を求めてもいるはずだ。「金鎖」のリーダーはカルカであつてセシルではない。

待つことしばし、茶色のおかつぱ頭のメイドが扉を開いた。セシルは茶番と思いながら、立ち上がり頭を下げる。

「ご苦労。頭を上げて良い。インクリメント、デクリメント、すまないが席を外してください。内密の要件があるのだ」

メイド二人は新参者と主を二人きりにしていいかどうか考えているのだろう。きつい目を向けた後、主人の言うとおりに従った。アインズの言は絶対なのだろう。

柔らかい椅子にアインズは身を沈めた。セシルもそれにならって座りなおした。

「ふう。ここでは軽い会話もままならんな」

「拠点ほど防音仕様というわけではなさそうだな。あまり大きな声では話せない……まあある程度かしこまればいいか。それで、今回の依頼は一体？」

「話が早くて助かる。竜王国という国を知っているか？」

セシルの頭の中に地図が浮かぶ。カツツエ平野から南東にある国だ。ピーストマンの国と戦争中で、交通の便が悪い。

「位置と噂程度なら。どうやって行くかはともかくな」

「うむ。知つての通り我が魔導国はアンデッドを貸し出してもいる。大抵の場合は単純作業をするスケルトンが主だが……ここは戦力としても求めてくる珍しい国だ。アンデッドを嫌う法国とも交流があるので現在は競争の真つ最中だ。ここは穏便に友好国としての可能性を模索したい」

「そこで援軍として冒険者を？」

「うむ。法国も人間種の援軍なら文句をつけようもあるまい。そのうえで日をあらため

てプレゼンテーションを行い、良い顧客となってもらおう」

聞いていると至極真つ当な話で、もつと難しい話を押し付けられるかと思っていたセシルは緊張を解いた。レベル100であるセシルがやられることは早々ない。加えてアダマントタイト級冒険者としての知名度も使える。

「あまり人数が少ないのも体裁が悪いのでな、適当に冒険者組合の方にも依頼を出しておく」

「分かった。ビーストマンは滅ぼさない程度に……停戦ぐらいを基準にすればいいんだな」

「お前は本当に話が早い。やりすぎてしまうと、レンタル業に支障が出る。争いの緊張感は保ってもらわないとな。それになんというか……滅ぼしてしまうと誰かの計画を邪魔しそうでな」

乾いた笑いがアインズから漏れる。普通のプレイヤーが権力者になるとろくでもなと言っているかのようだ。乾いた代わりにセシルが茶を手に取り飲み始める。

こうした細々とした布石のときにはセシルは魔導国からすれば非常に良い駒だ。頭

脳をになうアルベドやデミウルゴスのように頭が良いわけではないが、とりあえず考える頭はついているとわかっていい。戦闘能力は非常に高く不慮の事故でも生きて帰つて来れる。アインズからすれば自分と同じ目線に加えて、現地の常識をぶち壊したりしないあたりが特に良い。

加えてナザリツクは幹部が少なく、それぞれが地域全体に対して対処しなければならぬ状態だ。それぞれが諜報や流通といった専門分野を抱えて駆けずり回っている。

そんなセシルだが、使われていることには当然気づいている。だが、上に立つ気はないのでこれはこれだと、楽しんで使われている。

さて、今回の舞台は竜王国と決まった。決まったは良いが、竜王国は四方を何かに囲まれている。山であったり敵国であったり、湖だったりする。陸路に行くにはピーストマンの国か、山を越えるしかない。一番分かりやすいのはカツツエ平野の南にある巨大な湖に行くことだ。ただ、海と接していない魔導国には船が無いだろう。そうセシルは思っていた。

「移動方法は？ カツツエ平野の山すそを移動していくか？ 飛行フライも併用すればそれなりの時間で着くだろう？」

「いや、我が魔導国にも船はある。一隻だけなので今後は何隻か作っておくか」

「まさか……」

「ああ、あの船だ」

というわけで……冒険者たちはボロボロの船の上で顔を引きつらせながら立っていた。船はボロボロでどう見ても航行できる状態ではないのに、動いている。というか水の上に浮かばずに自身が出す霧の上を滑っていく。

船員は全員がアンデッドで、船長もエルダーリッチだ。

そう。かつてはカツツエ平野を走っていた謎の巨大幽霊船だ。確かに魔導国がカツツエ平野を統治してからはこれも傘下に入っていた。

「あー、こんな状況だが今回はよろしく頼む。俺が『虹』のリーダーを努めているモツクナツクです」

「『金鎖』のカルです。ご一緒できて光栄です」

「いえ、そんな……足手まといにはならないようにします」

ミスリル級冒険者であるモツクナツクは、魔導国支配後もエ・ランテルに残っていた貴重な人材だ。交渉が上手く行ってピーストマンとの戦闘になれば、戦力に数えられる

だろう。この船に乗る勇気を持つ男なのだから。

「しかし前が見えんな。本当に竜王国の港町に向かってるんだろうな」
「まあこれまでも行き来しているし大丈夫じゃないですかねー」

今回の依頼にはやる気十分なレメディオスといつも通りのケラルト。
虹”を乗せて自分で出した霧をかき分けながら、幽霊船は航海を続けた。

”金鎖”と”

港町にて待機

幽霊船は無事に竜王国の港湾都市へと到達した。しかし霧を発生させる船の入港は他の船と、住人たちにとって大変に迷惑であった。これまで魔導国との小さなやり取りで船を使った場合もあつたらしく、アンデッドの船に恐慌などは起こらなかった。

内心がどうであるかは言うまでもない。時間をかけてでも陸路で来たほうが良かったのではないかと思いつつ、一行はタラップからはしけへと乗り込んだ。

明らかに警戒の目で見られている中、幽霊船は冒険者を無事に送り届けると、再び元の道を伝つて帰つて行く。

「おい、あいつ、私達をおいて行つたぞ」

「帰るときはまた来てくれるんだろう。多分……」

人間種の援軍という依頼には乗り気だったが、アンデッドの船は乗り心地が良くなかつたのであろうレメデイオスは不満をもらしていた。忘れがちになるが「金鎖」は聖職者系の構成になっている。カルカもケラルトも口には出さないが不満を溜め込ん

でいても無理はない。

もつとも大抵の生物はあの船に好意的にはなれないだろうが。そう思いながら地上に上がる。上陸を果たした冒険者一行にまだ警戒の目が向けられている。

「早く街を出たほうが良さそうですね……」

「まあ現地住民と友好を結ぶのは難しそうだが……正式な依頼だし、あまり慌ててもないんだ。こういうときは先触れを出した方がいいかな？」

「ですが、地理に明るい方がいません。ここはこの街の兵にお願いするといいでしょう」

モックナツク、セシル、カルカでああでもないこうでもないかと相談しあう。なんとなくこの先も見ることになりそうな光景だ。

わざとゆっくり歩いて、衛兵のいる門まで向かって事情を話す。警戒心を見せていた兵士たちもカルカの笑顔にかかれればあっさりと陥落した。馬を飛ばし、一両日中には戻ってこれるといふ。

「さて、二日の空き時間だ。羽根を伸ばして、けれど大人しくか。できるかな……”虹”はこういう経験豊富なのか？」

「ええまあ。冒険者を信用しないって連中はどうしたっていますからね。そういうときはお行儀よくすることもありますが……へへっ酒が出るところを用意しないと不満が出ますよ」

「うちにも一人似たノリがいるよ。宿と酒の確保か。あとで経費として請求するか……」

「そう来ると思つて、うちの連中に宿を抑えにやらしてます。酒は樽ごとで、持ち込みます」

「本当に慣れてるな！ 請求書は俺に回しといてくれ。魔導王陛下に払わせる」

「あー、以前話しましたけど陛下はああ見えて寛容ですよね」

「……うん」

モックナツクの目にはわずかに敬意が宿っていた。まさかアインズに好感を持つている冒険者がいるとは思っていなかったセシルは、『ズレているだけだ』という言葉をごらえた。世の中には勘違いさせておいた方が良いこともある。

「あれ？ ケラはどこ行つた？」

「神殿の方に行きました。小さな街でも神殿勢力はあるものですからね。祈りを捧げた

り、奉仕活動をすることで少なくとも私達は敵ではない、ということを示しに行つたの
でしょう」

「レメは……嫌な予感しかないな」

「ですが、虹の方々と一緒ですから、流石に昼から羽目を外さないはず……」

「……酒樽をもう一つ買いに行くか」

カルカとセシルは並んで歩き出した。一旦元の港へと戻って色々を見て回る。小さい
いが港町だけあつて活気がある街だ。漁師たちは仕事をして、今日の夜に魔導国の船が
来たことを語り合うのだろう。

来たときは気付かなかつたが、港近くには看板が立っていた。

「ド・ラ・ポエルトへようこそ……街の名前か。客の出入りも意外とあるのか？」

「確か竜王国には港町はそう多く無いはずだ。湖の対岸にあるスレイン法国から船が
来るのではないでしょうか？」

「あそこは人間種至上主義だったな。ピーストマンとの戦いに参加しているのかな……
いかな、休みに考えることでもないか。お、露店があるぞ」

近くに寄っていくと老婆が貝殻などの簡単な素材に、細い鎖などをつけてアクセサリを作っていた。眼の前のゴザにはその成果が並べられている。

近寄ってきたセシルにはちらつと目をやっただけで、作業に戻る。日焼けして気の強そうな老人だった。

「どうも、売れますか？」

「客がろくに来ないのに売れるもんかね。けどここで売れなくとも、湖が近くにない王都では多少売れるからね。王都行きの荷車に載せるのさ」

「淡水の貝なのにキレイな白色だな」

「黒や緑の貝は装飾品に好まれないからね。で、冷やかしならお帰りよ」

「それじゃ、その……耳飾りを3つ。銀貨でいいかね？」

「あいよ。客なら客と言いなよ」

老婆はひったくるように数枚の銀貨を受け取った。多分、普通の価格より高かったのだろうとセシルは苦笑した。材料費がほとんどかかっていないだろうし、戦争中にそう売れるものでもない。

「とういわけで耳出せ、カル」
「えっあつ」

セシルはカルカの耳に螺旋貝殻のイヤリングを付けた。旅に出たのだから土産物の一つぐらいは良いだろう。

「強引ですね……でも、ありがとうございます。似合ってますか？」

「似合つてはいるが、お前のキレイな金髪の近くだと負けてしまうな」

「ふふっ……ありがとうございます。でも直接付けるのは私だけにしてくださいね。3つ買わないといけない人なんですから」

「うぐっ。でもそれぞれ別のモノを贈るのもな……さて、酒蔵を探すとするか」

“虹”が抑えていたのはこの街で一番の宿であり、セシルとカルカが帰つて来た頃にはもう宴が始まつており。酒樽を持った二人は英雄のように迎え入れられた。

その夜、結局酒樽をさらにもう一つ買う羽目になり、これも経費で落とせないかなと思つてセシルだった。